



|                     |                                                                                                 |
|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 日本語疑問文の統語語用論的研究                                                                                 |
| Author(s)           | 馬, 穎瑞                                                                                           |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                           |
| Degree Name         | 博士(文学)                                                                                          |
| Dissertation Number | 甲第12512号                                                                                        |
| Issue Date          | 2017-03-23                                                                                      |
| DOI                 | <a href="https://doi.org/10.14943/doctoral.k12512">https://doi.org/10.14943/doctoral.k12512</a> |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/65375">https://hdl.handle.net/2115/65375</a>               |
| Type                | doctoral thesis                                                                                 |
| File Information    | Ma_Yingrui.pdf                                                                                  |



博士学位論文

日本語疑問文の統語語用論的研究

北海道大学大学院文学研究科

馬 穎瑞

平成 28 年度博士学位論文

日本語疑問文の統語語用論的研究

北海道大学大学院文学研究科

専攻 言語文学

指導教員 加藤重広

氏名 馬 穎瑞

# －目次－

|           |                     |    |
|-----------|---------------------|----|
| 第 1 章     | はじめに                | 1  |
| 1.1       | 研究対象と目的             | 1  |
| 1.2       | 本論文の構成              | 2  |
| 第 I 部     | 日本語疑問文の記述と機能分析      | 4  |
| 第 2 章     | 先行研究の概観と本研究の立場      | 5  |
| 2.1       | 先行研究の概観             | 5  |
| 2.1.1     | 記述文法における研究          | 5  |
| 2.1.1.1   | 疑問文の定義              | 5  |
| 2.1.1.2   | 疑問文の分類              | 6  |
| 2.1.1.3   | 疑問詞                 | 7  |
| 2.1.1.4   | 疑問文の文末形式            | 8  |
| 2.1.1.4.1 | 「かな」                | 8  |
| 2.1.1.4.2 | 「かね」                | 8  |
| 2.1.1.4.3 | 「か」                 | 9  |
| 2.1.1.4.4 | 「のか」                | 10 |
| 2.1.1.4.5 | 「だろう」               | 13 |
| 2.1.1.4.6 | 「だろうか」              | 13 |
| 2.1.1.4.7 | 「ではないか」             | 14 |
| 2.1.1.4.8 | 「のではないか」            | 15 |
| 2.1.1.4.9 | 「つけ」                | 15 |
| 2.1.1.5   | 疑問文における「傾き」         | 16 |
| 2.1.1.6   | 否定疑問文               | 16 |
| 2.1.1.7   | 反語の疑問文              | 19 |
| 2.1.1.8   | 問い返しの疑問文            | 20 |
| 2.1.1.9   | 疑問形式の従属節            | 21 |
| 2.1.1.10  | まとめ                 | 21 |
| 2.1.2     | 音声学的観点からの研究         | 21 |
| 2.1.3     | 語用論的な研究             | 22 |
| 2.1.4     | まとめ                 | 24 |
| 2.2       | 本研究の立場              | 25 |
| 2.2.1     | 疑問文の定義              | 25 |
| 2.2.2     | 疑問文として取り扱う範囲        | 26 |
| 2.2.3     | 用例の収集               | 30 |
| 2.2.4     | 疑問文の使用状況            | 31 |
| 2.3       | 本章のまとめ              | 33 |
| 第 3 章     | 疑問形式の意味機能についての基礎的考察 | 34 |
| 3.1       | 疑問形式に関する諸要素         | 34 |
| 3.1.1     | 疑問詞                 | 34 |
| 3.1.2     | 文末形式                | 38 |
| 3.1.3     | 文末イントネーション          | 40 |

|                                        |           |
|----------------------------------------|-----------|
| 3.1.4 まとめ .....                        | 45        |
| <b>3.2 形式と機能の対応関係 .....</b>            | <b>45</b> |
| 3.2.1 疑問形式で疑問を表す疑問文 .....              | 47        |
| 3.2.1.1 疑いの疑問文 .....                   | 47        |
| 3.2.1.2 問いかけの疑問文 .....                 | 47        |
| 3.2.1.3 問い返しの疑問文 .....                 | 48        |
| 3.2.1.4 命題確認要求の疑問文 .....               | 49        |
| 3.2.2 疑問形式で疑問を表さない疑問文 .....            | 50        |
| 3.2.2.1 不完全受容 .....                    | 50        |
| 3.2.2.2 知識確認要求の疑問文 .....               | 51        |
| 3.2.2.3 反語解釈可能の疑問文 .....               | 51        |
| 3.2.2.4 共感形成の疑問文 .....                 | 53        |
| 3.2.2.5 非難の疑問文 .....                   | 53        |
| 3.2.3 まとめ .....                        | 54        |
| <b>3.3 疑問文の運用に関わる要素 .....</b>          | <b>54</b> |
| 3.3.1 話し手の知識状態・発話意図 .....              | 55        |
| 3.3.2 聞き手の知識状態 .....                   | 55        |
| 3.3.3 社会的位置関係・発話場面 .....               | 56        |
| 3.3.4 文末形式の使用におけるジェンダー上の差異 .....       | 57        |
| <b>3.4 本章のまとめ .....</b>                | <b>60</b> |
| <b>第 4 章 疑問文発話における聞き手への要求の諸相 .....</b> | <b>61</b> |
| 4.1 記述文法における疑問文の要求性 .....              | 61        |
| 4.2 語用論的に見る疑問文の発話的要求 .....             | 63        |
| 4.2.1 要求の定義と有無の判断 .....                | 63        |
| 4.2.2 要求の種類 .....                      | 65        |
| 4.2.3 要求の特徴 .....                      | 66        |
| 4.2.4 行為要求 .....                       | 67        |
| <b>4.3 本章のまとめ .....</b>                | <b>68</b> |
| <b>第 5 章 疑問文発話による話者交替の要求 .....</b>     | <b>69</b> |
| 5.1 話者交替の形成 .....                      | 69        |
| 5.1.1 発話の種類とターンの形成 .....               | 69        |
| 5.1.2 ターンの終了と発話権の委譲 .....              | 70        |
| 5.2 話者交替における聞き手の捉え方 .....              | 71        |
| 5.2.1 先行研究における聞き手の捉え方 .....            | 71        |
| 5.2.2 本研究での聞き手の捉え方 .....               | 72        |
| 5.3 疑問文発話による話者交替の要求の有無 .....           | 76        |
| 5.4 疑問文発話における話者交替の要求性の強弱 .....         | 79        |
| 5.4.1 強い TRP になる疑問文発話 .....            | 80        |
| 5.4.2 弱い TRP になる疑問文発話 .....            | 83        |
| <b>5.5 本章のまとめ .....</b>                | <b>84</b> |
| <b>第 II 部 疑問文の使用動機と談話効果 .....</b>      | <b>86</b> |
| <b>第 6 章 「かな」をはじめとする独話形式の使用 .....</b>  | <b>87</b> |
| 6.1 独話形式の問いかけ的使用 .....                 | 87        |

|                                     |            |
|-------------------------------------|------------|
| 6.2 弱い問かけの語用論的特徴 .....              | 89         |
| 6.2.1 必須ではない回答可能の想定 .....           | 89         |
| 6.2.2 回答不可能な場合の使用 .....             | 90         |
| 6.2.3 問かけの力を弱めるストラテジー .....         | 90         |
| 6.3 弱い問かけの使用動機 .....                | 91         |
| 6.4 応答としての「かな」文の語用論的解釈 .....        | 92         |
| 6.5 疑問文末形式の「かね」 .....               | 93         |
| 6.5.1 「かね」の捉え方への再検討 .....           | 94         |
| 6.5.2 「かな」と「かね」の比較 .....            | 97         |
| 6.6 本章のまとめ .....                    | 99         |
| <b>第 7 章 非難を表す疑問文 .....</b>         | <b>101</b> |
| 7.1 先行研究 .....                      | 101        |
| 7.1.1 日本語記述文法研究会（2003） .....        | 101        |
| 7.1.2 中崎（2005） .....                | 101        |
| 7.1.3 天野（2011） .....                | 102        |
| 7.1.4 加藤（2015b） .....               | 104        |
| 7.1.5 まとめと問題提起 .....                | 104        |
| 7.2 非難の定義と形式上の特徴 .....              | 105        |
| 7.3 非難の疑問文の語用論的解釈 .....             | 106        |
| 7.3.1 非難の意味形成 .....                 | 108        |
| 7.3.2 非難の強弱 .....                   | 109        |
| 7.3.3 非難の疑問文の類型 .....               | 110        |
| 7.3.3.1 回答要求と非難の共存 .....            | 110        |
| 7.3.3.2 不完全受容と非難の共存 .....           | 111        |
| 7.3.3.3 行為要求と非難の共存 .....            | 112        |
| 7.3.3.4 反語と非難の共存 .....              | 112        |
| 7.3.4 慣習化された定型表現 .....              | 113        |
| 7.4 なぜ疑問文で非難が表れるか .....             | 114        |
| 7.5 本章のまとめ .....                    | 115        |
| <b>第 8 章 ポライトネスの観点から見る疑問文 .....</b> | <b>116</b> |
| 8.1 ポライトネス理論とメタ的なポライトネス .....       | 116        |
| 8.2 ポライトネス・ストラテジー .....             | 117        |
| 8.2.1 間接発話行為としての疑問文 .....           | 118        |
| 8.2.2 悲観視・楽観視の表現 .....              | 120        |
| 8.2.3 疑問文の文末形式「かな」「かね」の使用 .....     | 120        |
| 8.2.4 否定疑問文の使用 .....                | 121        |
| 8.2.5 共感形成要求の疑問文 .....              | 122        |
| 8.2.6 聞き手への関心の表明 .....              | 123        |
| 8.2.7 話者交替におけるストラテジー .....          | 123        |
| 8.3 本章のまとめ .....                    | 124        |
| <b>第 9 章 おわりに .....</b>             | <b>125</b> |
| 9.1 全体のまとめ .....                    | 125        |
| 9.2 今後の課題 .....                     | 127        |

|            |     |
|------------|-----|
| 参考文献.....  | 129 |
| あとがき ..... | 137 |

# 第 1 章 はじめに

本章では、本研究の研究対象と目的を述べた上で、本研究の構成を示しておく。

## 1.1 研究対象と目的

日常会話では、われわれは様々な言語形式で情報を伝達したり、情報を要求したりする。そのうち、疑問文は言語形式の 1 つとして多用されている。現代日本語標準語における疑問文に関する記述研究は、疑問文の定義、分類、各文末形式（終助詞）の意味機能などを中心に行なわれており、優れた研究結果が積み重ねられてきた。具体的に言うと、橋本（1948）などは、疑問文の定義を提案し、国立国語研究所（1960）は最初に疑問表現の諸形式を類型立てて考察している。その後、田野村（1988・1991）は、否定疑問文の種類や疑問文の肯定・否定の条件について議論している。仁田（1991）と益岡（1991）などは疑問文をモダリティ研究の枠の中で検討している。安達（1999）と張（2009a）は機能論的観点から疑問文における「傾き」を論じている。仁田（1994）、熊野（1999）、宮崎（2005）などは疑い形式の意味機能を分析している。野田（1995）と金水（2012a）などは終助詞「か」「の（か）」を考察している。それに対して、日本語疑問文に関する語用論的研究は、1990 年代に入ると、より多く現れてきた。それらは主に否定疑問形式の語用論的機能、終助詞「か」の有無による機能の違いや、疑問文とポライトネスとの関係を考察している。そのうち、多くの研究は、個別の形式と現象に触れる程度に止まり、体系的な議論になっていない。記述文法における疑問文をめぐる研究が盛んになっている一方、語用論的観点からの研究は未だに少ない。上記の研究背景を踏まえ、日本語疑問文をめぐる語用論的研究は、まだ検討する余地の大きい分野であると言えよう。本研究は、基礎的考察を行った上で、文脈、推意、ポライトネスなどの語用論的知見を取り入れ、現代日本語標準語における疑問文の使用上の問題の解明を目指す。

まずは、研究対象について説明する。

形式上の特徴から見れば、感嘆文も疑問文の一種であるが、感嘆文と疑問文の間に明確な線引きを行うことが困難であるため、本研究でいう疑問文は通常疑問文であり、感嘆文を研究対象としない。そして、疑問文の文末形式および文末イントネーションの使用には、地域差が極めて大きいため、研究対象を現代日本語標準語の疑問文に限定する。さらに、話し言葉と書き言葉では疑問文の使用がそれぞれ異なっているため、本研究は、話し言葉に用いられる疑問文のみを取り上げる。

次に本研究の目的について説明する。

本研究は、現代日本語標準語の疑問文を対象にして、話し言葉による疑問文の統語的特徴および語用論的機能を考察する。具体的には、「(1) 話し言葉に用いられる疑問文の形式の整理、(2) 疑問文の運用に関わる要素の分析、(3) 疑問文発話が聞き手への要求に基づく分類、(4) 疑問文形式の選択における話し手の使用動機の考察と (5) 疑問文発話

におけるポライトネス・ストラテジーと発話効果の検討」という5つの課題を立てる。この5つの課題を解明することが本研究の目的である。ところで、疑問文の実際の運用を考察する際に、統語レベルに音声レベルと語用論レベルを加えた総合的なアプローチを試みることは、疑問文の実際の運用を全面的に考察できるという点で、疑問文の研究にとって有意義であると考えられる。したがって、疑問文の運用について、これら3つの観点からも考察を行う。

## 1.2 本論文の構成

本論文は第1章、第2章から第5章までの第Ⅰ部、第6章から第8章までの第Ⅱ部、および第9章で構成されている。

第1章は、研究背景を提示し、従来の研究の問題所在を簡略し、本研究の必要性を提示する。そして、本研究の研究対象を限定し、研究の目的および本論文の構成を述べる。

第Ⅰ部は、「日本語疑問文の記述と機能分析」に基づき、第2章から第5章までである。

第2章は、現代日本語疑問文の記述文法、音声論と語用論に関する先行研究を概観し、その問題点を示す。そして、本研究で取り扱う疑問文の定義を明確にする。また、疑問文の用例収集の方法を説明し、形式上の特徴に応じて、収集した疑問文の使用状況や用例数を提示する。

第3章は、まず、疑問詞、文末形式および文末イントネーションという疑問文形式上の要素を整理する。具体的には、「疑問詞の有無と文末イントネーションの共起」「文末形式の有無と文末イントネーションの共起」「文末諸形式と文末イントネーションの共起」を考察する。次に、疑問形式と機能の対応関係を提示する。疑問文の本質によって、疑問形式で疑問を表す疑問文と、疑問形式で疑問を表さない疑問文の下位分類を行う。最後に、疑問文の運用上の要素として、「話し手の知識状態・発話意図」「聞き手の知識状態」「社会的位置関係・発話場面」「文末形式の使用におけるジェンダー上の差異」という4つを取り上げて議論する。

第4章は、発話場面では疑問文を使用する話し手が聞き手に対してどのような要求があるかによって、疑問文を分類し考察する。まず、言語的要求と非言語的要求に大分して、さらに下位分類を行う。もちろん、すべての疑問文発話が聞き手目当ての発話ではないため、要求のない疑問文も示す。

第5章では、前章で提出した言語的要求の1つである話者交替の要求を取り上げて考察する。まず、聞き手の捉え方に関する先行研究を踏まえ、本研究における話者交替における聞き手の捉え方を説明する。そして、疑問文発話が話者交替の形成条件を述べ、疑問形式と話者交替の要求性の強弱の関係について考察する。

第Ⅱ部は「疑問文の使用動機と談話効果」に基づき、第6章から第8章までである。

第6章は、問いかけ的に用いられる「かな」などの独話形式を取り上げ、語用論的観点で弱い問いかけの疑問文の語用論的特徴を議論する。そして、「かな」などの本来の独話形式を問いかけ的に用いる話し手の動機づけを分析する。また、「かね」という疑問文の文末形式を取り上げ、先行研究を確認した上で、本研究では「かね」について再検討す

る。「かな」と「かね」には聞き手に対する配慮についてどのような違いがあるかを考察する。

第 7 章では、語用論的観点から、疑問文における「非難」という派生的機能について検討する。具体的には、まずは非難の意味機能を有している疑問文に関する先行研究を整理し、それらの問題点を提示する。次に、「非難」の定義を提出する。そして、非難の意味生成を語用論的に分析する。最後に、非難を表す時の疑問文の機能を分析し、そのうち、慣習化された定型表現と文脈の相互作用によって表現されている非難の疑問文を整理し、さらに疑問文で非難を表す話し手の動機づけを検討する。

第 8 章は、まず、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論と本研究で取り扱うメタ的ポライトネスの違いを説明する。次に、両理論を用いて、日本語におけるストラテジーとしてのポライトネスが疑問文という言語形式によって、どのように表現されているかを考察する。

第 9 章は、全体のまとめを述べ、本研究を通して得た成果、本研究の意義と残されたいくつかの課題を今後の課題として提示する。

## 第Ⅰ部 日本語疑問文の記述と機能分析

## 第2章 先行研究の概観と本研究の立場

本章では、疑問文に関する従来の研究をまとめ、本研究で取り扱う疑問文の定義と範囲を説明し、用例収集の方法と疑問文の使用状況を示す。

### 2.1 先行研究の概観

本節は、「記述文法」「音声学」「語用論」という3つの分野での現代日本語標準語における疑問文の先行諸研究を概観した上で、本研究と関連性の高いものを批判的に検討する。

#### 2.1.1 記述文法における研究

記述文法における代表的なものとして、以下のようにまとめる。

##### 2.1.1.1 疑問文の定義

従来の研究においては、疑問文を形式から定義するものと機能から定義するものに分けられる。まず、形式から疑問文をどのように定義できるかについて、橋本（1948）、田野村（1988）、森山（1989）、大鹿（1990）と森川（2009）が挙げられる。

橋本（1948）によると、疑問文は普通、文中に疑問詞を用いるか、文末に疑問の助詞「か」などを用いるか、あるいは、その両者を用いるかのいずれかである。また、何も用いなくても、上昇調のイントネーションによって、疑問の意を表すことのあるものも疑問文である。

田野村（1988）は、いわゆる終助詞の「か」で終わる文、および「か」を伴っていないが、文意に変化を来すことなく「か」を補うことのできる文、「かな（あ）」「かしら」などで終わる文を疑問文と定義している。また、主たる述語が否定辞「ない」を伴う疑問文を否定疑問文としている。

森山（1989）は、疑問文は形式的に定義できると述べ、「か」類の終助詞あるいは不定語がある文を疑問文とみなしている。大鹿（1990）<sup>1</sup>は「疑問文とは、文末に助詞「か」を持つか、文中に不定詞を持つか、あるいはその両方を持つか（口頭語の場合、上昇調のイントネーションが助詞「か」に代わることもある）のいずれかである」と述べている。

森川（2009）は、「日本語の文法では、概ね「文末に上昇調イントネーションを用いる」「文に特定の助詞（代表的な例としては「カ」）を後接する」「文中に疑問語を用いる」という3つの要件のうち1つを満たすと、形式上、疑問表現となる」と述べている。

以上では、田野村（1988）以外、いずれも「文中に疑問詞<sup>2</sup>を用いる」という条件を

---

<sup>1</sup>大鹿（1990）は、典型的な疑問文は、これらの形式を持ち、疑問であることを直接表すが、これらの形式を持ちながら、疑問であることを直接に表さない疑問文もあると指摘している。

<sup>2</sup>先行研究では、「疑問詞」「疑問語」「不定語」が使われているが、本研究では、「疑問詞」という用語を用いる。

満たす文が疑問文である」と提示している。しかし、取り立て助詞「でも」と非上昇調の文末イントネーションの使用によって、「何でもいい (↘)」というような文は疑問詞「何」を有しても疑問文ではなく、平叙文と認定されている。したがって、文中に疑問詞があっても、必ずしも疑問文とは言えない。疑問文の定義を再検討する必要がある。

次に、機能から疑問文の定義について述べているものとして、益岡・田窪（1992）、安達（1999）、日本語記述文法研究会（2003）と宮崎（2005）を挙げる。

益岡・田窪（1992）では、疑問表現の基本的性格に基づいて、疑問文は、「話し手が相手に未知の部分の情報を求めたり、自分自身に問いかけたりする表現である」と定義されている。安達（1999）では、疑問文は「対話の相手（聞き手）から情報を引き出すことを機能としている文ではあるが、疑問文によって情報を相手に伝えるということさえあるの文である」と述べている。日本語記述文法研究会（2003）では、命題に対して話し手の判断が成り立たないことを表す疑問のモダリティを担う文は疑問文であり、疑問文の中心的な機能は質問であるが、疑問文の機能は質問に止まらないという<sup>3</sup>。宮崎（2005）は、基本的・典型的な疑問文とは聞き手に情報を要求する文であり、それを「質問文」と呼び、疑問文は単なる判断不成立や情報要求の文ではなく、疑念解消や情報の共有化を目指す、話し手の主体性にこそ、その本質があるということを指摘している。以上は、疑問文の基本的で典型的な機能が情報提供の要求を表す「質問」であるという点で共通している。

### 2.1.1.2 疑問文の分類

疑問文の分類は、「疑問詞の有無」「選択肢の有無」という形式的特徴によって、疑問詞疑問文（補充疑問文）、真偽疑問文、選択疑問文という3つに分けられる。そして、述語の肯定・否定によって、疑問文を肯定疑問文と否定疑問文という2つにも分類できる。

その他には、モダリティの観点から疑問文を分類した仁田（1991）、疑問対象と疑問行為の動機による分類を提案した吉田（1994）、情報要求の有無による分類を行った森川（2009）、言語的反応による分類をした林（2016）がある。

仁田（1991）は疑問表現をモダリティの観点から、＜疑い＞＜問いかけ＞を有している本来の疑問表現と、話し手が聞き手に自らの要求の実現を働きかけ・訴える、といった＜働きかけ＞に移行・派生した疑問表現に分けている。吉田（1994）は、＜判定要求/説明要求＞、あるいは＜問い/疑い＞という疑問文の従来の分類法のほかに、ノデスカ/マスカ両文型で実現された＜問い＞の文について、疑問対象の面から＜事実/意向/予測＞と分類し、疑問行為の動機の面から＜借問/尋問/試問＞という分類をしている。森川（2009）は、宮地（1979）と野田（1997）を参照した上、疑問表現を情報疑問文と非情報疑問文<sup>4</sup>の

<sup>3</sup>日本語記述文法研究会（2003）によると、質問には、①話し手に不明な情報があるため判断が成り立たず、②聞き手に問いかけることによって疑問の解消を目指すという2つの基本的性質がある。そして、①の性質を欠くのが確認要求の疑問文であり、②の性質を欠くのが疑いの疑問文である。

<sup>4</sup>森川（2009）は、情報疑問文について、「下降調イントネーションを用いることもある」「話し手が発話する場面には、ある特定の聞き手が存在する」「聞き手は、話し手から向けられた

2つのタイプに分類し、それぞれを「話し手が疑問の気持ちを聞き手に伝え、それに対する説明や判断などの情報を求めようとするもの」「話し手が聞き手に情報を求めないもの」と定義している。林（2016）は、言語行為的側面から、疑問文が相手に何をどのように言わせるかという言語的反応の観点から、疑問文には、「不明項特定要求」「判定要求」「応諾反応要求」「不明項特定誘発」「判定誘発」「応諾反応誘発」「受け入れがたさの表明」「不明感表明」「同意表明期待」という下位分類があるとしている。

### 2.1.1.3 疑問詞

加藤（2006）は、疑問詞の機能について議論している。加藤によると、「誰」「何」「どこ」「いつ」「どれ」などの疑問詞に副助詞の「か」をつけることで、疑問詞の指すものを尋ね問う機能がなくなり、不明なままに提示する用法（不定化）になる。例えば、「誰が来ましたか？」という文は、典型的な疑問詞疑問文であり、「誰」という疑問詞に当てはまる人の名前を求めている。一方、「誰かが来ましたか？」という文は、「誰」に「か」を付加することによって、真偽疑問文となり、「はい／いいえ」という肯否を求めている。

疑問詞と文末詞との共起について議論している先行研究として、渡邊・赤澤（2008）と森川（2009）が挙げられる。

渡邊・赤澤（2008）は、「か」の有無が疑問語疑問文<sup>5</sup>の容認度に関わっていることを論じている。「誰が来る↑」「誰が来るのか↑」「誰が来ますか↑」「誰が来ます↑」が文として容認されるが、「\*誰が来るか↑」「\*誰が来るのか↑」のような「か」の直前に「です/ます」がない情報疑問語疑問文は、文末上昇調イントネーションを伴う場合、文として容認されないという。それに対して、「僕はどこへ行こうか↑」のような「か」の直前に「です/ます」がない指令疑問語疑問文<sup>6</sup>において、↑は丁寧さを表さず、「僕はどこに行こうか」のような指令疑問はぞんざいな表現ではないため、不整合が生じず、適格となると述べている。

---

問いに対する答えを知っていることもあれば、知らないこともある」という3点が前提となっていると提示している。非情報疑問文を聞き手の存在が前提となる聞き手顕在型と、聞き手の存在が前提とはならない聞き手非顕在型に分けて、反語表現（修辭疑問文）と勧誘の「力」で終わるものが聞き手顕在型であり、疑問型情報受容文（自問文）が聞き手非顕在型であるとしている。そして、森川（2009）は、森山（1992）での「疑問型情報受容文」という用語を援用しているが、このような文特定の聞き手を想定するものではなく、自分自身に向けて発せられた自問文として考えることができると述べている。

<sup>5</sup>渡邊・赤澤（2008）では、「疑問語疑問文」という用語が用いられるため、ここではそのまま援用する。

<sup>6</sup>渡邊・赤澤（2008）は Huddle Rodney and Geoffrey K. Pullum（2002：876-879）に従い、指令疑問語疑問文と情報疑問語疑問文を区別している。指令疑問語疑問文は、答えに「指令」「依頼」「教示」「勧誘」「アドバイス」などを求めるものであり、情報疑問語疑問文の答えは、情報、典型的には真偽値を持つ平叙文である。

森川（2009）は、疑問文と「ダ」の関係を考察して、疑問詞疑問文の場合、「\*誰が犯人ダカ？」のような「常体のダ+カ」という形式が非文法的であるが、「誰が犯人ダ？」のような「常体のダ」のみの形式が文法的であることを指摘している。

#### 2.1.1.4 疑問文の文末形式

国立国語研究所（1960）は、表現意図・構文の型・文末イントネーションの三者の絡み合いで話しことばの文型の研究を行い、疑問文の文末表現としては、「か」「かな」「かしら」があり、確認要求の疑問文の文末に「ね」「な」などの終助詞を伴うものと、「～だろう？」「～でしょう？」「～じゃない？」「～じゃないか？」という文末助辞を伴うものがあると述べている。他の先行研究では、疑問文の文末形式として比較的に多く取り上げられたのが、「かな」「かね」「か」「のか」「だろう」「だろうか」「ではないか」「のではないか」と「っけ」である。本節では、これらの9つの文末形式の意味・機能を議論している先行研究を紹介する。

##### 2.1.1.4.1 「かな」

疑い形式の「かな」が問いかけて的に用いられることについて、益岡・田窪（1992）、仁田（1994）、森田・松木（1989）と日本語記述文法研究会（2003）では議論されている。

益岡・田窪（1992）は、問いかけて的に用いられる「かな」の文を「間接的な質問の文」と呼び、相手の意見を聞いていることから情報を求める質問型の疑問文と区別している。仁田（1994）は、「カナ」などの疑いの形式による問いかけてを＜思いもかけぬ問いかけて＞と＜疑いを装った問いかけて＞に分けている。森田・松木（1989）は「かな」の問いかけて的用法の他に、「かなあ」は「相手に対する問いかけての力は弱く、話し手の詠嘆が強く込められる」とも指摘している。日本語記述文法研究会（2003）は、対話的な「かな」を質問として用いられるものと応答として用いられるものに分けている。

「かな」の使用状況を考察するものとして、平山（2015）が挙げられる。平山（2015）は、10代後半～20代中盤の同世代同士の雑談における「かな」の用法を考察し、「疑い」の形式とされる「かな」は、自然会話において、「疑いの述べ立て」をする際に最も多く使用されていることと、自然会話においては、実際に判断が不成立である場合の「かな」のほか、相手と異なる主張や相手への批判を行ったり、相手に同意できない場合に発話を和らげるために「かな」が用いられていることを明らかにした。

##### 2.1.1.4.2 「かね」

「かね」に関する先行研究は、南（1985）、熊野（1999）、森川（2009）と三宅（2011）を挙げる。

南（1985）は、「かね」を「表出段階」の「か」と、「働きかけ段階」の「ね」の組み合わせとして捉え、「か」は「話し手の疑い」を表し、「ね」は「相手の反応への要求」を表すと述べている。しかし、本研究の用例資料からは、「かね」における「か」が「問

いかけ」を表す用法、「ね」が「問いかけを和らげる」を表す用法を持っている用例も確認できたため、南（1985）の「かね」への捉え方については再検討する必要があると考えている。

熊野（1999）は、「かね」の特定の位相で使用されるものとそうでないものを区別し、「か」は不確定、「ね」は自己照合を示すと説明し、「かね」を疑いの表現として位置付けている。本研究において、「かね」が明らかに相手を問いかける場合に用いられる用例を確認したため、「かね」については、熊野のいう疑いの表現としての位置付けのみではなく、問いかけにも用いられていることを提示する必要があると考えている。

森川（2009）は、「ね」が「カ」付き疑問文に後接する用例を挙げ、「太郎は明日来る/ますかね？」という Yes/No 疑問文では、「ね」が「太郎が明日来る」ということを「確認」していると述べている。それに対して、森川は、「太郎はいつ来る/ますかね？」という Wh 疑問文では、「ね」が確認ではなく、「太郎がいつ来るのか」ということを一種和らげて聞き手に尋ねる、あるいは話し手と聞き手が「共有」して考える働きを持つと指摘し、それを「弱めの問いかけ」と呼んでいる。

三宅（2011）は、常体においては「かな」、敬体においては「かね」というように相補的に分布しているが、表現効果が同じであると述べている。そして、常体において「かね」、敬体において「かな」を用いる可能性もあるが、極めて強い位相的な制約があり、少し威張った感じの年配の男性においてのみ使われると指摘している。また、聞き手も情報を持っていないと知っている場合、通常の質問文で聞き手に問いかけるのは不自然である。しかし、「かな」「かね」による発話は、単に命題の真偽を検討中であるということが表明されるだけで、聞き手への直接的な回答の要求を持たないため、まったく自然であると主張し、「かな」「かね」による質問について、「丁寧さの加わった質問」と呼んでいる。また、常体に接続する「かな」の使用は話し手と聞き手の社会的関係と使用場面によって制限されるため、敬体に接続する「かね」とは表現効果が同じではないと考えている。

以上「かね」に関する主たる先行研究を取り上げてまとめた。先行研究では「かね」への捉え方が十分でなく、「かね」の用法を細分化する必要がある。そして、「かねえ」という形式の使用も見られるため、本研究では、「かね」と比較しながら「かねえ」の用法を分析する。

#### 2.1.1.4.3 「か」

終助詞「か」に関する先行研究の代表的なものには、森山（1992）、野田（1995）、鄭（1997）と森川（2009）が挙げられる。

森山（1992）は、「あ、もう十時か。」という文を疑問型情報受容文と呼び、疑問型情報受容文が情報の受け入れを表すと指摘している。「あ、もう十時だ。」という断定文との違いから、「自ら新たな情報を発見する「か」の疑問型情報受容文は、世界のあり方についての認識を現実世界と対照して書き換え、新たな認識を構成していくという過程を表す」と述べて、情報の受容を表す「納得」「発見」が我々の認識のあり方にも関わっていることを指摘している。そして、「遊ぶか。」「行こうか。」のような意志を表す動詞

無標形や意志形に「か」がついた形は、聞き手への疑問ではなしに、自分自身の意志決定の過程の一部を表すと説明している。

野田（1995）は、「か」が不定性を表すということから、文末に付加することで「聞き手に応答を要求するという話し手の態度を明示する」と指摘し、普通体の疑問文における終助詞「か」の付加が「男性的」で「丁寧さに欠ける」のに対して、丁寧体の疑問文においては、「か」を用いると自然、用いないと柔らかい印象を与えると述べている。

鄭（1997）は、「か」疑問文を、聞き手目当ての問いかけ文、働きかけ文、述べ立て文と聞き手目当てではない疑い文、詠嘆文という5つのタイプに分け、それぞれの下位タイプも提示して、各タイプにおける「か」の省略が起こる条件と、「か」が省略された場合とされていない場合の意味の違いについて論じている。

森川（2009:101）は、疑問文文末の「カ」について、「a.「カ」は疑問文形式に必須な要素ではなく、疑問語や上昇調イントネーションも関わる。b.「か」は疑問性を持つものもあれば、持たないものもある。疑問性を持った「か」を用いると情報疑問文となり、そうでなければ、平叙の意味を示す非情報疑問文となる。c.情報疑問文としての「か」付き疑問文の「か」は、話し手による聞き手への心的態度を表す対人的モーダルである。一方、非情報疑問文としての「カ」付き疑問文の「カ」には、対人的モーダルもあれば、話し手の心的態度を表す対事的モーダルもある。d.常体の「カ」付き疑問文は、通常、話し手のぞんざいさを表すか、前接する節の意味を変える働きがある。そのため、「カ」は省略できない要素である」という。

#### 2.1.1.4.4 「のか」

疑問文の文末に用いられる終助詞「のか」に関するものは、牧原（1995）と金水（2012a）が挙げられる。

牧原（1995）は yes-no 疑問文と wh 疑問文における「のか」の果たす機能について、前提との関わりという観点から考察している。yes-no 疑問文における「の」が必須であるかどうかについて、前提と問いかけとの関係づけのあり方によって、以下の表1にまとめられる。

表 1. 前提と問いかけとの関係づけのあり方による yes-no 疑問文における「の」の使用

| 前提と問いかけとの関係づけのあり方                            | 「の」の使用     | 前提の存在と「の」の使用の関係                                                                                                           | 用例                                      |
|----------------------------------------------|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 述語の表す事態が既に成立しており、事態の成立を前提にそれ以外の情報について問いかける場合 | 必須         |  前提の存在が大きなことに伴い、「の」の使用が必須のものとなっていくようである。 | a.これ、叔母さんが撮ったの？<br>b.父さん、これ買ったの？        |
| 推論の根拠（前提）から推論される状況と、それまで話し手が想定していた状況とが異なる場合  | 必須         |                                                                                                                           | c.結婚してたの？<br>d.長野に戻ってたの？                |
| 推論の根拠（前提）から命題を導き、その真偽を確認する場合                 | 必須でなく、省略可能 |                                                                                                                           | e.セリフ多かったの？<br>f.制作を離れるの？<br>g.体操部だったの？ |
| 前提を持たない場合                                    | 不可         |                                                                                                                           | h.テレホンカードもってる？                          |

牧原は wh 疑問文を疑問詞の種類によって、大きく「の」を必須としない wh 疑問文と、「の」を必須とする wh 疑問文に分けている。wh 疑問文の種類と「の」の必要性との関わりを以下の表 2 のようにまとめられる。

表 2. wh 疑問文の種類と「の」の必要性との関わり

| Wh 疑問文 | 分類         | 疑問詞の種類                              | 「の」の必要性                                                                                                  | 用例                                             |
|--------|------------|-------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
|        | 「の」を必須としない | 「いつ」、「だれ」、「どこ」、「何」という格成分に相当する疑問詞    | 「行く」ことが既に決まったこととして取り扱われている場合、「の」が必要となる。                                                                  | a. 誰が行くのか。<br>(誰が行くの?)                         |
|        |            |                                     | 「行く」こと自体にも疑問が向けられている場合、「の」がなくとも文法的には正しい。                                                                 | b. 誰が行くか。<br>(誰が行くの?)                          |
|        |            | 「どんな理由で」<br>「どのような原因で」 <sup>7</sup> | 問いかけの対象となる行為が話し手の想定し得なかった事態であるというニュアンスはなく、ただ単に理由や原因を問うだけである場合、「の」が用いられなくても適切な文となる。                       |                                                |
|        |            | どうして                                | 話し手の側でその理由が十分に想定しうるものであり、聞き手の答えが話し手の想定と異なることにはならない場合、「の」が用いられなくても適切な文となる。                                | c. どうしてこの会社を選びました?                             |
|        | 「の」を必須とする  | 「なぜ」、「どうして」、「何で」                    | 話し手が何らかの根拠をもとにして想定する状況と、現実の状況とが一致しない。話し手の想定する事態と、現実の事態を明示する文脈的な前提とを関係づけ、両者が食い違うことを明示する必要がある場合、「の」が必要となる。 | d. 何で私が空手やんなきゃなんないの?<br>e. どうしてそんな危ないところに行ったの? |

金水（2012a）は、現代日本共通語の書き言葉をデータとして、疑問文のスコープと助詞「か」「の」の関係を考察している。金水によると、質問型の直接疑問文は、節末に必ずしも「か」を必要としないが、間接疑問文の節末に現れる「か」は、疑問文のスコープを明示する補文標識であるため、必須である。そして、金水は、焦点のスコープが「の」によって明示される必要のある構文を「焦点卓立構文」と呼び、疑問詞疑問文は疑問詞と「か」または文末の音調の連携によって関数的に解釈されるのであり、必ずしも焦点卓立構文である必要がないと述べている。さらに、「いったい」を伴う疑問詞疑問文では、疑問詞が本来持つ不定指示の意味に加えて、焦点卓立構文の解釈も伴うため、「の」が必要となると主張している。

<sup>7</sup>牧原（1995）ではこの種類の疑問文について、用例が挙げられていない。

#### 2.1.1.4.5 「だろう」

「だろう」の推量と確認要求用法に関しては、森山（1989）と宮崎（2005）が挙げられる。

森山（1989）は、聞き手情報への配慮という点から、「だろう」の推量や確認要求の用法を論じている。森山によると、文には、聞き手にも当該内容に関する情報があると話し手において仮定されているものとそうでないものがあり、疑問文は基本的に聞き手に情報があると仮定されており、そうでなければ標識で表される必要がある。「彼はきっと来るだろう。」のように、聞き手に何の情報もなく、話し手がその情報を伝達するという構造になっている場合、「だろう」は純然たる推量として成立している。それに対して、「ほら、こうすればうまくいくだろう？」という文には、聞き手に当該内容に関する何らかの情報があるという話し手の仮定（聞き手情報の配慮）があって、その場合「だろう」は確認要求を表しているのである。

宮崎（2005）は、＜推量＞を、「想像・思考といった間接的な認識を通してその事柄の真偽を判断すること」と考え、＜推量＞の「だろう」は、「たぶん」などの確信度表示副詞や終助詞の「なあ」などと共起し、文末、または文中に出現し、イントネーションは下降調のみで、対話でも独話でも用いられるという特徴があると指摘している。宮崎（2005）は、確認要求用法の実現は、その事柄に対する聞き手の認識が確かであるということを基本条件とする。つまり、「だろう」が確認要求として用いられる場合、聞き手が存在し、聞き手の認識が確かでなければならないのである。「だろう」の確認要求用法は、多くの先行研究で、他の確認要求の形式と比較して議論されてきた。その点について、ここでは宮崎（2005）の論述をまとめて述べる。「だろう」「ではないか」を一括し、確認要求という疑問文の下位類型とさせている。「だろう」と「ではないか」との相違について、「聞き手に許容を求めるような文脈には、話し手の認識を聞き手に押し付けて確認させる形式である「ではないか」はまったく合わないが、聞き手にその事柄の確定を委ねる形式である「だろう」は、この文脈に適合する。話し手あるいは聞き手の外観を問題にするような文脈では、聞き手から、話し手の外観がどう見えるかということについての確認を求める場合には、「だろう」は使えるが、「ではないか」は使えない。話し手から聞き手の外観がどう見えるかを詠嘆的に表明する（確認の意はあまりない）ものの場合には、「ではないか」は使えるが、「だろう」は使えない」という。

#### 2.1.1.4.6 「だろうか」

従来の研究において、「だろうか」は＜疑い＞の形式として捉えられており、三宅（1993）は、意味記述に語用論的な観点を取り入れ、「だろうか」というモダリティ形式は、「不定推量」という基本的な意味から、「弱い質問」（聞き手に不確定な応答をする余地を残す質問）、「丁寧さの加わった質問」（通常の質問文よりも丁寧に感じられる質問）という派生的意味に拡張されていると主張している。

宮崎（2005）は、「だろうか」は聞き手不在発話においては、話し手の内的思考活動を

表すと指摘し、命題の情動的な性格を重視して、「命題が成立しない可能性を想定する」といったもので、疑わしい、すぐには承認できないという否定的な疑い」や「命題が成立する可能性を想定するというもので、見込まれる、恐れがあるという肯定的な疑い」のような逆方向の二つの有り様があるとしている。宮崎によると、「だろうか」は話し手だけでなく、聞き手も知らないことについて問いかけることが可能であり、意見を求める用法として使用される。このように、情報を求めるわけではないということから、疑いの形式「だろうか」は問いかけ性の希薄化といった働きをしている。こうした疑問文には、話し手の疑いを聞き手に差し向けることによって、聞き手にも、それについて考えることを要求するという間接的な問いかけ性が認められるという。

#### 2.1.1.4.7 「ではないか」

「ではないか」の確認要求用法を議論しているものは、三宅（1994）、鄭（1994）と蓮沼（1995）が挙げられる。

三宅（1994）は、「デハナイカ」という形式を伴った否定疑問文が確認要求的表現としての意味、機能を有する場合、「デハナイカⅠ類」（「知識確認の要求」と「弱い確認の要求」）と「デハナイカⅡ類」（「命題確認の要求」）が分けられると指摘し、「ダロウ」と「ネ」による確認要求的表現との相違と相似を議論している。鄭（1994）は、確認要求表現の「ダロウ」と「ジャナイカ」を対象とし、情報伝達・機能論的な観点から、両者の相似と相違を論じた。「ダロウ」は話し手の推量を単に確認するものであり、「ジャナイカ」は話し手の予想と現実の新情報が対立した時、話し手の予想を遠慮気味に提示し確認するものであることを論証した。蓮沼（1995）は、聞き手の同意・共感や認知状態を確認する文末表現である「だろう」「じゃないか」「よね」の共通性と差異を解明し、対話における確認行為の諸相を分析している。

「ではないか」が話し手の個人意見・情報に接続している場合の用法について議論しているものは、文化庁（1997）、井上（1998）と吉川（2002）が挙げられる。

文化庁（1997）は、「……じゃないですか」という言い方について、「①店員に反論する場面」「②近所の人と会話する場面」「③初対面の人と会話する場面」という状況の異なる三つの例を挙げて、全国の16歳以上の男女3,000人がその言い方に対してどんな感じがするかを調査した。その中で、①に用いられる「広告には5割引きと書いてあるじゃないですか」という聞き手が当然知っているはずの事実を突き付けて確認・同意を求める言い方に対して、「普通の言い方だと感じる」が39.2%であり、「押し付けがましい言い方だと感じる」は33.5%であり、「唐突な言い方だと感じる」は19.8%であった。②に用いられる「年末はどこの店も込むじゃないですか」という一般的な認識として聞き手が知っている期待される事柄についての言い方に対して、「普通の言い方だと感じる」が58.7%であり、「親しみのある言い方だ」と好感を持つ人が16.9%見られた。「押し付けがましい」「唐突」と抵抗感を示した人は計約2割であった。③に用いられる「私ってコーヒーが好きじゃないですか」という聞き手が知っているとは期待できない話し手の個人的な事柄についての言い方に対して、「唐突」が45.9%であり、「押し付けがましい」も26.0%見られ

た。残りの 28.1%についてどう感じるかが提示されていない。井上（1998）は、対話場面に用いられる「～じゃないですか」は話し手の個人意見、あるいは個人知識に接続して用いる場合、聞き手に押し付けることになる」と指摘している。吉川（2002）は「～じゃないですか」の前接部分が客観的情報のものから、個人的、主観的な情報である場合にまで着目し、談話の流れにおける「～じゃないですか」表現の役割を分析した。吉川は、「～じゃないですか」の前接部分の情報の種類をそれぞれ「一般的既知情報」「限定的既知情報」「二者関係で成立する既知情報」「個人的価値判断を含む個人情報」に分け、各種類の情報を含む談話資料を分析し、情報の一般性が高ければ、情報の共有度合いも大きくなり、押し付け度合いが低くなると述べている。

#### 2.1.1.4.8 「のではないか」

安達（1999）は、情報を聞き手に与える機能を持つ文を情報提供文、聞き手から情報を引き出そうとする文を情報要求文と定義し、「のではないか」と否定疑問文<sup>8</sup>は、「傾き」を通じて、本来の情報要求文から情報提供文へ機能が移行することがあると述べている。イントネーション、応答文の存在、感情・感覚主体の転換という 3つの現象から、「傾き」を持つという特徴を共有する「のではないか」と否定疑問文は疑問文が本来有している情報要求機能を維持していることを確認した上で、応答文としての使用、思考動詞補文中の生起、モダリティの副詞の共起の 3つの点について検討し、「のではないか」と否定疑問文が情報提供機能を持っていることを明らかにした。機能の移行によって得られた「のではないか」の情報提供機能の活用について、安達は運用論的な観点から、「のではないか」には、「婉曲的な情報提供によって丁寧さを生じさせる」と「話し手の評価的な主張が明確に現れる形式を使う時に、「のではないか」によってその主張を和らげる」という 2つの用法があると指摘している。

#### 2.1.1.4.9 「っけ」

終助詞の周辺的なものとしての「っけ」に関する先行研究は数が少ない。益岡・田窪（1992）は「っけ」が記憶の確認を表すと述べている。又平（1996）は、現代日本語の終助詞「っけ」を「話し手の発話時点での検索結果の提示」と定義し、「っけ」の用法を発話者が検索結果に対し、確定的か未確定的によって区別し、伝達行為のタイプからそれぞれ 2つのタイプに下位分類している。そして、又平は、終助詞「かな」「な」の置き換えと「っけ」に終助詞「か」「よ」「ね」の後接の可否についても示している。また、「よね」との共起制限と「の」を境とする出現場所から、「っけ」は「か」「だろう」と同じ 1つのグループに属することを述べている。

池谷（2012）は、「っと」「っけ」について、個別の意味機能を論じ、双方とも促音でマークされる終助詞として、話者の私的領域内に属する情報であると定義している。そし

<sup>8</sup> 安達（1999）では、「のではないか」を別形式として取り上げ、そのような形態的特徴を有する文でもその文末形式の固定化が進んでいる場合には否定疑問文から外すとしている。

て、池谷は invisible listener という目に見えない聞き手を想定することによって、聞き手と話者お互いのフェイスを維持することができると述べ、話者の私的領域内に属する情報の中でも「っけ」は、自己（＝話者）の体験にある情報であることを示し、「っと」は自己（＝話者）の個人情報であることを示すと考えている。

### 2.1.1.5 疑問文における「傾き」

安達（1999）は、日本語の疑問文に話し手の主観性がどのように投影しているかという観点から、否定疑問文、「のではないか」という形式を持つ文、確認要求の「だろう」の文、「ではないか」という形式の文に対して考察を行った。まずは有標性を持つ否定疑問文を取り上げ、「傾き」という現象に関連づけて考察した。安達（1999：52）によると、「傾き」とはある命題の真偽を聞き手に問いかけるとき、話し手にどちらかの値への見込みが存在することである。「傾き」を疑問文における「判断」としてどのように捉えることができるかについて、副詞との共起制限を通じて、否定疑問文の「傾き」は含意といったものではなく、話し手の「判断」の発現としてかなり文法化された存在であることを証明した。安達によると、「傾き」を持つ否定疑問文には、「話し手の知識状態には関係なく、聞き手の知識に言及するタイプでは情報の性質として状態的であるもの」と、「話し手と聞き手が同様の知識状態にあると見込まれる事態を疑問化するもの」という2つのタイプがある。後者のタイプが成立するのは、経験者主語をとる述語に限られる。対話の現場での推論によって得られた見込みは、「傾き」とはなり得ない。

張（2009a）は、肯定疑問文の機能を「命題の真偽が不明であるために、命題の真偽そのものを直接尋ねるもの」とし、否定疑問文の機能を「p であるという肯定的な仮説」を作り上げ、その仮説の正否を尋ねるもの」とし、両者の機能の対比をした上で、疑問文の傾きを「否定疑問文に見られる「p であるという肯定的な仮説」と規定している。そして、否定疑問文には基本的に「傾き」を持つが、肯定疑問文はそのような特徴を持たないことによって、「傾き」の有無が肯定疑問文と否定疑問文の使い分けに関わる要素であると述べている。

### 2.1.1.6 否定疑問文

田野村（1988）は、「ではないか」で終わる否定疑問文に限定して下位類型を提示し、田野村（1991）は、田野村（1988）で示した分析的な否定疑問文と非分析的な否定疑問文の区別を踏まえ、肯定疑問文と否定疑問文の選択の条件、意味の相違について議論している。田野村（1991）による肯定疑問文と否定疑問文の選択の条件を以下の表 3<sup>9</sup>で整理する。

---

<sup>9</sup>表 3 では、「先行」・「後置」とは、肯定疑問文と否定疑問文が同時に使われる場合、肯定疑問文の方が先行する、否定疑問文の方が肯定疑問文の後に置くことである。「可能」・「不可能」は、使用可能か、使用不可能を表している。「可能・より優先」は、依頼・勧誘の場合では、否定疑問文が使用可能であり、肯定疑問文の方より優先されていることである。

表 3. 田野村（1991）による肯定疑問文と否定疑問文の選択の条件

| 選択の条件                             |      | 肯定疑問文 | 否定疑問文   | 用例 <sup>10</sup>                         |
|-----------------------------------|------|-------|---------|------------------------------------------|
| 選択疑問文                             |      | 先行    | 後置      | a.私の顔が見える？見えない？                          |
| 疑問詞疑問文的な働きを有する                    |      | 可能    | 不可能     | b.服装は当時、洋服ですか？<br>着物ですか？ <sup>11</sup>   |
| 所与命題（含意する命題）                      | 肯定命題 | 可能    | 不可能     | c.絵をお習いですか？                              |
|                                   | 否定命題 | 不可能   | 可能      | d.先生、ごらんにならなかったですか？                      |
| 望ましい命題                            | 肯定命題 | 可能    | 不可能     | e.ゆうべはよく寝られましたか？                         |
|                                   | 否定命題 | 不可能   | 可能      | f.おけがはございませんでしたか？                        |
| 依頼・勧誘                             |      | 可能    | 可能・より優先 | g.それだけ教えてくれないか？<br>h.この車で、神戸まで遊びに行きませんか？ |
| 聞き手のためにある行為を行うべきかどうかを聞き手の意向を尋ねる場合 |      | 可能    | 不可能     | i.白い御飯でもお持ちしますか？                         |
| 客観事実                              |      | 可能    | 不可能     | j.お父さまとお母さまは恋愛ですか？                       |
| 同じ目的・同じ状況の等価                      |      | 可能    | 可能      | k.小銭ありますか？<br>l.小銭ありませんか？                |

安達（1999）は、肯定疑問文と否定疑問文の選択について、無標・有標の観点と、「傾き」を持っているか否かという二点から論じている。「君、疲れていますか？」というような疑問文を「何らかの情報が話し手に欠けていることを聞き手に伝えて、それを補うことを要請する手段」として、典型的な疑問文とし、「君、疲れていませんか？」のような否定疑問文は、対話の現場で観察される相手の様子やそれまでの状況などから、相手が疲

<sup>10</sup>ここで挙げた用例はすべて田野村（1991）で用いられた用例である。

<sup>11</sup>田野村（1991）は、この用例は、形式的には疑問詞疑問文ではないが、機能的な観点からすると、疑問詞疑問文的な働きをするものであると述べ、このような文は、単に命題 p「洋服または着物」であるかでないかの判定だけを求めるといふより、p であるかそれとも他の何であるかということを知ろうとしているのであると指摘している。

れているという見込みを話し手が持っている場合に使われるため、典型的な疑問文の前提と異なると考えている。また、無標・有標という観点から、肯定疑問文は無標の疑問文で、否定疑問文は有標の疑問文として捉え、ある命題についていかなる判断への「傾き」も持っていない中立的な状況では、話し手は無標の肯定疑問文を使うのが普通であるが、ある肯定の判断への「傾き」が生じている状況では有標の否定疑問文を使うと考えている。安達氏が指している否定疑問文は否定辞「ない」を持つものであり、「ではないか」「のではないか」を否定疑問文からはずして独立した形式として扱うのである。「傾き」の観点から、安達氏のいう否定疑問文の三種類を以下の表にまとめる。安達（1999）は、「傾き」との関わりによって、否定疑問文を表4のように分類し、「傾き」を持つ否定疑問文は肯定への「傾き」を持つということを中心に論じている。

表4. 安達（1999）による否定疑問文の三種類

|       |                |                                                                  |
|-------|----------------|------------------------------------------------------------------|
| 否定疑問文 | 命題否定疑問文        | ex.本当に来ない？／まだ来ない？                                                |
|       | 「傾き」を持たない否定疑問文 | ex.すみません、誰かいませんか？<br>(何かを探す文脈)<br>明日あたり飲みに行きませんか？<br>(働きかけの発話行為) |
|       | 「傾き」を持つ否定疑問文   | ex.君、疲れてない？                                                      |

カノックワン・ラオハブラナキット（1999）は、否定辞を持ちながら否定命題を構成しない「否定辞＋カ」形式を取り上げ、「ジャナイカ」「ナイカ」をまとめて「否定辞＋カ」と呼び、「 $\sim p$ 」の文脈において、「 $\sim p$ 」を「 $p$ 」に変換せよ」という意味から、「否定辞＋カ」には「内向き不確実判断提示」などの7つの用法の派生を提示した。

斎（2001）は、動詞の否定疑問形を述語に持つ文を考察し、条件つきで、はたらきかけ文へ移行することを主張している。そして、動詞の否定疑問形を述語に持つ文は、動作主体が一・二人称の時に＜勧誘＞、二人称の時に弱く＜命令＞の意味を表し、二人称の場合はもともと利益に関して中立的であるが、場面や状況に依存して＜すすめ＞を表すことがあると指摘している。

張（2008）は、「～ないか」という形式には、①「命題内容の真偽判断」「問いかける意図」「聞き手の存在」によって、「不確定質問文」「不確定判断表出文」「確認質問文」という用法があり、②「聞き手の存在」「聞き手への配慮」「行為者」「利益者」という条件によって、「勧誘」「提案」「依頼」「命令」の用法があり、さらに「願望」の用法もあると提案している。そして、それらの用法のうち、「勧誘」「提案」「依頼」「命令」「願望」という用法は「～ではないか」という形式にはないと述べている。

張（2009b）は、否定疑問文の「～ないか」には、確認要求の「～ではないか」と似た機能を持つものがあると主張し、「～ないか」の確認的な用法を、「話し手の認識に聞き手が合致しない行動を行い、話し手の認識が不安定になった際、話し手が自らの認識が正

しいことを確かめるために、その答えを聞き手に要求するもの」と定義している。確認要求の「～ではないか」との違いについて、確認的な「～ないか」は、不確定性条件が成立するところまでは及んでおらず、質問と同様に問かけ性条件が成立しているが、「～ではないか」は、広い意味での問かけ性条件を持っており、断定と同様に不確定性条件が成立していないと述べている。

宮崎（2005）は、否定疑問文の文末形式が、話し手の記憶に関する確認要求形式として機能することに注目し、動詞述語と名詞述語に分け、形態と機能の関係を表5のように提示している。しかし、形容詞述語に関しては、宮崎（2005）では議論されていない。

表 5. 宮崎（2005）による否定疑問文の文末形式と機能の関係

|        | 形態              | 推測確認 | 記憶確認 | 仮説提示 |
|--------|-----------------|------|------|------|
| 否定疑問化系 | シナイカ            | ○    | ×    | △    |
|        | シナカッタカ          | ○    | △    | ×    |
|        | N デハナイカ         | ○    | ×    | ○    |
|        | N デハナカッタカ（タ＝過去） | ○    | ×    | ×    |
|        | スル/シタノデハナカッタカ   | ×    | ○    | ×    |
|        | シタノデハナイカ（状態性）   | ×    | ○    | ×    |
|        | シタノデハナカッタカ（状態性） | ×    | ○    | ×    |
|        | N デハナカッタカ（タ＝想起） | ×    | ○    | ×    |
|        | N ナノデハナカッタカ     | ×    | ○    | ×    |
|        | N ダッタノデハナイカ     | ×    | ○    | ×    |
|        | N ダッタノデハナカッタカ   | ×    | ○    | ×    |
| 複合辞系   | スル/シタノデハナイカ     | ○    | ×    | ○    |
|        | シタノデハナカッタカ      | ×    | ×    | △    |
|        | N ナ/ダッタノデハナイカ   | ○    | ×    | ○    |
|        | N ダッタノデハナカッタカ   | ×    | ×    | △    |

### 2.1.1.7 反語の疑問文

仁田（1991：150）は、反語を「疑問表現の文形式の表す肯定事態・否定事態とは逆の事態を強く主張し、更にそれへの確認・同意を聞き手に求める意味合いを含みうる文」と定義している。

案野（2003）は、形式名詞モノを含む疑問形式の文をモノカ文と呼び、「子供にこんな難しい問題ができるものか」のような疑問形式をとりながら、「子供にこんな難しい問題はできない」という話し手の否定的主張を表す文を＜反語＞の文として、動詞句による反語の文の表現機能を考察している。案野によると、＜反語＞のモノカ文は、本来的一般的な事態の成立の肯否を強く主張する。より時間的な継続性がもたらされ、根本的にあり

えないという反発が表現される。案野（2014）は、反語文か疑問文かはイントネーションや文脈で決まることがあるが、どんなときにでも疑問文との「揺れ」がなく、その文では反語にしか解釈されない文を構成する文末マーカーとして、「動詞テたまるか」（以下「たまるか」）、「名詞ナ／イ形容詞／ナ形容詞ナ／動詞ルものか」（以下「ものか」）、「（人物名詞）＋があるか」の三形式を「反語の専用形式」と呼び、「たまるか」「ものか」「たまるものか」の三形式および「人物名詞＋があるか」の形式のそれぞれの文法的、意味的な特徴を考察している。その結果、「たまるか」は、動詞受け身テ形と動詞テ形に接続し、迷惑、不本意、不快なことを話し手が我慢できないために阻止したり、拒絶したりすることを表す。「ものか」は、名詞ナ/形/形動ナに接続する場合、談話内での繰り返し、強い否定的主張を表す。意志動詞ル形に接続する場合、話し手の強い否定的意志を表し、無意志動詞ル形に接続する場合、話し手の強い否定的確信を表す。「たまるものか」は、動詞受け身テ形と動詞テ形に接続する場合、話し手の強い気概を表し、不本意なことを心底拒否することを表す」と案野は述べている。

### 2.1.1.8 問い返しの疑問文

南（1985）では、ある言語表現が問い返し文であるためには、「問題の表現の直前に、相手のなんらかの発話がある」「話し手（質問者）は、相手の、そのことばを、そのままか、それに近い形でくりかえすことによって、相手にそれを確かめるものである」という2つの条件を満足させる必要があると述べている。そして、問い返し文の一般的性質は、確定も把握も不十分であると受け手（＝問い返し文の質問者）が意識して、それを再現行動により送り手（＝相手）に確かめるものと指摘している。問い返し文の種類を3つに分け、定義と用例を以下の表6のようにまとめられる。

表 6. 南（1985）による問い返し文の種類

|          |                                                        |
|----------|--------------------------------------------------------|
| 直接問い返し文  | ①完全直接問い返し文：相手のことばの全部をくり返すもの                            |
|          | （もう練習をやめて帰りたいんですけど… <sup>12</sup> ）もう練習をやめて帰りたいんですけど？  |
|          | ②不完全直接問い返し文：相手のことばの一部だけをくり返すもの                         |
|          | （もう練習をやめて帰りたいんですけど…）帰りたいんですけど？                         |
| 間接問い返し文  | ③相手のことばをそのままくり返すのではなくて、質問者がなんらかの点でそれを質問者自身のことばにしたずねるもの |
|          | （今度の企画は私にやらせてください。）今度の企画は君がやりたい？                       |
| 部分的問い返し文 | ④全体としては問い返し文の条件をみたすが、部分的に通常質問文（とくに補充質問）の要素を含むもの        |
|          | （Aさんは…日にまた来ます。）Aさん、いつまた来ますって？                          |

<sup>12</sup>南（1985）では、「…」がききとれなかった部分を示す。

### 2.1.1.9 疑問形式の従属節

馬場（1998）は、真偽疑問文の形式が従属節となる複文のうち、「どうか」が付加されないカ名詞節・カ副詞節の特徴や制約を、「どうか」の付加されるカドウカ名詞節・カドウカ副詞節などの構文と関連させながら考察している。

高宮（2003）では、文中に埋め込まれた疑問文が述語の補充節となった構文を間接疑問文とし、間接疑問文と同様に疑問文が文中に埋め込まれた構文を取り上げ、それらと間接疑問文の相違点と共通点を検討することによって、間接疑問文の位置付けを述べている。高宮（2005）は、格助詞を伴わない間接疑問文について、現代と室町時代・江戸時代のもを比較対照し、日本語の間接疑問文の特徴を検討している。

生井（2006）は、間接疑問文は直接答えを要求せず、全体（すなわち主節の部分）が平叙文であるため、疑問文ではないと主張している。

金水（2012b）は、間接疑問文と直接疑問文を区別し、間接疑問文の形態論的・統語論的な性質を厳密に規定した上で、作品から用例を抽出し、「の」の分布について統計的な観点から考察を行い、間接疑問文の疑問詞疑問文と直接疑問文の疑問詞疑問文に比べて、「の」のないものが多いということを証明した。

### 2.1.1.10 まとめ

以上、記述文法における先行研究は、疑問文（疑問表現も含む）の定義、分類、文末形式、疑問詞、傾きなどについての記述をまとめてきた。そのうち、文末形式に対する個々の分析、あるいはいくつかの形式への比較分析が見られたが、体系的な論述がなかった。そして、先行研究における不備についても指摘した。

## 2.1.2 音声学的観点からの研究

文末イントネーションが疑問文の機能を決める要素の一つであるため、本節では疑問文の文末イントネーションを議論するものを取り上げて紹介する。森山（1989）は、それぞれの発話に対して、話し手の談話的な意味を積極的に表すのがイントネーションであると指摘し、終助詞を中心とした文末諸形式の意味の分析に相関させて考えており、文末諸形式がどのようなイントネーションの制約を持つかについて、以下の表7のように提示している。

表 7. 森山（1989：181）による文末諸形式におけるイントネーションの制約

|                       |                           |
|-----------------------|---------------------------|
| 必ず <sup>13</sup> 上昇調  | ね、よね、わね                   |
| 必ず、下降調                | だろうか、か（納得）／ねえ、なあ（共に急激な下降） |
| 普通 <sup>14</sup> 、上昇調 | か、かね                      |
| 普通下降調                 | よ、さ、ぞ                     |

今田（1998）は日本語教育の立場から、テレビ番組の中での自然な談話を調査資料として、「か」を伴う疑問詞疑問文と単純疑問文（肯定疑問文・真偽疑問文）の文末イントネーションが上昇調かどうかを再考し、日本語教育の現場で「か」疑問文の文末は上昇調とのみ指導している点を指摘し、考察から非上昇の例がかなり確認されたということを述べている。

熊野他（1999）は、東京語話者による『しんにほんごのきそ I』の会話文中の疑問文で、「です・ます体」で「か」を伴い、応答を期待して発するものを分析対象とし、疑問文末詞「か」のイントネーションは、上昇（調）・非昇（調）に大きく二分し、さらに上昇を内昇・外昇<sup>15</sup>に分けて考察した。

### 2.1.3 語用論的な研究

疑問文についての語用論的研究があまり多くないようであるが、次に先行研究をまとめて紹介する。

日本語疑問文の語用論的研究が 1980 年代から始まったのである。矢野（1989）は語用論の立場から疑問文の分析を試み、その成立におけるコンテキストの重要性を強調した。千（1993）は、「話し手の行為受益」というコンテキストから発揮される対人関係のストラテジーとして、命令文＜条件文＜平叙文＜疑問文＜間接発話行為文の順に、文の「丁寧さ」が実現されるとし、行為賦課文の語用論的「丁寧さ」を発揮するために、聞き手に行う行為履行の妥当性を提示した。千では、丁寧さの角度から、間接発話行為文と疑問文の丁寧さが他の文より強いと指摘しているが、その理由は説明されなかった。牧原（1994）は、「～ダロウカ」「～デショウカ」という形式の疑問表現が実際の発話において持っている機能および、両者の相違点を議論している。牧原によると、両形式は、話し手が、聞き手が話し手の要求する情報を持っていないと想定して情報を要求していることを示し、コンテキストの違いによって区別できる。三角（2000）は、話者命題による聞き手の命題の否定という観点から、文末の「ンジャナイ（カ）」の語用的機能について考察している。「ン

<sup>13</sup>森山（1989:181）では、「必ず…」とは、その上昇調・下降調の制約に違反すると、極めて不自然になるタイプであると指摘している。

<sup>14</sup>森山（1989）は、無標の意味では、上昇調・下降調が決まっているが、文末イントネーションをあえて変更することが可能なタイプである。この場合、上昇・下降の違いは、情報伝達的なレベルでの対立ではなく、むしろ、ニュアンスの違いを表すものとして考えている。

<sup>15</sup>熊野他（1999）によると、「外昇」とは、文末上昇が文全体の最高の Fo を示すものであり、「内昇」とは、文末上昇が文全体の最高 Fo の範囲内にある場合である。

「ジャナイ（カ）」には「話者の新命題が聞き手命題を否定する機能」「話者の新命題が聞き手命題を肯定する機能」「先行する聞き手命題に対して話者の弱い否定判断を示す機能」「話者の命題と聞き手の命題の間に否定関係はなく、命題に対する低い確信度を示す機能」があると述べられている。

比較的最近のものは山嵯・横森（2006）、工藤（2006）、加藤（2009b）、佐藤（2010）、洞澤・高木（2012）、荻野（2012）と熊井（2014）である。

山嵯・横森（2006）は、日本語の表現形式の一つである否定疑問文を対象にして、否定疑問形式の中の「[動詞]+ないか」という形式に着目し、言語表現の理解のレベルと行為の理解のレベルで話し手の動機づけと否定疑問文の語用論的機能について考察した。

工藤（2006）は、これまで疑問文の文末における「か」の有無に関する先行研究が文レベルの考察であり、語用論的観点から考察されたものは数少ないと指摘し、会話データを収集し、前後の文脈を考慮した上で、丁寧体の疑問文文末における「か」の有無による疑問文の機能を考察した。その結果、「のだ」疑問文への置き換えや「もしかして」との共起関係から、丁寧体の「か」省略疑問文は情報要求機能だけでなく、「確信はないが、前後の文脈などからなされた予測や判断を確定的なものにするために問いかける」という確認要求機能も持つことを検証している。

滝浦（2008）は「か」を伴う場合と伴わない場合における疑問文機能上の相違について論じている。滝浦によると、「もう一軒行きますか（㇏）」という「か」を伴った質問文は、質問のニュアンスが強い。「もう一軒行きます（㇏）」という「か」を使わない文は、質問というより、勧誘のニュアンスが強く、話し手自身「もう一軒行きたい」と思っているだろうと推論できる。しかし、他の疑問文による「か」の使用と不使用による差異は、これほど大きくない。例えば、否定形式の疑問文の場合、「もう一軒行きませんか（㇏）」と「もう一軒行きません（㇏）」の2つの文は、いずれも勧誘を表している。「か」の使用と不使用による差異があまりない。常体の場合、「もう一軒行くか（㇏）」と「もう一軒行く（㇏）」では、「普通体（常体）+か」は、上位者的という話者の制限が強い。「か」の不使用は、タメ語として言うことができる。常体と「か」の不使用、敬体と「か」の使用は、容認度が高い。丁寧体自体が対人的な距離の大きさを表示してしまい、敬体と「か」の不使用は、相対的に距離が縮まることになるが、「甘えた」あるいは「押し付けがましい」というニュアンスで受け取られる可能性も生じる。普通体の使用自体は対人的な距離が小さく、話し手と聞き手が事柄を共有している度合いが強い。そのため、「もう一軒行く（㇏）」は、「勧誘」の意味を強く表している「もう一軒行きます（㇏）」と異なり、質問とも勧誘とも解釈できる。

加藤（2009b）において、「～じゃないですか」という否定疑問の形式は丁寧さの原理で分析され、その形式の自由のメカニズムが解明されている。加藤（2009b）は、「～じゃないですか」のような用法を使用する話し手は、聞き手が積極的に会話に参加してほしい、会話を盛り上げたいという心理をもつ可能性がある」と述べている。しかし、話し手には共感形成の欲求があるが、聞き手にも同じような方向性があるとは限らないとも指摘している。

佐藤（2010）は〈のではないかと〉の「質問」と「疑い」という語用論的機能の対立に

について議論している。コーパスにおける〈のではないか〉の用例を分析した結果、多くの例において〔質問〕〔疑い〕の区別が〈(か) な〉〈(か) しら〉〈だろう (か)〉などの形態論的手段、「～のではないかとスル」などの統語論的手段によって明示されており、〔質問〕〔疑い〕のコーパスにおける用例数の分布を分析した上、〔質問〕においては上記の標示手段を取らない用例が多く、〔疑い〕においてはその標示を伴う用例が多いと指摘している。

洞澤・高木(2012)は、若者たちにおける共通語の「～じゃないですか」という表現の使用と聞き手がそれに対して抱く印象の相関関係およびコミュニケーション機能について、ポライトネス理論を利用して考察した。未知情報について使用される「～じゃないですか」をどう感じるのかという問題について、アンケート調査では、約8割の回答者が「唐突である」または「押し付けがましい」というネガティブな感じ方を持ち、洞澤・高木は、未知情報について使用される「～じゃないですか」が有無を言わず聞き手を勝手にルールの上に乗せて話し手の領域に引き込むような話し方であり、聞き手のネガティブ・フェイスに対するFTA(フェイス侵害行為)になると述べている。それに対して、2割が「普通である」または「親しみがある」というポジティブな感じ方を持ち、この場合、「～じゃないですか」の使用が聞き手のポジティブ・フェイスに働きかけるポライトネスとなるという。本研究の用例資料によると、「～じゃないですか」という表現を用いるのが若者のみではなく、中高年の男性にも用いる。「～じゃないですか」というのは若者たちしか使わない共通語ではないことがわかった。

荻野(2012)は、日本語と英語における肯定疑問文を用いた依頼表現(P依頼)と否定疑問文を用いた依頼表現(N依頼)の差異に対して、ポライトネスの視点から考察を行った。荻野によると、日本語ではP依頼とN依頼に関わらず、まず、授受動詞の使用によって相手のpositive faceが守られる。そして、N依頼の場合は、依頼者に対して同意の立場での断りを可能とすることで、相手のnegative faceに対する擁護となる。そのため、N依頼は相手のpositive / negative faceの両方を擁護することになるが、P依頼は、授受表現による相手のpositive faceしか擁護しないことになる。

熊井(2014)は、ポライトネスの視点から、カナとの違いも含め、文末表現のカネの意味や機能、またカネが用いられる動機等について考察した。熊井は、「かね」を「話し手や聞き手の記憶や知識、感情や意向などと自分の認識を一致させながらも最終的な結論を出さず、その認識を聞き手に属するものとして聞き手に示し、さらには同意や確認などの反応を求めたりするものである」と定義し、カネの対話的用法を中心的に論じており、カネはPP・NP両方の面を持つが、話し手と聞き手が同じ情報を共有することに重点をおいた表現であることから、カナに比べてよりPFに配慮したPPという面を持つと述べている。

#### 2.1.4 まとめ

以上、疑問文に関連する先行研究を「記述文法」「音声論」「語用論」という3つの分野

に分けて概観してきた。従来の研究による記述を整理した上、以下の問題点を指摘することができる。

疑問文を考察するにあたり、まずは疑問文をどのように認定するかということが重要になる。しかし、この点については、先行研究では大まかな条件を提案した程度で終わるものが多く、より詳しく議論する必要がある。そして、「質問」という疑問文の本質的機能が重んじられ、疑問文の派生された機能に関してはまだ検討する余地がある。疑問文の機能に関しては、文末イントネーションを考慮しながら分析するものはあるが、それぞれの文末形式と共起できる文末イントネーションの詳細について論じるものについては見当たらなかった。また、疑問形式本来の意味機能についての記述が数多く見られるが、発話レベルでの研究がそれほど多くない。さらに、語用論的観点からの研究はほとんど個別の形式・現象について議論している。

本研究では、先行研究の成果を踏まえ、疑問文の認定、派生的機能と文末イントネーションの使用をより詳細に検討する。そして、発話文としての疑問文を取り上げ、語用論的知見を加えながら、疑問文の語用論的機能・使用動機を分析する。

## 2.2 本研究の立場

### 2.2.1 疑問文の定義

疑問文の形式的特徴は、疑問詞の有無、文末形式（終助詞）の使用、文末イントネーションの上昇・非上昇という3つで表される。本研究は、先行研究を参照しながら、疑問文を「形式上、疑問詞、上昇調の文末イントネーション、文末形式（終助詞「か」など）のいずれかを有することによって、機能的には回答要求を表すものである。」と定義する。しかし、この定義に従わないものもある。例えば、疑問形式を用いながら、回答要求を表さず、疑いや反語などを表すものがある。本研究は、まず形式的に文が疑問文であるかどうかを認定してから、その形式が有している機能の分析を行うという手順をとる。形式上の特徴から、ある文が疑問文であると認定する基準を以下のように提案する。

#### ア)【文が疑問詞を有している場合】

- ① 文末形式の使用に関わらず、上昇のイントネーションを伴ったもの。
- ② 非上昇のイントネーションを伴うことも可能であるが、文末形式の使用には制限がある。例えば、終助詞「か」類の使用によって、文が疑問文であると認定できる。

#### イ)【文が疑問詞を有していない場合】

- ③ 文末形式を用いていないが、上昇調のイントネーションを伴ったもの。
- ④ 文末形式の違いによって、上昇調のイントネーションと非上昇調のイントネーションのいずれかを伴ったもの。

以下で議論する疑問文は、すべて形式的特徴から疑問文であると認定可能なものである。

## 2.2.2 疑問文として取り扱う範囲

本研究は、現代日本語標準語における話し言葉として用いられる疑問文を研究対象とし、疑問文の定義に基づき、本研究で取り扱う疑問文の範囲を規定する。

まず、文にはどのような種類があるかについて見ておく。加藤（2006）は、文を形式的特徴から①命令文、②疑問文、③平叙文という3種類に分け、その3種類はいずれも否定にすることが可能（①禁止命令文②否定疑問文③否定（平叙）文となる）であるため、基本的には意味的な制約がない限り、否定文を1つの文のタイプとして数える必要はないと主張している。そして、加藤（2006：7）は、「西欧語では感嘆文は平叙文とも疑問文とも異なる形式なので文の種類の1つにたてる意味があるが、日本語では感嘆文は「なんと美しい花だろう」「なんと速く走ることか」など主に疑問文の形式で実現し、「どんなに努力していることか」「いかばかり悲しかったらうか」「どれだけものを知らないことだろう」などテイル形やタ形の文、否定文にすることも可能であるが、形式上は一種の疑問文と見るべき性質をもっている」と述べ、感嘆文という文のタイプを立てていない。本研究は、加藤（2006）に従い、感嘆文を疑問文の一種として認めるが、研究対象に入れないことにする。

また、「水!」などの一語文を潜在的な文とみなし、それは省略されている要素を補うことで文に復元することができる。このように潜在的には文であるが、文の要素が欠落しているものは不完全な文であると加藤（2006）では指摘している。

なお、具体的に不完全な文にはどのようなものがあるかについて、まず文の構成について見ておく。加藤（2006:5）では、「文は、通例述部が主語や目的語を伴った形で作られているものであるが、日本語では主語や目的語にあたる要素を省略することが可能なので、文の中核部分は述部ということになる」という。話し言葉に使われる文はすべての構成要素を揃えているものではなく、欠けている要素のある文も頻繁に使用されていると考えられる。本研究では、疑問形式で表れる一語文、言いさし文と述語を持たずに助詞で終わるものを不完全な疑問文として捉える。まず、疑問形式の一語文について見ておく。

### (1) 小動「薫子さん」

薫子「何（*㇏*）<sup>16</sup>」

『失恋ショコラティエ』第5話

### (2) 薫子「祝賀会の日程なんだけど、22日にしようと思うの。」

オリヴィエ「22日（*㇏*）沙絵子さんの誕生日（*㇏*）」

『失恋ショコラティエ』第5話

---

<sup>16</sup>本研究では、（*㇏*）は上昇調で発音されることを表し、（*㇏*）は非上昇調で発音されることを表す。

尾上（1998）は、「形としては単語一語であるものが、単なる語的概念の表示たることを超えて、文としての内容を表現するに至ったものが一語文である」と述べている。そして、日本語文法学会（2014：21）では、「一語文は、典型的には名詞一語のような概念表示形の単語一語で一文となっているものである」と定義している。それらに従い、(1)の「何（ノ）」のような一単語で成り立つ文は一語文として認定できる。しかしながら、本研究では、広い意味で一語文を取り扱い、一語文には一語で成り立つものとそうでないものがあるとする。(2)の「22日（ノ）」と「沙絵子さんの誕生日（ノ）」のような一語ではない文も一語文の範囲に入れておく。

日常会話においては、言いさし文の使用が頻繁に見られる。言いさし文に関する先行研究は数多くあるが、その中で代表的なものとして白川（2009）が挙げられる。

白川（2009）は、形式上、主節を伴わずに従属節のみで表現される文を広い意味で言いさし文とし、ケド節、カラ節、タラ節、レバ節、シ節とテ形節で終わる発話を考察し、「言いさし文」の機能および位置づけなどを論じている。言いさし文の文法的位置づけについて、白川（2009：4）は、「①「言いさし文」を「完全文」に還元して説明する立場、②「言いさし文」を完全文とは別立てで説明する立場、③「言いさし文」と「完全文」を統一的に説明する立場」としている。①の立場から見れば、言いさし文は、本来あるべき主節が省略されている不完全な文である。本研究で取り扱う疑問形式の言いさし文を「主節が省略されている不完全な文」として捉え、分析する際に、言いさし文を完全な文に還元して論を進める。

言いさし文の中に疑問形式になり得るのは、カラ節、タラ節とレバ節である。

(3) 【<sup>17</sup>浩康が川原由樹の元婚約者である。】

浩康『『エターナルレシピ』、読みました。俺には分かりますから、由樹が書いたってこと』

遠野「強い絆で結ばれてるから（ノ）なのにあなたには、彼女から連絡がないのね。」

『ゴーストライター』第7話

(4) 赤岩「白尾、お前本当に一切勉強しない気か（ノ）」

白尾「しない。」

柚子「試験前ぐらいいは勉強したら（ノ）」

『「弱くても勝てます」開成高校野球部のセオリー』第4話

(5) 【エリはずっと立っている健三に対して】

エリ「健、座れば（ノ）」

『プロポーズ大作戦』第2話

(3)の「強い絆で結ばれてるから（ノ）」は原因・理由を表す接続助詞「から」で終わ

---

<sup>17</sup>本研究では、【】で会話の場面に対しての説明内容を示す。

る不完全な疑問文である。主節を復元し、「強い絆で結ばれてるから、由樹が書いたってことがわかったの(？)」という完全な文になる。(4) (5) では、動詞の条件形「～たら」「～れば」が「～たらどうか」「～ればどうか」の省略された形式である。主節を復元し、(4) (5) は「試験前ぐらいは勉強したらどう?」「健、座ればどう?」という完全な文になる。Kato (2014) は、条件節の典型的な非従属化が「～たら」と「～ば」で終わるものには、一般的に省略されるのが主節の疑問文であり、形式自体はアドバイスや勧誘を表すと述べている。それらの不完全な疑問文が、上昇調イントネーションをとって、聞き手に問いかける性質も持っている。

そして、述語を持たずに助詞で終わる不完全な文は、(6) ～ (15) のようなものである。

(6) 塚田「小田、荷物来てるよ。」

小田「どこから (？)」

塚田「東亜通信社。何 (？) 結構重いけど」

『ゴーストライター』第5話

(7) 柚子「テーピングマスターしたら、スコアブックの付け方教えるから。」

志方「えっ?まさか僕をマネージャーに (？)」

『「弱くても勝てます」開成高校野球部のセオリー』第3話

(8) 藤岩「ここまでで、何か質問は (？)」

『地味にスゴイ 校閲ガール・河野悦子』第1話

(9) 鶴代「パパが浮気したのかもって」

通子「由美がそんなことを (？)」

『隠れ菊』第4話

(10) 佐田「どこまで (？)」

『99.9—刑事専門弁護士—』第4話

(11) 佐田「立花、行くぞ。」

立花「はい。どちらへ (？)」

『99.9—刑事専門弁護士—』第8話

(12) 功一「で、今日はどのようなご用件で (？)」

深山「今日はお一人ずつ別々にお話を伺います。」

『99.9—刑事専門弁護士—』第9話

(13) 西原「編集長のお母さんと (？)」

千奈美「そう。お友達なんです。それでお願いしてくれて」

『ファーストクラス』第1話

(14) 西園寺「院長、私が追い出してみせましょう。」

内科部長「また後出しジャンケン」

院長「あなたが (？)」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第2話

(15) 私も (？)

次に、完全な疑問文について見ておく。(16) (17) のような疑問文は、従属節がなく、文の要素が揃っている完全な疑問文である。(16) では文末形式「か」が付加されているが、(17) では文末形式「か」が省略されている。

(16) 深山「早速ですが、ご出身はどこですか (〇) 」

『99.9－刑事専門弁護士－』第8話

(17) ようこ「口説こうとしてます (〇) 」

『かもしれない女優たち』

従属節のある疑問文には、(18) のような疑問形式の従属節が主節の疑問文に埋め込まれるものと、(19) のような疑問形式ではない従属節が主節の疑問文に埋め込まれるものがある。

(18) 藤居「例えば、この文章、どこが間違っているか分かりますか (〇) 」

河野「どっか間違ってます (〇) 」

『地味にスゴイ 校閲ガール・河野悦子』第1話

(19) 太郎がここにいるのを知らなかった (〇)

上例の2つの主節がいずれも疑問文であるが、疑問形式の従属節が主節の平叙文に埋め込まれる(20) (21)、命令文に埋め込まれる(22)と、言いさし文に埋め込まれる(23)も見られる。例えば、

(20) 行くかどうかはまだ決めていません。

(21) 神崎「やるか、やらないか、ハンドルを切るのは遠野リサだ。」

『ゴーストライター』第2話

(22) 吉川「大体、あなたって何なの!? いい人なのか悪い人なのか、はっきりしなさいよ。」

『クロサギ』第4話

(23) 沙絵子「それでね、ウェーディングケーキと披露パーティーのデザート、爽太君にお願いできないかなと思って…」

『失恋ショコラティエ』第1話

(20) の「行くかどうか」、(21) の「やるか、やらないか」と(22) の「いい人なのか悪い人なのか」は選択疑問形式の従属節である。(23) の「爽太君にお願いできないかな」は、弱い問いかけの疑問形式の従属節である。

従来の研究では、(20) ～ (23) のような疑問形式の従属節を有する文を間接疑問文として捉えている。本研究は、主節の形式に基づいて疑問文として扱う範囲を規定するため、間接疑問形式を従属節として有しているが、主節が疑問形式ではないものを疑問文の

範囲に入れないことにする。本研究における疑問文として扱う範囲および形式に基づく疑問文の分類を以下の表 8 のように示す。

表 8. 本研究における疑問文として扱う範囲および形式に基づく疑問文の分類

| 形式に基づく疑問文の分類 |                             | 用例          |
|--------------|-----------------------------|-------------|
| 不完全な疑問文      | 一語文                         | (1) (2)     |
|              | 言いさし文                       | (3) (4) (5) |
|              | 述語を持たずに助詞で終わるもの             | (6) ～ (15)  |
| 完全な疑問文       | 従属節のない疑問文                   | (16) (17)   |
|              | 疑問形式の従属節が主節の疑問文に埋め込まれるもの    | (18)        |
|              | 疑問形式ではない従属節が主節の疑問文に埋め込まれるもの | (19)        |

### 2.2.3 用例の収集

まずは、本研究でどのように用例を収集するかについて説明しておく。従来の日本語疑問文の先行研究において使われている用例は、主に作例、文学作品の用例、コーパスの用例、テレビドラマ・映画のセリフと会話の録音データである。その中でも、『CD-ROM 新潮文庫の 100 冊』（新潮文庫）における文学作品から用例を抽出して使う先行研究が多数である。コーパスの用例は宇佐美（2011）の「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年度版）」から抽出するものが多く見られる。本研究の分析対象とするのは、話し言葉の疑問文であるため、文学作品から疑問文を抽出する場合、疑問文の文末イントネーションの昇降が判断しがたいという問題が生じる。テレビドラマでは、疑問文の発話を音声的に捉えられる。そして、テレビドラマを研究対象とする合理性については、メイナード（2001）は、テレビドラマのことばは日常のことばと同一ではないが、両者はかなり似通ったものであると指摘し、ドラマのことばの日常化ということもあり、日本語文法の全体像を明らかにするためには、テレビドラマも重要な研究対象の一部であることに変わりはないと述べている。

テレビドラマにおいて、登場するキャラクターの年齢、職業、社会的地位などの社会的属性と発話場面が様々であるため、より自然な会話に近い、あるいは自然な会話に相当していると言えるであろう。そして、会話をしているキャラクターの発話から、文末イントネーションを聞き取れるため、小説などの文学作品より実際の会話の様子を再現できると思われる。以上の理由で、現代の話し言葉を反映するものとして、テレビドラマのセリフを取り扱う。テレビドラマのほかに、テレビ番組と普段日常生活で聞き取れた会話も分析の用例に入れる。次に、題材に拘らず、発話者の年齢・性差、発話場面の豊かさなどを十分配慮した上で、本研究は連続ドラマ 19 部、スペシャルドラマ 1 部とテレビ番組 2 部か

ら用例の収集を行った。

#### **2.2.4 疑問文の使用状況**

疑問文として取り扱う範囲を限定した上、連続ドラマ19部、スペシャルドラマ1部とテレビ番組2部から、ランダムに総計1066の用例を抽出した。本研究の対象となる疑問文は形式上、不完全な文と完全な文に分けられるため、この2種類の対象を下位分類して各種類の用例数を表9に示した。

表 9. 各疑問形式の用例数

| 研究対象    | 下位分類           |                   | 用例数 |
|---------|----------------|-------------------|-----|
| 不完全な疑問文 | 一語文            |                   | 47  |
|         | 言いさし文          |                   | 65  |
|         | 述語を持たずに助詞で終わる文 |                   | 108 |
| 完全な疑問文  | 文末形式なしの文       |                   | 126 |
|         | 文末形式ありの文       | かい                | 5   |
|         |                | だい                | 3   |
|         |                | か                 | 121 |
|         |                | かな                | 75  |
|         |                | かなあ               | 9   |
|         |                | かしら               | 21  |
|         |                | だろうか              | 12  |
|         |                | かね                | 49  |
|         |                | かねえ               | 7   |
|         |                | のか類 <sup>18</sup> | 95  |
|         |                | だろう・でしょう          | 60  |
|         |                | ではないか             | 42  |
|         |                | だ                 | 19  |
|         |                | な                 | 4   |
|         |                | よな                | 20  |
|         |                | よね                | 44  |
|         |                | だろうな              | 21  |
|         |                | だろうなあ             | 5   |
|         |                | だろうね・でしょうね        | 24  |
|         |                | でしょうか             | 41  |
|         |                | っけ                | 15  |
|         |                | かよ                | 28  |

以上で確認したように、話し言葉に用いられる疑問文は、様々な形式を持っている。そして、そのうち、不完全な疑問文は 220 例であり、さらに完全な疑問文の中に文末形式を持たない文が 126 例であることから、話し手はいつも文としてすべての要素を有する疑問文を使うのではなく、不完全な疑問文や文末形式が省略されたものも多用していることがわかった。その中から、「ねえ、これで本出したら (〇)」「何か思い付きました (〇)」などの用例を抽出して、本論文の分析対象とする。

<sup>18</sup> 本研究では、「のか」類には、「の」「のか」「のよ」という形式があるとしている。

## 2.3 本章のまとめ

記述文法、音声論、語用論における疑問文の先行研究を整理した。以上の先行研究を踏まえ、本研究における疑問文の定義および認定条件を提案した。続いて、形式上の特徴から、疑問文として取り扱う範囲を完全な疑問文と不完全な疑問文に限定した。テレビドラマ・テレビ番組のセリフを文字化したものを用例として収集し、完全な文と不完全な文に分けて各種類の疑問文の用例数を統計した。本研究での疑問文の用例収集および疑問文の使用状況を提示することによって、話し言葉に用いられる疑問文は、様々な形式があり、不完全な疑問文と完全な疑問文でありながら、文末形式を持たないものが多いことがわかった。

## 第3章 疑問形式の意味機能についての基礎的考察

前章では、本研究と関連性のある先行研究をまとめ、本研究で取り扱う疑問文の定義と範囲を示した。本章では、疑問形式の三要素を整理し、疑問形式とその形式が対応する機能を考察し、疑問文の運用に関わる要素を分析する。

### 3.1 疑問形式に関する諸要素

疑問文の形式に関わる統語的要素としては、疑問詞、文末形式であり、音声的要素としては、疑問文の文末に伴うイントネーションが挙げられる。一般的には、疑問詞のある文が疑問詞疑問文として認められる。そして、文末に「か」の付加と上昇調の文末イントネーションがあれば、問いかけ（質問）を表す通常の疑問文として判断しうるが、疑問文の形式と文末イントネーションがこのような単純な原則で決められないため、再整理する必要がある。以下は、疑問詞、文末形式、文末イントネーションを主に考慮しながら、文体とテンスという要素も考慮に入れて疑問形式を検討する。

#### 3.1.1 疑問詞

益岡・田窪（1992）では、指示詞「ど」系列にある「どれ、どこ、どちら、どの、どんな、どう、どうして」等の語、「誰、何（なに/なん）、いつ、いくつ、いくら」という名詞、および「なぜ」という副詞を疑問語としている。本研究は、疑問詞という用語を用い、益岡・田窪（1992）で言われる疑問語、および「何」を含める「何時」「何歳」「何カ国」のような複合語も疑問詞の範囲に入れることにする。形式上疑問詞の有無によって、疑問文を、疑問詞のある疑問文を疑問詞疑問文、疑問詞のない疑問文を真偽疑問文に分けられる。疑問詞疑問文は、通常その疑問詞に当てはまる情報を求めるために用いられるが、疑問詞を含む疑問文の中に、機能上は疑問詞疑問文ではないものが見られる。

(24) 西門「君、どっかで俺と会ったことある（?）」  
水野「いいえ。」

『アリスの棘』第1話

(24) では、「どっか」というのは、「どこか」の音変化である。加藤（2006）にも指摘されたが、(24) のように、「どこ」などの疑問詞に副助詞の「か」をつけることで、疑問詞の指すものを尋ね問う機能がなくなり、不明なままに提示する用法（不定化）になる。そして、「か」を付加することによって、文は真偽疑問文となり、「はい／いいえ」という肯否を求めている。

(25) 蛭子「許してくれ、何でもするから！」

水野「何でもする (↑)」

蛭子「お願いします。何でもします。」

『アリスの棘』第1話

(25) の「何でもする (↑)」という疑問文では、「何」に取り立て助詞の「でも」を付加することによって、文自体は疑問詞を用いるが、疑問詞疑問文ではなく、真偽疑問文である。

疑問詞疑問文の中には、「何を食べますか (↑)」という肯定疑問と「何を食べないですか (↑)」という否定疑問がある。前述したように、本研究では、否定文を1つの文類型として捉えないため、ここでは疑問詞であることを重要視して、いずれも疑問詞疑問文として捉える。

そして、「誰もワイン飲まないの (↑)」のように、「誰」は「ない」と呼応して、「ワインを飲む」ということを全面的に否定している。この場合、形式的には「誰」という疑問詞を含める疑問詞疑問文であるが、機能上は「はい／いいえ」という肯否を求める真偽疑問文になる。

文末形式をもたない疑問詞疑問文の場合、常体と敬体の用例を分けて整理する。

(26) a.これ、誰の本 (↑)

b.これ、誰の本 (↘)

(27) a.どこに行った (↑)

b.どこに行った (↘)

(26) (27) は事実に関する質問である。(26) (27) は、上昇調を伴う場合、普通の問いかけを表すが、非上昇を伴う場合、「非難」の意味が読み取れる。

(28) a.どれがいい (↑)

?<sup>19</sup> b.どれがいい (↘)

それに対して、(28) は聞き手の意向に関する質問である。聞き手の意向を非難する必要がないため、(28) は非上昇を伴う場合、発話文としての容認度が下がる。上昇調をとる場合は自然な文であり、普通の問いかけを表す。

(29) 神崎 a.「岡野さん、何の話です (↘)」

b.「岡野さん、何の話です (↑)」

c.「岡野さん、何の話ですか (↑)」

---

<sup>19</sup>本研究では、「?」で自然な発話文としての妥当性の判断が揺れる文を示す。

d. 「岡野さん、何の話ですか (↘)」  
岡野 「小田、よろしく。」

『ゴーストライター』 第 10 話

(30) 【飲食店の店員がお客様に対して】

店員 a. 「はい、何にしましょう (↘)」  
?b. 「はい、何にしましょう (↑)」

『きょうは会社休みます。』 第 1 話

(31) 【乗務員の晴が乗客に対して】

晴 a. 「どうされました (↑)」  
\* <sup>20</sup>b. 「どうされました (↘)」

『ミス・パイロット』 第 2 話

(29) の a 文では「か」が省略され、非上昇調の文末イントネーションが伴われているが、一般的には、b 文のような上昇調の文末イントネーションを伴うのが普通である。しかし、a 文の話し手が中年男性であることを考えれば、発話文に非上昇調の文末イントネーションを取ることが許容されうる。それに対して、「か」が付加されている c 文と d 文は、上昇調、非上昇調とも自然であるが、c 文は純然たる回答要求を表しているのに対して、d 文は疑念表明と回答要求両方を表している。

そして、(30) のように、「～よう」「～ましょう」で終わる文が非上昇調をとる場合は自然であるが、上昇調をとる場合は不自然になる。(31) のように、乗務員の話し手は乗客の調子を尋ねている場合、上昇調をとるのが自然である。非上昇調をとる場合は、非難の意味が読み取れるため、語用論的に不適切である。

森川 (2009) では、情報疑問文の「ダ」がモーダルとして機能し、非情報疑問文の「ダ」と補文の「ダ」は繫辞として機能することを主張している。

(32) a.\*<sup>21</sup>誰が犯人ダカ？

b. 誰が犯人デスカ？

c. 誰が犯人ダ？

d. 誰が犯人デス？

(33) a.\*太郎が犯人ダカ？ [↑]

b. 太郎が犯人デスカ？ [↑]

c. \*太郎が犯人ダ？ [↑]

d. 太郎が犯人デス？ [↑]

(森川 2009 : 26)

森川によると、真偽疑問文の場合、「常体のダ+カ」と「常体のダ」のみの形式が非文

<sup>20</sup> 本研究では、「\*」という記号は、文が語用論的に不適切であることを表す。

<sup>21</sup> 森川 (2009) では、「\*」という記号は文が非文法的であることを表す。

法的である。それに対して、疑問詞疑問文の場合、「常体のダ+カ」という形式が非文法的であるが、「常体のダ」のみの形式が文法的である。なぜ平叙文で用いられる「ダ」を疑問文で用いることができるかについて、森川（2009）が生成文法の立場から、説明を提案している。「常体+だ」という文末形式を有している疑問詞疑問文の発話には以下のようなものがある。

(34) 小田「失礼します。」

専務「何だ (ㇿ)」

小田「すみません。専務にご相談がございます。」

『ゴーストライター』第10話

(35) 塚田「冗談ですよ。小説でゴーストなんていまどきいませんよ。」

小田「何だ (ㇿ) びっくりした。」

『ゴーストライター』第3話

疑問詞疑問文の機能について、(34)の男性による発話では、「何だ」という文が情報要求を表しているが、(35)では、「何だ」という疑問形式が「何」に当てはまる情報を要求しているのではなく、話し手のとがめる気持ちを表す表現として定型化している。(36)～(40)のように、「常体+だ」という文末形式を有している疑問詞疑問文の発話は主に男性によって用いられる。そして、「だ」に伴う非上昇調の文末イントネーションが多いが、(39)のような上昇調の発話文も見られる。

(36) 神崎「少し書く事から離れてみたらどうだ (ㇿ)」

遠野「離れる (ㇿ)」

『ゴーストライター』第3話

(37) 副編集長「編集長、売り上げのデータなんですが、『偽りの日々』という小説が目立った売り上げを示しています。」

神崎「『偽りの日々』 (ㇿ) どこの出版社だ (ㇿ)」

(38) 神崎「どういうことだ (ㇿ)」

小田「遠野先生の『私の愛しい人』をうちから出します。」

『ゴーストライター』第10話

(39) 佐田「大体私の部屋を勝手に使ったのは誰だ (ㇿ)」

戸川「深山先生です。」

『99.9—刑事専門弁護士—』第1話

(40) 河村社長「この金は何だ (ㇿ)」

『99.9—刑事専門弁護士—』第7話

また、「何」「どこ」「どうして」「なんで」などの疑問詞を含む文は、「非難」の意味を読み取る場合がある。「何やってんのよ (ㇿ)」のように、文脈によって、完全に疑問詞疑問文としての機能がなくなるものと、疑問詞疑問文としての機能が残存しているものがある。

る<sup>22</sup>。

「これです」という疑問詞を有していない文は、上昇調の文末イントネーションをとって、「これです (↑)」と表現することで真偽疑問文として認定されうる。非上昇調の文末イントネーションを取る場合、「これです (↘)」は平叙文になる。「これですか」のように文末に「か」を伴う場合は、「これですか (↑)」と上昇調を取ると、問いかけの疑問文になり、「これですか (↘)」と非上昇調を取ると、情報を完全に受容していないことを表す文になる。

常体の場合、「これか (↘)」は情報を完全に受容していないことを表す文であるが、「これか (↑)」は中高年男性によるくだけた問い方である。常体且つ文末形式を有していない「これ (↑)」は一般的な質問文であるが、「これ (↘)」は平叙文である。

### 3.1.2 文末形式

ここで議論する文末形式は、形式上完全な疑問文の文末に用いられる終助詞「か」などというモダリティ形式を指している。不完全な疑問文は当然文末形式を有しておらず、完全な疑問文の中でも、文末形式を用いていないものもある。終助詞は、最初に山田 (1936) が提出した用語であり、橋本 (1969) では、終助詞を「きれまとまる助詞である。この助詞で終わる文節はそこで文が終止し、完結する」と定義している。

(41) 田之倉「適度に距離取っておかないと疲れるじゃないですか (↘)」

『きょうは会社休みます。』第1話

(42) 篠崎「ところで、この前、熊本のゴルフ場行ったら (↑) あのゴルフ場の名前、何だっけ (↘)」

(43) 篠崎「思い出した。国サインもらってたよな (↘)」

(44) 晴「あれ (↑) 今私のこと、晴って呼んだ (↑) ねえ、呼んだよね (↘)」

『ミス・パイロット』第5話

(45) 「どうして結婚の前にお付き合いがあるんだろうね (↘)」

『きょうは会社休みます。』第4話

(46) 泰治「何であいつの両親別れただらうなあ (↑)」

『ミス・パイロット』第6話

(41) では、「ではないか」という確認要求を表す疑問のモダリティ、(42) では、想起を表す伝達態度のモダリティ「っけ」、(43) では、確認を表す伝達態度のモダリティ「よ」と「な」<sup>23</sup>の複合形式「よな」、(44) では、確認を表す伝達態度のモダリティ「よね」、(45) では、認識モダリティの「だらう」と伝達モダリティの「ね」が複合した形式「だらうね」、

<sup>22</sup>非難を表す疑問詞疑問文についての詳細は、第7章で述べる。

<sup>23</sup>日本語記述文法研究会 (2003) によると、「な」には二つの用法がある。一つは、非対話的な「な」で、話し手が新たに認識した事態を表すものである。このような「な」は男女とも用いられる。もう一つは、(43) の「な」の用法で、聞き手に対するくだけた確認を表すものであり、対話的な性質を持ち、主に男性が用いるものである。

(46) では「だろう」と「なあ<sup>24</sup>」の複合形式が用いられる。疑問文には、文末形式が使用されていないものも数多く存在している。例えば、

(47) 河野「そのスーツって、どこで買いました (ノ)」

『地味にスゴイ 校閲ガール・河野悦子』第1話

(48) 看護師「だから、一緒に行かない (ノ)」

『アリスの棘』第4話

(49) 青石「瞳ちゃん、ちょっと聞いてもいい (ノ)」

『きょうは会社休みます』第4話

以上の3つの用例は、いずれも文末形式が使用されていないものであり、文末イントネーションが上昇調をとるものである。文末形式がない場合、上昇調の文末イントネーションがあれば、一般的に疑問文になり得ると考えられる。文末形式がある場合、文末形式の省略に関する先行研究が「か」「のか」をめぐる議論するものが多く見られる。第2章では、「か」「のか」の省略と存在に関する先行研究として野田(1995)、滝浦(2008)、森川(2009)、鄭(1997)、工藤(2006)、牧原(1995)と金水(2012a)を挙げている。

ここでは、疑問文の文末形式「か」の使用と省略が疑問文の文体に関わっていることについて、用例を挙げながら説明する。

(50) 泰治「そんなにきつかったか (ノ)」

(51) 国木田「つつか、グラタンとバーニャ、何ちゃらって日本食か (ノ)」

(52) 国木田「そんなめんどくせえことできるか (ノ)」

『ミス・パイロット』第6話

常体の疑問文(50)(51)(52)では、文末形式「か」が用いられ、上昇調の文末イントネーションが伴われる。常体の疑問文の場合、「か」が省略されるのが一般的である。「か」の付加は男性によって用いられ、発話者の社会的属性の偏りが見られる。

(53) 【乗務員の晴が乗客に対して】

晴 a. 「ご旅行ですか (ノ)」

b. 「ご旅行です (ノ)」

(54) 【乗務員の晴が乗客に対して】

晴 a. 「どこ行くんですか (ノ)」

b. 「どこ行くんです (ノ)」

『ミス・パイロット』第2話

(55) a. 駄目ですか (ノ)

<sup>24</sup> 日本語記述文法研究会(2003)では、「なあ」について、ある事態を認識したことから引き起こされる感情の高まりを詠嘆的に表す終助詞として定義している。

b.駄目です (ʌ)

「です」形の疑問文 (53) (54) では、乗務員が乗客に対しての発話であるため、「か」を用いるほうがより丁寧である。文脈の設定がない (55) では、文末形式「か」の省略に関わらず、文として適格である。

(56) 【乗務員のすずが乗客の佐藤寅雄に対して】

すず a. 「佐藤寅雄さまでいらっしゃいますか (ʌ)」

b. 「佐藤寅雄さまでいらっしゃいます (ʌ)」

(31) ' 【乗務員の晴が乗客に対して】

晴 a. 「どうされました (ʌ)」

b. 「どうされましたか (ʌ)」

『ミス・パイロット』第2話

(57) 【エレベーターの前に立っている人に対して】

a. 乗ります (ʌ)

b. 乗りますか (ʌ)

「ます」形の疑問文 (56) (31) (57) では、「か」の使用と省略が両方とも成立する。(56) (31) のようなあらたまった場面での発話では、「か」の省略によって文が不自然になるわけではないが、「か」の使用が一般的である。(57) では日常会話の場面では、話し手が自分より年上の人に対しては、bを用いるのが普通である。自分より年下あるいは同じ年の人に対しては、aの使用が許容される。

(58) 吉井「課長もご存知でした (ʌ)」

課長「ええ。」

『エイジハラスメント』第5話

「か」の省略とテンスについて、(58) のように、過去形であっても、「か」の省略が容認される。「か」を用いるほうがより丁寧であるが、(58) のように、話し手は聞き手に親しみを表したい場合、「か」を省略する。

### 3.1.3 文末イントネーション

文末イントネーション<sup>25</sup>は話し手の態度や感情を伝達するものとして重要な役割を担うものであり、同じ発話であっても、文末イントネーションの違いによって、発話が全く違う意味に取られることがある。森山 (1989) は、イントネーションを談話における情

<sup>25</sup>日本語文法学会 (2014 : 34) では、「イントネーションは、文あるいは節のレベルで、超分節的意味を付与する、ピッチの変動である。アクセントを保存した上で付加される場合もあるが、イントネーションがアクセントに関わらず音調を支配する場合もある」という。

報の伝達・処理過程の標識として位置づけ、終助詞を中心とした文末諸形式の意味の分析に相関させて考えている。日本語では、特に有意味なものとして文末のイントネーションに注目すべきであると指摘している。森山によって、一般論として、イントネーションはアクセントを保存した上で、文末に付加するといえる。イントネーションを大まかに、自然下降も含めての下降調と上昇調という2タイプに分け、下降については、自然下降の場合、と「うれしいなあ（\）」のように際立った下降が特徴的な場合の両方を含める。要するに、下降とは、特に上昇しないということである（森山1989：175）。そして、森山によると、上昇調のイントネーションの基本的な情報伝達の意味は、聞き手の反応をうかがうということである。

小山（1997）は文末イントネーションについて「降昇調（問いかけ）」「昇調（注意喚起、呼びかけ）」「降調（言い切り）」「昇降調（注意喚起、呼びかけ＋感情の露呈）」という4種類を提示している。

郡（1997）はイントネーションの意味機能について、「文法的機能」「情緒的機能」「社会的機能」の3つに大きく分けられると述べている。郡によると、そのうち、もっとも重要なのは、文法的機能であり、イントネーションの文法的機能は、①フォーカスを表す機能、②単語どうしの意味の限定関係や意味的な一体性を表示する機能、③疑問文などの文のモダリティ（ムード）を表示する機能、④大きな意味の区切りを示したり、発言がまだ終わっていないことを示す機能、の4つを有している。疑問文などの文のモダリティ（ムード）を表す機能は、文末の音調（声の上がり下がりの様子）を変えることで表されるという。

郡（2003）は、イントネーションの研究がアクセントの研究より少ない原因としては、イントネーションの聞き取りが難しく、文末に文の表現意図あるいはモダリティの一部に対応する複数の音調が現れるからと指摘している。

郡（2015）は、日本語の文の末尾の音節に、語彙レベルの現象（アクセント）ではなく、イントネーションの一つの型として現れる音の高さの動きを文末音調と呼び、音韻的に「疑問型上昇調」「強調型上昇調」「平坦調」「上昇下降調」「急下降調」「無音調」の6種類を文末音調として認定している（表10）。

表 10. 郡（2015：93）で提案する文末イントネーションの分類

| 音声的分類                   | 音韻論的整理        | 記号          | 特徴                                                             | 裸の文末での<br>典型的な用法と用例                                              |
|-------------------------|---------------|-------------|----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| 疑問型上昇調                  | 疑問型上昇調        | ↗           | 連続的上昇：上<br>昇区間内でどん<br>どん高くする                                   | 回答の要求（「タ<br>ベター [帰る]」）                                           |
| 強調型上昇調                  | 強調型上昇調        | ↑           | 段状上昇：直前<br>より一段高く平<br>らに言う                                     | 確実な認識の要求：<br>「ケ ↑キ、ワ カ<br>ッテ↑ル                                   |
| 平坦調                     | 強調型上昇調<br>の変種 | →           | ほぼ平らに言う                                                        | 商店の接客表現とし<br>てのイ「ラッシャイ<br>マ →セー                                  |
| 上昇下降調                   | 上昇下降調         | ↘           | 直前より一段高<br>くした後で下げ<br>る                                        | 反応要求をとまなう<br>認識要求：「ハ ↑ヤ<br>↘クー（強い訴えか<br>け）、「ヒ ↑ロ↘シ<br>ー（懸命の呼びかけ） |
| 急下降調<br>（旧称：顕著<br>な下降調） | 上昇下降調の<br>変種  | ↓           | 文末が平板型ま<br>たは尾高型アク<br>セントのために<br>末尾モーラが高<br>い場合に、そこ<br>から下降させる | 新事態の認識表明：<br>ナ「ル ↑ホド↓ー                                           |
| 無音調<br>（旧称：平調）          | 無音調           | 無記号<br>またはφ | 独自の高さの動<br>きなし                                                 | 独自の機能なし                                                          |

細かい分類をしている小山（1997）と郡（2015）に対して、文末表現の意味機能を考察する際に、文末イントネーションを大まかに「上昇調」「非上昇調」あるいは「上昇調」「下降調」に二分する研究も多く見られる。本研究は、疑問文の文末イントネーションに関わる研究であるが、音声論的研究ではないため、細かい分類をしないことにする。疑問文の文末イントネーションの分類については、森山（1989）に従い、大まかに「上昇調（↗）」と「非上昇調（↘）」という2種類に分ける。

（59）【男に興味がないと語る友人の女性に対して】

でも？<sup>26</sup>、超かわいい浴衣？、とか着て？、彼氏と？、こうやって？、手なんかつないじゃったりして？、墨田川？、の花火大会とか？、見てみたくない？

石黒（2013:234）

<sup>26</sup>石黒（2013）では、語尾上げで発音される可能性のある箇所を「？」で表示し、息継ぎの箇所を「、」で表示している。

(59) では、「見てみたくない」というのは疑問文であるが、それ以外は、語尾上げあるいは半疑問と呼ばれるものである。それについて、石黒（2013）は、疑問文ではないのに、文末のイントネーションを上げるもの、あるいは文の途中で語の終わりを上げて話されるものと指摘している。石黒（2013）では、こういう語尾上げは、疑問文として働いているのではなく、機能的には、「断言しないで聞き手に預けるという姿勢を表現する」「聞き手とともに会話を作り上げる」と指摘している。本研究では、このようなものを考察の対象から除外する。

本研究で取り扱う用例資料に見える各類型の用例と文末イントネーションとの共起について、表 11 のように示す。

表 11. 文末形式と上昇調と非上昇調との共起

| 上昇調            | 用例                                                   |
|----------------|------------------------------------------------------|
| 文末形式を持たない文     | レミ絵「何か思い付きました（↑）」<br>『ファースト・クラス』第 2 話                |
| 一語文            | 社員「総務の人（↑）」 『エイジハラスメント』第 1 話                         |
| 言いさし文          | 柚子「試験前ぐらいは勉強したら（↑）」<br>『-弱くても勝てます-開成高校野球部のセオリー』第 4 話 |
| 述語を持たずに助詞で終わる文 | 佐田「どこまで（↑）」<br>『99.9－刑事専門弁護士－』第 4 話                  |
| かい             | 斑目「事件に進展はあったかい（↑）」（同上）                               |
| だろうなあ          | 泰治「何であいつの両親別れただろうなあ（↑）」<br>『ミス・パイロット』第 6 話           |
| な              | 神崎「いいな（↑）映画も川原由樹に書いてもらって」<br>『ゴーストライター』第 4 話         |
| だい             | 斑目「じゃ、何のためにここに入ったんだい（↑）」<br>『99.9－刑事専門弁護士－』第 1 話     |
| 非上昇調           | 用例                                                   |
| かよ             | 国木田「…「何でもやります」とか言って、馬鹿かよ（↘）」<br>『ミス・パイロット』第 1 話      |
| だろうか           | 神崎「早速書き下ろし、一冊書いてもらえないだろうか（↘）」<br>『ゴーストライター』第 8 話     |
| でしょうか          | 佐田「さあ、どうでしょうか（↘）」<br>『99.9－刑事専門弁護士－』第 4 話            |
| 上昇調・非上昇調       | 用例                                                   |
| か              | 千奈美「あの、今からでも何かできることありませんか（↑）」<br>『ファースト・クラス』第 1 話    |
|                | 部長「オークションですか（↘）」                                     |

|            |                                                                   |
|------------|-------------------------------------------------------------------|
|            | 『ドクターX～外科医・大門未知子～』第2話                                             |
| のか類        | 白雪「じゃあ、何で34人しか来てないの(ノ)」<br>『ファースト・クラス』第1話                         |
|            | 千里「何やってんの(ノ) あんた」<br>『ミス・パイロット』第5話                                |
| かなあ        | 爽太「そうかなあ(ノ)」『失恋ショコラティエ』第1話                                        |
|            | 店長「水曜ね、できれば、3時ぐらいまでなら大丈夫かなあ(ノ)」<br>『ファースト・クラス』第5話                 |
| かな         | 大城「…8時から飲むんだけど、来てくんねえかな(ノ)」<br>『きょうは会社休みます。』第1話                   |
|            | 瞳「タクシー、つかまるかな(ノ)」(同上)                                             |
| かしら        | 美佐枝「留美のところで、ちなみちゃんお願いできないかしら(ノ)」<br>『ファースト・クラス』第1話                |
|            | 美佐枝 <sup>27</sup> 「留美のところで、ちなみちゃんお願いできないかしら(ノ)」<br>『ファースト・クラス』第1話 |
| かね         | 大城「あいつには、うってつけの人なんじゃないっすかね(ノ)」(同上)                                |
|            | 田之倉「もめる時って、こういうもんなんですかね(ノ)」(同上)                                   |
| かねえ        | 藤原「自白なんかしますかねえ(ノ)」<br>『99.9－刑事専門弁護士－』第4話                          |
|            | 深山「さてと、これまでの証言を検証しますかねえ(ノ)」<br>『99.9－刑事専門弁護士－』第1話                 |
| だろう・でしょう   | 青石「それ、お母さんが食べたいだけでしょ(ノ)」(同上)                                      |
|            | 晴「ああ、今馬鹿にしたでしょう(ノ)」<br>『ミス・パイロット』第6話                              |
| だろうね・でしょうね | 千里の母「悔しかっただろうね(ノ)」<br>『ミス・パイロット』第8話                               |
|            | 川原「本当にその価値がわかる人って、どれくらいいるんでしょうね(ノ)」<br>『ゴーストライター』第4話              |
|            | 小鳥「でもさ、どんな気持ちでそれ書いたんだろうね(ノ)」<br>『ミス・パイロット』第7話                     |
| ではないか      | 白雪「そういえば、先月やめちゃったバイトちゃんずいぶん急だったじゃない(ノ)」                           |

<sup>27</sup>本研究の用例資料では、「かしら」に上昇調のイントネーションを伴った用例が見当たらなかったが、日本語母語話者に確認したところ、「かしら」に上昇調のイントネーションを伴うこともできる。

|      |                                                                    |
|------|--------------------------------------------------------------------|
|      | 『ファースト・クラス』第2話                                                     |
|      | 鮫島「あら、やだ、いい男 <u>じゃない</u> (\\) 」                                    |
|      | 『きょうは会社休みます。』第1話<br>千奈美「変わるわけない <u>じゃない</u> ですか (\\) 」             |
|      | 『ファースト・クラス』第1話                                                     |
| よな   | 泰治「お前さ、口堅い <u>よな</u> (〃) 」                                         |
|      | 『ミス・パイロット』第6話                                                      |
| よね   | 山田「全員で一つずつ折って、一番飛ばしたやつが代表。<br>これでいい <u>よな</u> (\\) 」 『ミス・パイロット』第1話 |
|      | 青石「みんなには内緒にしてって言った <u>よね</u> (\\) 」                                |
|      | 『きょうは会社休みます。』第1話                                                   |
| だろうな | 晴「ねえ、ねえ、確か北米線のシートって、フルフラットになるから、横になれるんだ <u>よね</u> (〃) 」            |
|      | 『ミス・パイロット』第5話                                                      |
|      | 社員「三連休、この階の空調、止まんねえんだ <u>ろうな</u> (〃) 」                             |
| だ    | 『エイジハラスメント』第1話                                                     |
|      | 社長「まさか、ジャンオプティクス社に行くつもりじゃない <u>だろうな</u> (\\) 」 『99.9－刑事専門弁護士－』第4話  |
|      | 佐田「大体私の部屋を勝手に使ったのは誰 <u>だ</u> (〃) 」                                 |
| っけ   | 『99.9－刑事専門弁護士－』第1話                                                 |
|      | 河村社長「この金は何 <u>だ</u> (\\) 」                                         |
|      | 『99.9－刑事専門弁護士－』第7話                                                 |
|      | ようこ「そうだ。どこまで話した <u>っけ</u> (\\) 」                                   |
|      | 『かもしれない女優たち』                                                       |
|      | 晴「ごめん、それで何で走ってるんだ <u>っけ</u> (〃) 」                                  |
|      | 『ミス・パイロット』第5話                                                      |

### 3.1.4 まとめ

以上は、疑問形式の3つの要素を考察し、疑問詞、文末形式と文末イントネーションの共起関係を整理した。

## 3.2 形式と機能の対応関係

発話文としての疑問文は、文レベルの意味機能以外に、別の機能が派生する。疑問形式に由来する機能が抑制され、新しく派生した別の機能が優先して働いている場合もある。疑問文自体の意味機能が意味論の範疇で扱うものであり、前後の文脈要素を合わせて分析し得る意味機能は語用論の対象となる。加藤（2015a：261-262）では、意味論と語用論と

の関係について、「意味論とは、文の意味を対象とする。文は、慣習性の強いコードに従って構成されており、文の意味は文脈を考慮せずに決定される。語用論は、発話の解釈を対象とする。発話は、語用論的原理によって形成されるが慣習性は弱く、文脈を考慮して個別に解釈を決めなければならない」という。本研究の研究対象は、発話文としての疑問文であるため、発話レベルにおいて、文脈要素も分析に加え、疑問文の意味機能を検討する。

安達（1999）は、疑問文の条件を以下のように提示している。

（a）命題内容の不確定性条件：話し手には命題内容の真偽判断、あるいはその命題を構成する情報の一部が欠けている。

（b1）聞き手評価条件：話し手は応答可能な存在として聞き手を評価する。

（b2）問いかけ性条件：話し手は聞き手に問いかけることによって不確定性を解消することを意図する。

安達（1999）は、（a）が疑問文の骨組みとなる命題に課せられる条件であり、2つの条件からなる（b）はともに聞き手に関する条件であると述べている。以上の条件を満たしているのは典型的な疑問文であり、確認要求の疑問表現は（a）が欠けたものであるとしている。加藤（2015b：35）では、「本来の質問は、「①質問の発し手はその解答を構成する知識を持たない」から「②その知識を必要としている」のであり、「③その知識の提供を相手に要求する」という工程を経て産出され则认为している。それらを踏まえ、疑問文の本質とは、「①話し手には何らかの情報が欠けている」、「②聞き手に問いかけることを通してその情報を獲得しようとしている」という2つの側面から成り立っていると言えよう。この本質に基づいて、本研究では、疑問文を「疑問形式で疑問を表す疑問文」と「疑問形式で疑問を表さない疑問文」に分け、前者を「疑問文の本質の2つの側面を満たすもの、あるいはどちらかを満たすもの」、後者を「疑問文の本質の2つの側面両方とも満たさないもの」と定義する。この2種類の疑問文のそれぞれの下位分類を表12に提示する。

表 12. 疑問形式と機能の対応関係による疑問文の分類

|                 |        |
|-----------------|--------|
| 疑問形式で疑問を表す疑問文   | 疑い     |
|                 | 問いかけ   |
|                 | 問い返し   |
|                 | 命題確認要求 |
| 疑問形式で疑問を表さない疑問文 | 不完全受容  |
|                 | 知識確認要求 |
|                 | 反語     |
|                 | 共感形成要求 |
|                 | 非難     |

### 3.2.1 疑問形式で疑問を表す疑問文

疑問形式で疑問を表す疑問文には、「話し手には何らかの情報が欠けている」という疑問文の本質の側面のみを満たす疑いの疑問文、本質の2つの側面両方を満たす問いかけの疑問文、問い返しの疑問文、命題確認要求の疑問文がある。

#### 3.2.1.1 疑いの疑問文

疑いの疑問文を形成する文末形式には、「かな」、「かしら」、「だろうか」が挙げられる。話し手は疑いの疑問文を用いて、命題内容の真偽あるいは値が欠けていることを表明する。典型的な疑いの疑問文は、聞き手に対する問いかけ性を含まず、(60)のような話し手の独り言あるいは(61)のような心内発話を指している。

(60) 泰治「何であいつの両親別れただろうなあ（〃）」

『ミス・パイロット』第6話

(61) 薫子「爽太君は今大丈夫かな（\）」

『失恋ショコラティエ』第9話

しかし、話し手が聞き手に問いかける意図を持たず、独り言をしている場合、その発話を聞き取った人は話し手の発話に回答したりする。このような場合の疑問文は、結果的に話し手が欠けている情報を獲得しても、本来周りの誰かに問いかける意図を持たないため、問いかけの疑問文と区別し、典型的な疑いの疑問文と認められる。

典型的な疑いの疑問文と問いかけの疑問文は、話し手に不明なことがあるという点で共通しているが、その違いは問いかけ性の有無によって区別される。

(62) 爽太「ちょっと体調悪いから、店休んでもいいかな（\）」

オリビエ「うん」

『失恋ショコラティエ』第11話

(62)のような疑いの疑問文の文末形式が問いかけ的に用いられることは先行研究で既に指摘されている。このような疑問文は、問いかけ性を有するようになったため、典型的な疑いの疑問文と区別する必要がある。つまり、完全に問いかけの疑問文に相当していないため、典型的な問いかけの疑問文と異なっていると言えよう。

#### 3.2.1.2 問いかけの疑問文

話し手が欠けている命題内容の真偽あるいは値が聞き手にあると想定し、疑問形式を用いて聞き手に問いかけ、その情報を獲得しようとしているものは、問いかけの疑問文であ

る。問いかけの疑問文は、疑問文の本質の2つの側面を満たしている。そして、平叙文の文末に「か」と上昇調のイントネーションを加えると、問いかけの疑問文になりうるが、問いかけの疑問文の表現形式はより複雑になる。

(63) 大門「ねえ、爺さん、いくつ (↑)」

村長「80 じゃ」

『ドクターX ～外科医・大門未知子～』第2話

(64) 【西園寺部長に対して】

患者「20 年前の手術で、あなたが (↑)」

『ドクターX ～外科医・大門未知子～』第3話

(65) 清水「ねえ、これで本出したら (↑)」

『かもしれない女優たち』

(66) 【本屋のオーナーに対して】

吉高「最初にこの夕日見た時、どう思いました (↑)」

(67) 【船で出会った少年に肌が黒いことを聞いている場面】

吉高由里子「何でこんな黒いの (↑)」

少年「野球してます。」

『吉高由里子 in 瀬戸内 アート x 絶景 x 島めぐり』20160921 放送

(68) 川原「大丈夫でしたでしょうか (↘)」

『ゴーストライター』第1話

(63) のような一語文、(64) のような述語を持たずに助詞で終わる文、(65) のような「～たら」節で終わる言いさし文、(66) のような文末形式を持たない完全な文、(67) のような「の」で終わる完全な文と (68) のような文末形式「でしょうか」で終わる完全な文は、いずれも問いかけの疑問文である。不完全な文は、上昇調の文末イントネーションを持つことが共通している。完全な文の場合、文末形式を持たない疑問文は、上昇調の文末イントネーションでなければならない。文末形式を持つ疑問文は、(67) (68) のように、文末形式の違いによって、文末イントネーションも異なっている。問いかけの疑問文の表現形式はそれら以外にもあるが、形式のみで問いかけの疑問文であるかどうかを判断できない。形式上、問いかけの疑問文とほぼ同様の問い返しの疑問文がある。

### 3.2.1.3 問い返しの疑問文

(69) 部長「少々、あの、手違いがございまして」

議員「手違い (↑)」

『ドクターX ～外科医・大門未知子～』第2話

(69) では、「手違い (↑)」というような問い返しの疑問文は、話し手は欠けている情報を聞き手に問いかけて求めるという点で問いかけの疑問文に近いが、問い返しの疑問文

の場合、話し手が欠けている情報は直前の相手の発話に関わるものである。問いかけの疑問文の場合、話し手が欠けている情報は、必ずしも直前の相手の発話と関わっているわけではないため、問い返しと問いかけの疑問文を区別する必要がある。ただし、形式的には、両者がほぼ同じであるが、完全に一致しているとは言えない。例えば、南(1985)は、「(もう練習をやめて帰りたいんですけど…)もう練習をやめて帰りたいんですけど?」という完全直接問い返し文、と「(もう練習をやめて帰りたいんですけど…) 帰りたいんですけど?」という不完全直接問い返し文を挙げている。この2つの例文は、いずれも「～んですけど (〆)」という形式で終わるが、問いかけの疑問文は、この形式と共起できない。

### 3.2.1.4 命題確認要求の疑問文

確認要求の疑問文は、話し手が、疑問形式で命題内容の成立の確定性あるいは聞き手の知識状態を確かめるために聞き手に問いかけるものである。仁田(1991)は、文末が「だろう」「よね」などの文を「疑似疑問」としている。宮崎(2005)は「だろうね」を確認要求表現として捉えている。宮崎によると、同意や確認を求める対話性の強い用法の「よね」に対しては、(70)のように、文体的な有標性をもつ「よな」が存在する。「よな」は男性語的であるが、女性が用いる場合は、聞き手に同意・確認を求めるのではなく、話し手自身が実感しながら述べるという用法になる。

#### (70) 【食事後、みんなでカラオケに行くと話している場面】

大城「加々見、行くよな (ゝ)」

課長「そりゃ、今日の主役なんだから、行くっしょ (ゝ)」

加々見「カラオケ嫌いなんで、帰ります。」

『きょうは会社休みます。』第1話

本研究では、「だろう」「だろうね」「じゃないか」「な」「ね」「よね」「よな」といった形式を確認要求の表現形式として捉える。確認要求については、(71)のような命題確認要求と、(72)のような知識確認要求に分けられる。命題確認要求と知識確認要求について、三宅(1996)は、確認の対象を命題の真偽とするもので、命題が真であることの確認を要求するものを「命題確認の要求」とし、確認の対象を命題によって表される知識(情報)とするもので、当該の知識を聞き手が有していることの確認を要求するものを「知識確認の要求」と定義している。本研究は、三宅(1996)の定義に従うが、「命題確認要求の疑問文」と「知識確認要求の疑問文」という用語を使用する。

#### (71) 神崎「いいな (〆) 映画も川原由樹に書いてもらって」

遠野「しょうがないわね。」

『ゴーストライター』第4話

#### (72) 川原「私に何かできること…」

秘書「あるわけないでしょう (〆)」

命題確認要求の疑問文の場合、話し手には命題に対しての知識が足りないという点で、「話し手には何らかの情報が欠けている」という疑問文の本質の側面に近いと言えよう。そして、話し手が聞き手に問いかけることによって、命題も確かめようとしているので、「聞き手に問いかけることを通してその情報を獲得しようとしている」という側面にも近い。したがって、命題確認要求の疑問文はその2つの側面を満たすものと考えられる。

### 3.2.2 疑問形式で疑問を表さない疑問文

疑問形式で疑問を表さない疑問文は、発話文が疑問形式でありながら、話し手が情報不足から聞き手に問いかけることを通して情報を求めようとしているのではなく、聞き手に自らの知識状態の変化、気持ちの表出、情報の伝達を表しているので、「話し手には何らかの情報が欠けている」と「聞き手に問いかけることを通してその情報を獲得しようとしている」という2つの側面を満たしていない。

#### 3.2.2.1 不完全受容

「そうですか (↘)」のような文の名称は、研究者によって異なり、疑問型情報受容文（森山 1992）、新規情報受信（井上 2002）、納得（日本語記述文法研究会 2003）、自問文（森川 2009）と不完全受容（加藤 2015b）が挙げられる。井上（2002）は、日本語の「そうですか↓」（↓：非上昇）について、「そうであるとは今まで知らなかった（今はじめて知った）」という話し手の気持ち（仮に「新規情報受信」と呼ぶ）を表す表現として用いることができると指摘している。井上は、「日本語の「そうですか」が表すのは、基本的にこの場で得られた情報を仮に真であると認定するという話し手の心的態度である。未知の情報に接した話し手が、その情報を新規情報として正式に自分自身の知識に組み込む前に、仮に真であると認定し、その線で知識の調整をはかる」という。

加藤（2015b）では、「太郎は合格したのか」という文を挙げて、話し手が「太郎は合格した」という情報を真として受け取ったものの、まだ知識記憶に組み込んでおらず、その情報が談話記憶にあることを示し、不完全受容の段階にあるという。本研究では、「不完全受容」という用語を援用して、加藤（2015b）における「不完全受容」という考え方に従う。

#### (73) 【パイロット候補生が全員、千里が退職願を提出したことを聞いた場面】

山田「もう戻って来ないって意味か (↘)」

#### 『ミス・パイロット』第8話

形式上の特徴は、真偽疑問文の形式で、文末形式の「か」に非上昇の文末イントネーションが伴う。(73)は、「もう戻って来ないって意味か」という文の話し手が「千里はもう戻って来ない」ということに対する認識をまだ完全には受容していないことを表してい

る。つまり、聞き手目当ての発話ではなく、話し手は、「千里はもう戻って来ない」という新しい情報が談話記憶に入ったばかりなので、まだ完全に受容していないのである。このように、疑問形式でありながら、不完全受容の疑問文は、話し手に不明の情報がないのでもなく、聞き手に問いかけるのでもなく、疑問文の本質の2つの側面のいずれも満たしていない。

### 3.2.2.2 知識確認要求の疑問文

3.2.1.4節では、命題確認要求について考察した。ここでは、知識確認要求の疑問文の特性を述べる。

(74) 【作家の遠野が息子の大樹に対して】

遠野「どういふこと (ʌ) 願書の締め切りはもう過ぎてるのよ。」

大樹「遠野リサの名前で、何とかならない (ʌ)」

遠野「なるわけないでしょ (ʌ)」

大樹「使えねえな。」

『ゴーストライター』第4話

(74) では、「でしょ」という文末形式に非上昇調の文末イントネーションが伴っている。この場合、文自体には、非難の意味が出てくる。(74) では、話し手の遠野に命題に関する情報が欠けているのではない。そして、話し手は聞き手に回答を求める力を抑制して、聞き手の認識上の変化を要求しており、「遠野リサの名前で何とかなるわけがない」ということを聞き手に伝えて、聞き手にも同じ認識をさせようとしている。そのため、疑問文の本質の2つの側面のいずれも満たさない。

### 3.2.2.3 反語解釈可能の疑問文

森山(1989)は、統語論的反語が形式上は情報(判定)要求の疑問文と同様でありながら、実際には情報を伝達するという意味のものであり、通常は下降調のイントネーションをとることになると述べている。「ものか」「たまるか」のような文末形式が反語を表すものとして固着しているが、文脈との相互作用で「反語」として解釈しうる疑問文がある。ここでは、そのような疑問文が有している機能を「反語解釈可能」と呼ぶことにする。益岡(2007)では、「反語というのは、話し手の否定的な気持ちがより如実に現れるものである。否定の形式を取ってはいないものの、内容的には否定表現である」という。

反語の意味を表す形式として固着している「ものか」「たまるか」に関する先行研究は、第2章でまとめたが、本節では反語の解釈が文脈に依存している疑問文について検討したい。反語解釈可能の疑問文は、疑問文の形式でありながら、機能的には、命題内容の否定を伝える否定文に相当している。

(75) 幸平「耐えられるか (ノ) こんな生活」

真理亜「耐えなさいよ。夫婦でしょう (ノ)」

『僕のヤバイ妻』第3話

(75) では、話し手の幸平は、「耐えられるか (ノ)」という真偽疑問文を用いるが、「話し手の幸平は、誘拐事件が妻の真理亜の自演自作だったとわかり、今妻の後輩にも襲われた」という文脈要素を考慮した上で、「耐えられるか (ノ)」は、聞き手の真理亜に「もうこれ以上耐えられない」という否定的な意味を伝えている。しかし、上昇調の文末イントネーションによって、回答要求の機能が残っており、完全に反語のみを表す文ではない。「耐えられるか (ノ) こんな生活」のように、非上昇の文末イントネーションを伴うことによって、文が完全に反語を表す文になる。

(76) 千奈美「どこにもない。悔しい。悔しいよ。」

西原「泣いてる場合か (ノ) 最後までやれよ。頑張れよ。諦めんなよ。ここは俺片付けておくから。」

『ファースト・クラス』第2話

(76) では、「泣いてる場合か (ノ)」という文が形式的に見れば、不完全受容の疑問文と同じであるが、機能的には、不完全受容ではない。前後文脈によって、話し手は「今泣いている場合ではない」という否定の意味を伝えている。

(77) 川原「でもそれって、500万人の人を騙すってことですよ (ノ)」

神崎「その嘘で誰が傷つく (ノ)」

『ゴーストライター』第4話

(77) では、「その嘘で誰が傷つく (ノ)」という文は、文脈要素を考慮しないと、「誰」に当てはまる情報を求める疑問詞疑問文になる。しかし、作家遠野が書けなくなったため、編集長の神崎が、アシスタントの川原に遠野のゴーストライターになるように勧めている文脈要素を考慮して、発話文の意味を考えると、話し手は、「作家遠野のゴーストライターを担当することが誰も傷つけない」という否定の意味を伝達している。

(78) 【パイロット候補生の教官である国木田が寮の説明をした後に、帰ろうとしている場面】

泰治「あれ、教官、ここ泊まるんじゃないんですか (ノ)」

国木田「お前らみたいながきどもと共同生活なんかできるか (ノ)」

『ミス・パイロット』第5話

(78) では、話し手の国木田の発話文は、文末に「か」が使用され、文末イントネーションが上昇調をとる形式上の真偽疑問文である。しかし、話し手の国木田は聞き手の訓練

生たちに「共同生活できるかどうか」ということを問いかけているのではなく、実際は「お前らみたいながきどもと共同生活なんかできない」ということを聞き手に伝えている。

文脈との相互作用によって反語の意味として解釈されうる疑問文では、話し手に命題内容の情報が欠けていることもなく、聞き手に問いかけて何らかの情報を求めることもなく、逆に聞き手に命題内容に反対している情報を伝えている。以上見てきたように、反語解釈可能な疑問文は、疑問形式でありながら、疑問文の本質の2つの側面両方とも満たさないことが明らかになった。

#### 3.2.2.4 共感形成の疑問文

- (79) 課長「ほら、僕自分が、一生「アロハ」なんて言わない人間だと思ってたじゃない  
(7) だから最初信じられなくて周り見ちゃったんだよね。」

『きょうは会社休みます。』第1話

- (80) 晴「ほら、私朝早いのが苦手じゃない (7)」  
千里「それで辞めたの (7)」

『ミス・パイロット』第2話

(79) (80) では、「自分が一生「アロハ」なんて言わない人間だと思ってたこと」と、「朝早いのが苦手であること」は、いずれも話し手の個人情報である。個人情報の確定性に対して、聞き手に確認を求めるのが不適切である。上例では、個人情報を聞き手と共有することを通じて、聞き手にも同じように感じさせたいという話し手の発話意図が考えられる。

そのため、命題が真であることの確認を要求する命題確認要求と命題によって表される知識を聞き手が有していることの確認を要求する知識確認要求と区別し、本研究では、話し手は自らの個人情報を聞き手に伝達し、聞き手の共感形成を求める用法を共感形成要求と呼ぶことにする。話し手に欠けている情報がないのでもなく、聞き手に情報を求めるのでもなく、聞き手に個人情報を伝達している点だけでは、疑問文の本質の2つの側面を満たしていない。

#### 3.2.2.5 非難の疑問文

非難を表す疑問文には、(81) (82) のように、非難の意味として解釈される形式として固着しつつあるものと、(83) のように、文脈要素を加えて、非難と反語の意味に読み取れる疑問文もある。厳密に言えば、非難を表しながら、問いかけの機能も残っているものである。

- (81) 青木「何が似てるよ (7)」

『きょうは会社休みます。』第1話

- (82) 薫子「何バカなことってんの (7)」

(83) 【いつも口げんかしている編集担当の貝塚と校閲担当の河野に対して】

部長「お二人は本当に気が合いますね。」

河野・貝塚「どこがですか (ア)」

部長「はい」

『地味にスゴイ 校閲ガール・河野悦子』第2話

(84) 【「お腹がギュルギュルとものすごい音がする」という話を披露した母に対して】

長澤「何でこんな事を言うんですかね (㍷)」

上田「確かにギュルギュルと」

長澤「言います、言います。」

『おしゃれイズム』20110501 放送

(84) では、話し手は、「母は番組で自分の恥ずかしいことをみんなに披露した」ということに対して、不利益であると判断している。そこで非難の意味が出てくる。

疑問文発話における非難という意味の形成は、以下の2点に関わっている。

- ①相手（あるいは第三者）の行為が話し手の利益とは関係がない。しかし、話し手は相手（あるいは第三者）の行為を不適切だと判断している。
- ②相手（あるいは第三者）の行為が話し手によって不利益である。

非難の疑問文には、(83) のように、非難と反語の両方に解釈可能なものがある。そして、話し手に情報が欠けている場合、聞き手に情報を要求しながら、聞き手に対しての不満な気持ちを表しているものもある。ただし、非難自体は話し手の不満な気持ちを表出するものであるため、疑問文の本質の2つの側面を満たしていないのである。（詳細については、第7章での議論を参照）

### 3.2.3 まとめ

本節では、発話文としての疑問文の形式と機能の対応関係を整理した上、疑問文の本質に基づき、疑問形式が対応する機能の下位分類を行った。

## 3.3 疑問文の運用に関わる要素

話し手は疑問文を用いて発話する際に、どのような要素が疑問文の選択および使用に影響を与えるのかについて本章で検討する。本章は話し手の知識状態・発話意図、話し手による聞き手の知識状態への想定、話し手と聞き手の社会的位置関係・発話場面、および

文末形式の使用におけるジェンダー上の差異という四つの要素が疑問文の実際の運用に関わっていると考えている。

### 3.3.1 話し手の知識状態・発話意図

宮崎（2005）では、話し手の知識状態がどうであるかということが、疑問文の使用の出発点となって、何をどのように尋ねるか、確認するかといったことを規定するのであり、逆に、話し手は疑問文を用いることによって、自分の知識状態を相手に見せていることにもなると指摘されている。日本語モダリティ論研究では、文は命題とモダリティという二つの意味的側面から成り立ち、モダリティは命題に対する話し手の心的態度を表すとされている。つまり、話し手の発話意図はモダリティ形式で表され、モダリティ形式は、その文の意味に関与するということになる。例えば、話し手は、何らかの事柄に対して聞き手に確認を要求したい場合、「だろう」「じゃないか」などのモダリティ形式を文末にして発話すると考えられる。話し手は聞き手に何らかの依頼をしようとする場合、「～てもらえるか」「～てくれるか」などのような行為要求のモダリティを用いる傾向がある。そして、一般的には、値を求めようとするとき、話し手は「どこ」「何」などのような疑問詞を含める疑問詞疑問文で発話し、命題の真偽を求めようとするならば、「A は B か？」という真偽疑問文を用いて発話する。つまり、話し手がある文形式を用いて発話するときに、その文形式を決める要素は、話し手の知識状態と発話意図である。

### 3.3.2 聞き手の知識状態

話し手は疑問文を用いて自分の分からないことを聞く前に、聞きたい内容の情報の所属を考えなければならない。つまり、引き出そうとする情報が聞き手の知識領域に存在するかどうかについて判断してから、発話するべきだと言えるであろう。このように考えると、疑問文の運用は、聞き手の存在と聞き手の知識状態にも関わっている。

発話場面に話し手しかいない場合、話し手の発話はすべて独り言として捉えられる。例えば、話し手は「どうしてだろう (\\)」というように、自分自身の疑問を表明する疑いの疑問文を発したり、「あいつまだ来てないか (\\)」のように、ある新しい認識を完全には受容していないことを表したりしている。

発話場面に話し手以外の誰かがいる場合について、本研究では、話し手は発話場面に物理的に存在している人を聞き手として捉えるかどうかによって、聞き手の存在を検討する。話し手はその人を聞き手として捉える場合、聞き手の存在が認められ、話し手の発話が聞き手目当ての発話になる。もし話し手はその人を聞き手として捉えない場合、聞き手の存在が認められず、話し手の発話が独話になる。前にも触れたが、話し手が独話をしている時、周りの誰かが話し手に話しかけたり、話し手の発話に回答したりする場合がある。そのような場合は、その人が自主的に聞き手になるが、話し手の本来の発話の性質が独話のままで、変わらない。

一般的に、話し手は疑問文を用いて、知らないことに関して聞き手に回答を求める。

即ち、話し手にはない情報が聞き手のところにあるという話し手の想定が前提として存在している。このような場合、聞き手の知識状態を考えた上で、話し手は問いかけの疑問文を用いて発話するのである。それに対して、話し手にとって不明な情報はないにもかかわらず、疑問文で聞き手に問いかける場合もある。例えば、クイズの番組で出てくる疑問文や、授業で教師がテストとして提示する疑問文はいずれも話し手が回答を知っている状況で用いられるものである。このような場合、話し手は、聞き手に情報があるか否かを想定する必要がない。

### 3.3.3 社会的位置関係・発話場面

話し手が聞き手に向かって何かを表そうとする場合、あるいは何かを聞こうとする場合、聞き手との上下関係（地位、年齢）・親疎関係を考えなければならない。あまり親しくない相手に対しては、文の表現形式からいうと、語尾に「です」「ます」をつける丁寧語で表現したり、「今朝のニュースは見られましたか（ア）」のように、「動詞＋「られる」」という形式を持つ尊敬語、あるいは「この本を渡していただけますか（ア）」のような「動詞＋「いただく」」という形式を持つ謙譲語を用いたりする。疑問文の場合、文末形式の使用から話し手が聞き手との関係をどのように捉えているかが見られる。井出(2006)によって、敬語を使うことによって、相手への敬意を表現できるため、敬語使用をポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして捉える。よりフォーマルな言語形式を選択することによって、相手との距離を置くことで、敬語の使用はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能する。例えば、

- (85) これ、使ってもいいですか（ア） 【距離のある間柄】  
これ、使ってもいいか（ア） 【目上→目下/年上→年下/同世代（主に男性使用）】  
これ、使ってもいいかな（\） 【親しい間柄】

改まった場面では、疑問文の文末形式「か」の付加があり、男性も女性も「です・ます」体を使うのが一般的である。くだけた場面は、疑問文の形式の使用制限があまり厳しくないが、聞き手との上下関係・親疎関係を考える必要がある。そして、聞き手が同性か、異性かによって、話し手の発話文の文末形式が変わってくると考えられる。

友人に、「コーヒー、飲みたい（ア）」と聞いても構わない。親しい関係なので、聞き手は話し手の発話に対する容認度が高く、このような文でも不適切な発話と認められないと言えるであろう。この文を丁寧語の形式で表現すると、「コーヒー、飲みたいですか（ア）」という文になる。お客さんに対して、「コーヒー、飲みたいですか（ア）」と問うのは、語用論的に適切ではない。なぜかという、聞き手の欲求・願望・感情・感覚などは聞き手の私的領域にあるものなので、話し手が直接質問したり、自己判断を述べたりすることは、相手の私的領域に侵入することになるからである。鈴木(1989)は、聞き手の欲求・願望に関するもの、聞き手の感情・心理・感覚に関するもの・聞き手の意志決定に関するものや聞き手の能力・行為の実現可能性に関するものを聞き手の私的領域に属するものとして

いる。鈴木は「聞き手の私的領域」と日本語の丁寧さの関係について、「聞き手の私的領域に侵入する発話が丁寧さに欠ける発話となるのは、聞き手の私的領域に属する「欲求・願望・意志・感情・感覚・能力」に関して判断したり、断定したりする権利が聞き手自身に属しており、話し手には属していないからである。話し手に「判断の権利」が属していない事柄についての質問・推測・断定は、丁寧さという点からは、不適切な発話となる」と説明している。親しくない関係の場合、聞き手は話し手の発話に対する容認度が低いいため、そのような文は不適切な発話に認定されうる。もし、「コーヒー、飲みますか（㇏）」と文を変えるならば、それは「コーヒーを飲むかどうか」という意向を聞くものとして、語用論的に見て、適切な発話になる。

(86) 青石「コーヒーをお持ちしますか（㇏）」

課長「ありがとう」

『今日は会社休みます』第1話

(87) 瞳「先輩、先輩、会ったことはありません（㇏）」

青石「ごめん、ないと思うけど」

『今日は会社休みます』第1話

(86) では、話し手の青石にとって、聞き手の課長は目上の人なので、コーヒーを飲むかどうかについて聞く場合、「コーヒー、飲みますか（㇏）」の方を使わず、「コーヒーをお持ちしますか（㇏）」の方を用いている。「コーヒーをお持ちしますか（㇏）」という表現の丁寧度がより高い。そして、文末の「か」の省略が見られないのも丁寧さが表れる。それに対して、(87) の場合、文末の「か」の省略が見られるが、丁寧さを失うことになっていない。逆に、先輩と後輩という関係に相応しい親近感が伝えられる。

### 3.3.4 文末形式の使用におけるジェンダー上の差異

『国語学大辞典』（1980）には、(1)人称代名詞、(2)終助詞、(3)感動詞、(4)敬語、(5)接頭語を日本語の性差が現れる部分として挙げられている。益岡・田窪（1992）には、終助詞「か」「のか」を用いると男性的な表現になり、終助詞「の」を用いると、女性的な表現になる。常体＋「か」という形は、主に男性によって使用されている。女性は、敬体＋「か」という形を用いるのが一般的である。中島（1997）は、女性専用の疑問表現「わよね㇏」「わね㇏」や男性専用の疑問表現「だな㇏」「だよな㇏」が衰退しており、女性が主として使うとされた疑問表現「名詞＋ね㇏」「なの㇏」「のね㇏」等や男性が主として使うとされた疑問表現「かね㇏」「かな㇏」「だよね㇏」等が男女ともに使う中立的疑問表現に移行しつつあると指摘している。安田他（1999）では、日本語の男女差についての意識調査では、「男女差の言語的特徴」が9つの下位分類に分かれている。その中に、「終助詞を含む文末表現」について見ておく。女性らしさと男性らしさが現れる終助詞を含む文末表現の中に、疑問文に関わっているものを抽出して、女性らしさが現れる文末表現には、「でしょ」「の」「なの」「かしら」「かな」があり、男性らしさが現れる文末表現には、「だ

ろ」「か」「な」「だよな」「かよ」「よな」がある。水本（2005）は女性文末詞の使用を調査し、「かしら」の使用が衰退していると指摘している。米澤（2005）は、シナリオにおける会話文を調査資料とし、「話者の性差別に見た終助詞の使用数」において、「かしら」「かしらね」の男性の使用数が0と述べている。任（2005）は、文末の「かしら」と非文末の「かしら」の使用を考察し、現代日本語における性差の出現位置を検討した。任によると、文末に用いられる「かしら」は、使用者が女性であることを積極的にマークする女性性の強い性差表示であり、非文末の「かしら」は不定指示という副詞的な働きをし、性差との関連が薄く、使用者の性差指示にならない。そして、任は、「現代日本語における性差表示は、言葉の対人的機能を重視する待遇表現と同様、文末表現においても最も顕著に担われる、非文末表現は必ずしも性差表示を担わない」と主張している。

山中（2008）は東京都内の大学に通う大学生の男女を対象に、文末表現の使用状況と男性語使用についての意識をアンケートで調査した。その中から、疑問文の文末形式として使われる「かしら」「だろ」「よな」「かよ」に関する調査結果を取り上げる。「かしら」について、女子学生と男子学生ともにほとんど使用しないが、女性形式であると認識されている。テレビドラマから収集した用例では、年配の女性による用例が見られる。「だろ」「よな」「かよ」について、女子学生と男子学生は男性形式として認識している。現代日本語研究会（2011）は疑問表現<sup>28</sup>の種類と職場における出現実態を考察し、場面差・性差・世代差と相手との関係から、職場における疑問表現を中立的疑問表現、女性的疑問表現および男性的疑問表現<sup>29</sup>に分けている。そして、疑問表現の丁寧度の強弱は間接性が低いものほど丁寧度が弱く、間接性が高いものほど丁寧度が高くなるということから、間接性の度合いの高低に基づいて疑問表現を大きく直接疑問形式と間接疑問形式に分けている。中立的疑問表現の直接疑問形式としては、「名詞↑」「動詞普通体↑」「ない↑」「(ん)ですか↑」があり、間接疑問形式には「(ん)でしょう↑」「(ん)じゃない↑」が挙げられる。女性的疑問表現の直接疑問形式には、「かしら(ね)↑」「名詞+ね↑」「わね↑」「わよね↑」「のよね↑」「な(の)↑」「のね↑」「ないの↑」があり、間接疑問形式には、「(ん)じゃないの↑」がある。男性的疑問表現の直接疑問形式は「だな↑」「だよな↑」「かね↑」「かな↑」「だよね↑」であり、間接疑問形式は「だろ↑」「じゃないよな↑」である。

本研究で収集した疑問文の用例で、「敬体+かな」と「常体+かね」という形式の使用者は年配の男性であることを確認した。(88)のように、常体動詞の後に接続している「かね」は、主に中年男性、あるいは年配の男性が用いる。「敬体+かね」と「常体+かな」の使用は、使用者の性別と年齢による違いが見られない。

<sup>28</sup>現代日本語研究会（2011）は、広い範囲で疑問表現を対象としており、疑問表現を「典型的には話し手が相手に何らかの情報を求めて問いかける言語行動である」と捉えて、応答詞疑問形式および省略疑問形式も疑問表現に含むとしている。

<sup>29</sup>現代日本語研究会（2011）は、男女ともに使うとされる表現形式を中立的疑問表現と呼び、本来女性が主として使うとされる表現形式と、本来男性が主として使うとされる表現形式をそれぞれ女性的疑問表現と男性的疑問表現と呼ぶ。

(88) 常務「金沢の地酒だよ。君、飲んだことあるかね (ゝ)」

『半沢直樹』第6話

先行研究では、「かよ」が男性的表現として認識されているが、本研究の用例資料では、(89)のように、女性による使用が見られた。

(89) 【家にいた時晶叔父から四葉姉妹の話を聞いて、病院でも他の先生たちからまた四葉姉妹の話を聞いた大門が独り言している場面】

大門「何だ (ゝ) こっちでも四葉姉妹の話かよ (ゝ)」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第4話

「かしら」の使用が衰退している一方、(90)のように、年配の男性による使用が見られる。

(90) 大門「じゃあ、蛭間はクビ (ノ)」

晶叔父「それはどうかしら (ゝ)」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第5話

「だろうか」という形式は、話し言葉での使用が、使用者の社会的属性が限定されている。それは、主に男性が用いる形式である。

(91) 【元ゴーストライターの川原に対して】

神崎「早速書き下ろし、一冊書いてもらえないだろうか (ゝ)」

『ゴーストライター』第8話

「だろうか」が疑問詞疑問文に用いる場合、「か」が省略される。その場合、女性にも用いる形式である。

(92) 【一人で家でテレビを見ながら、独り言をしている真木】

真木「水川あさみか。最近よくテレビ出てるよな。確か私とそんな年変わんないんだよな。いいな。私、何やってんだろう (ゝ)」

『かもしれない女優たち』

「だろうか」の敬体「でしょうか」には、使用者の性差がない。そして、前にも述べたが、「よな」と「よね」の場合、「よね」の方は、男性・女性共に使えるが、「よな」の方は、主に男性が使っている。

(93) 大将「えっちゃんは何を食べるんだい (ノ)」

『地味にスゴイ 校閲ガール・河野悦子』第4話

(94) 社長「もういいかい (ノ)」

『99.9－刑事専門弁護士－』第4話

(93) (94) では文末形式「かい」「だい」の使用が見られる。それらは、主に男性、特に中高年の男性によって用いる。目上が目下に対して、年上が年下に対して、および子供に対しての使用が多い。「だい」は疑問詞疑問文のみに接続するが、「かい」は真偽疑問文と疑問詞疑問文両方に接続することができる。

### 3.4 本章のまとめ

本章では、まず、疑問詞、文末形式および文末イントネーションという疑問文形式上の要素を整理した。そして、「話し手には何らかの情報が欠けている」と「聞き手に問いかけることを通してその情報を獲得しようとしている」という疑問文の本質に満たすかどうかによって、疑問形式と機能の対応関係を「疑問形式で疑問を表す疑問文」と「疑問形式で疑問を表さない疑問文」に分けた。前者には、「疑い」「問いかけ」「問い返し」「命題確認要求」という4つの下位分類があり、後者には、「不完全受容」「知識確認要求」「反語」「共感形成要求」「非難」という5つの下位分類があることを提示した。最後に、疑問文の運用上の要素として、「話し手の知識状態・発話意図」「聞き手の知識状態」「社会的位置関係・発話場面」および「文末形式の使用におけるジェンダー上の差異」という4つを取り上げて議論した。

## 第4章 疑問文発話における聞き手への要求の諸相

疑問文は、一般的に話し手は分からないことについて聞き手に問いかけ、聞き手の返答を求めるものと思われる。典型的な用例を挙げると、「この近くのコンビニはどこにありますか (ク)」と聞く場合、話し手は聞き手にコンビニの場所に関する回答を求めることが容易に解釈される。実際の会話で使用されている疑問文には、回答要求以外、他の種類の要求もありうる。

(95) 【アメリカの訓練から日本に戻った晴と父が電話で話している場面】

晴の父「ちょっと顔見せに来ないか (ク)」

晴「今から (ク) 明日でもいい (ク)」

『ミス・パイロット』第8話

(95) の「ちょっと顔見せに来ないか (ク)」という疑問文では、話し手である晴の父は、聞き手である晴が来るかどうか分からないので、聞き手に問いかけ、自分の疑問を解明する言語的返答を求めている。しかし、話し手は言語的返答を求めることに止まるわけではなく、さらに「顔を見せに来る」という行為を求めていると考えられる。この用例では、発話文として用いられる疑問文には、回答要求および行為要求が同時に存在している。すべての疑問文は、聞き手に対する要求があるのか、どのように要求の種類が決められるのか、回答要求および行為要求の他にどのような要求があるのかという疑問が生じる。本章では、疑問文発話の要求性の有無を検討した上で、要求性を有している疑問文発話の特徴を考察する。そして、要求性を有している疑問文発話の下位分類を行う。最後に、要求の観点からみた疑問文の全体像を提示する。

### 4.1 記述文法における疑問文の要求性

国立国語研究所(1960)で「表現意図」という伝達論的な観点に基づいて、文類型の分類を提案している。国立国語研究所(1960)でいう表現意図とは、言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容のことである。国立国語研究所によると、表現意図は、個別的表現意図と一般的表現意図という2種類に分けられる。ここに取り上げる表現意図は、一般的表現意図、即ち、ことばの形式との対応が社会的習慣として認められるものである。2種類の表現意図は、次のように説明されている。

一般的表現意図：「学校遅れるよ。」「残念でした。」という「文の意義」の全体を、事実についての判断叙述という意味で、「判叙表現」と呼ぶとすれば、この文の意義と形式との対応は共に社会習慣に反するところがない。

個別的表現意図：「学校遅れるよ。」の文が、「早く起きなさい」を表し、「残念でした。」の文が、「もう帰ってください。」を表すことがあり、それは個別的な場面で成立する意味の伝達なので、個別者としての発話者と、個別者としての受話者との間で成立した一回的表現と理解に止まっている。社会的一般性を持たないものである。

国立国語研究所（1960）でいう個別的表現意図は、語用論的に見れば、グライスの特殊化会話推意（PCI）に当てはまる。しかし、国立国語研究所（1960）では、語用論的要因を考慮することがなく、一般的表現意図によって、文表現の分類を行った。国立国語研究所（1960）での一般的表現意図からみた相手に対して求めるところのある表現意図の下位分類を以下のようにまとめられる。

表 13. 表現意図からみた相手に対して求めるところのある表現意図の下位分類

|      |       |            |         |
|------|-------|------------|---------|
| 要求表現 | 質問的表現 | 肯否要求       | 確認要求の表現 |
|      |       |            | 判定要求の表現 |
|      |       | 選述要求       | 選択要求の表現 |
|      |       |            | 説明要求の表現 |
|      | 命令的表現 | 消極的行為要求の表現 |         |
|      |       | 積極的行為要求の表現 |         |

仁田（1991）は、疑問表現を＜疑い＞＜問いかけ＞を有している本来の疑問表現と、話し手が聞き手に自らの要求の実現を働きかけ・訴える、といった＜働きかけ＞に移行・派生した疑問表現とに分けている。

(96) 「所長、行きませんか。」

(97) 「降りてきてくれますか。」

仁田(1991 : 159)

(98) 「静かにしないか。」

仁田(1991 : 160)

仁田によると、＜働きかけ＞に移行・派生した疑問表現は答えを得ることを目的とした問いかけの機能を果たしているのではなく、誘いかけ（96）や依頼（97）や命令（98）な

どの働きかけの機能を果たしている。しかし、本研究は、それらは聞き手に対していずれも行動要求になるが、語用論的に見れば、会話のやりとりを行う場合、一般的に言葉による回答要求が最初に出てくると考えている。その後、話し手は聞き手に対して自分と同様の行動、あるいは自分の希望している行動を取るような要求が出てくる。疑問文における回答を求める機能が残存しており、行為要求という機能と共存している。

(75) '幸平「耐えられるか (ノ) こんな生活」

真理亜「耐えなさいよ。夫婦でしょう (ノ)」

『僕のヤバイ妻』第3話

(75) では「耐えられるか (ノ)」という文が反語として解釈されうるが、その解釈を聞き手に委ねるのである。加藤 (2015b) では、聞き手に対してのこのような要求を「反語解釈要求」としている。従来の先行研究では、反語を表す疑問文は、疑問文の形式でありながら、否定的意味を伝達することについて指摘されているが、反語の疑問文は、聞き手に対してどのような要求になるかについて加藤 (2015b) 以外の議論が見られない。そして、「耐えられない」という意味を表す「耐えられるか (ノ)」は国立国語研究所 (1960) でいわゆる個別的表現意図による発話である。会話に用いられる疑問文発話は、実際にどのような種類の要求を持つのかを明らかにするために、文脈要素を考慮しての語用論的分析が欠かせない。

## 4.2 語用論的に見る疑問文の発話的要求

加藤 (2015b) は疑問形式に直接由来する回答要求（応答することを求める力）のみを発話的なもの（言語的な要求）とし、それ以外は、発話内的な要求（非言語的な要求）として、要求の種別を分類している。本研究は加藤 (2015b) を踏まえ、話し手が疑問文で発話することを通して、聞き手にどのような要求を達成したいかという発話意図を基に、要求性の有無と種類を考察する。

### 4.2.1 要求の定義と有無の判断

話し手が疑問文発話を通して聞き手に求めることがあるという性質を疑問文の要求性として捉える。益岡 (2007) は特定の聞き手に対して発話された文を「対話文」、そうでない独話や語りの文を「非対話文」と名付けている。しかし、特定の聞き手に対しての発話であるかどうかという基準で発話文を二種類に分けることは不十分であると考えている。なぜかという、聞き手が特定できない、もしくは話し手が聞き手を特定しない場合があるからである。

したがって、すべての疑問文には要求性があるとは限らない。要求性が無化されるものとして、以下のようなものが挙げられる。

一つ目、話し手一人しかいない場面での発話を単なる話し手の疑問を表す独り言として

捉える。その場合、話し手の発話における要求性が叶えられず、無化されている。

二つ目、発話場面に、話し手以外に誰かがいる場合、その人を聞き手として捉えるかどうか、話し手はその人に向かっていうという意図を持つかどうかによって、聞き手目当ての発話なのか、そうでない発話なのかを判断できる。その場面で話し手の発話を聞き取れる人の存在が認められるが、話し手はその人を聞き手として捉え、その人に向けて発話するのではない場合がある。

(46) '泰治「何であいつの両親別れたんだろうな (〸) 」

(73) '【パイロット候補生皆が千里が退職願を提出したことを聞いた場面】

山田「もう戻って来ないって意味か (〸) 」

フジテレビ『ミス・パイロット』第8話

(46) は、話し手は、「あいつの両親はなぜ別れたか」という自分の疑念を表したり、別れた理由について自分は想像できないという感情を詠嘆的に表したりしていると考えられる。周りに他の人が存在しているが、聞き手目当ての発話ではないため、聞き手に対する要求性がないと考えられる。(73) では、「もう戻って来ないって意味か」という文の文末イントネーションが非上昇調であるため、問いかけを表すのではなく、話し手にとって、「千里はもう戻って来ない」というのは新しい情報であり、談話記憶に入ったばかりなので、不完全受容を表している。そのため、発話文自体の要求性は抑制され、無化になる。だが、話し手は誰かに向かって発話する意図を持たなくても、その発話を聞いた人には何らかの反応が起こる可能性が考えられる。この場合、話し手からその人を聞き手として捉えてないが、その人が自主的に聞き手になる。

三つ目は、聞き手 A に対して、話し手 B は確実な情報を持たないため、断定的に答えられなく、「太郎は今日来るかどうか」について自分も疑問に思っていることを聞き手に伝えているもの (99) と、聞き手のフェイスを考慮するため、聞き手の意見などを否定しにくい、あるいは同意しにくい場合、ボライトネスのストラテジーとして用いられる (100) である。

(99) A「太郎は今日来るのかな (〸) 」

B「うーん、どうかな/来ないかな (〸) 」

(100) 紗絵子「じゃあ、こういうの着てったら、どうです (〸) 大人の色気が漂う感じで、ねえ、ほら、見て見て、似合う。」

薫子「そうかな (〸) 」

『失恋ショコラティエ』第11話

(99) (100) は、応答としての疑問文であり、話し手は聞き手に何らかの情報を伝えている。その場合、疑問形式による要求性が極めて弱いと言える。

## 4.2.2 要求の種類

(99) 'A「太郎は今日来るのかな (\\)」

B「うーん、どうかな/来ないかな (\\)」

(99) の A は、B も太郎に関する情報を持たないことを知っている場合、A は「太郎は今日来るのかな (\\)」という発話文で、自分に欠けている情報を求めるのではなく、B の何らかの反応を期待していると考えられる。その場合、A の発話には、反応要求が出てくる。反応要求と回答要求の区別は、話し手が聞き手の知識状態に対する想定に関わっている。反応要求の場合、話し手は聞き手も情報を持たないことを知っているが、聞き手に何らかの反応を期待している。回答要求の場合、話し手には自分が求めている情報が聞き手側に属しているという想定がある。

本研究では、要求性を有している疑問文発話を下位分類し、話し手が疑問文を通して、聞き手に何を求めるのかという、大まかに言語的要求と非言語的要求に分けた。言語的要求は、要求の内実によって、言葉での反応か、話し手の疑問を解消できる回答要求かに分けられる。言語的要求にはもう一つの種類、即ち話者交替によって発話権取得の要求がある。本研究では、疑問文発話における要求の類型を以下の表 14 のように分類する。

表 14. 疑問文発話における要求の類型

| 言語的要求     |    |      |          | 非言語的要求 |      |      |                |
|-----------|----|------|----------|--------|------|------|----------------|
| 要求の内実によって |    |      | 話者交替によって | 行為     | 共感形成 | 知識確認 | 解釈<br>処理<br>30 |
| 反応        | 回答 | 命題確認 | 発話権取得    |        |      |      |                |

第三章でも触れたが、ここでは、各種類の要求を以下のように定義する。

- ①反応要求：情報の質と量を重要視しておらず、とにかく言葉による発話行為を求める。「そうか」「そうですね」など情報量の少ない回答を指す。
- ②回答要求：命題の真理値あるいは値を求める。聞き手にとって、回答の義務がある。
- ③命題確認要求：聞き手に命題内容の確定性の確認を求める。
- ④発話権取得の要求：談話レベルで、話し手は聞き手に発話権を委譲し、聞き手が発話権を取得することを求める。
- ⑤行為要求：話し手と同様な行動、あるいは話し手の希望している行動を行うことを求める。
- ⑥共感形成要求：話し手は、何らかの事に対する疑問、考えあるいは情報を聞き手に共有させることを通して、話し手と聞き手が共通基盤を持つことを求める。
- ⑦知識確認要求：聞き手の知識状態を確かめることによって、聞き手の知識上の変化を求める。

<sup>30</sup>加藤（2015b）の用語を援用する。

⑧解釈処理要求:聞き手に文脈との相互作用で生じる発話の意味を解釈することを求める。

### 4.2.3 要求の特徴

要求性のある疑問文には、以下の二つの特徴がある。まず、形式上明示的な要求と、文脈から推意によって得られる潜在的な要求に分けられる。1つの発話文には、要求の種類が一種類しかないものと、二つあるいは二つ以上を有するものに分けられる。前者を要求の単一性として捉え、後者を要求の多重性として捉える。

(101) 【パイロットの訓練生採用について話している場面】

国木田「去年まではどんな基準で採用を決めてたんすか (ノ)」

篠崎「勘」

『ミス・パイロット』第1話

(95) ' 【アメリカの訓練から日本に戻った晴と父が電話で話している場面】

晴の父「ちょっと顔見せに来ないか (ノ)」

晴「今から (ノ) 明日でもいい (ノ)」

『ミス・パイロット』第8話

(101) は命題の値のみを求める発話文である。(95) は最初求めるのは言語的返答であり、次の段階で求めるのは、「顔を見せに来てください」という行為である。要求の内実からみれば、(101) は一見、一種類の要求しかないように見えるが、言語的要求からみれば、話者交替による発話権取得の要求も表れるので、複数の要求の種類を有していると言える。(95) は、回答要求、行為要求および話者交替によって発話権取得の要求という 3つを有している。このように、一つの発話文には、異なるレベルの要求が共存しており、同一レベルで複数の要求も共存している。

一般的には、話者交替によって発話権取得の要求がほかのタイプと同時に出てくるが、例外的な場合もある。第5章では、発話権取得の要求が成立する条件として、「疑問文による実質的な発話である」「ターンを終了する際に用いられる」および「話し手は聞き手が発話権を取得することを求める」という3つを提案する(詳細を第5章で述べる)。

(102) 【川原が作家遠野の助手である。】

小田「遠野先生の手稿の様子、どうですかね (ノ) あ、川原さんに聞くのもあれなんですけど…」

川原「私は分かりません。」

小田「そうですね。」

『ゴーストライター』第2話

(103) 小泉議員「どうだろう。私に譲ってもらえないかね (ノ) 金なら、いくらでも出す。」

女将「お気に召していただいて、うれしゅうございます。でも、これはある方からのお預からものでございまして、お売りすることができないいのでございますよ。」

(102) (103) では、「どうですかね (ㄨ)」「私に譲ってもらえないかね (ㄨ)」という疑問文発話が「ターンを終了する際に用いられる」という条件に満たしていないため、話者交替の要求が抑制されている。それらの発話では、話者交替の要求が疑問文発話によって発動しているのではなく、(102) の「川原さんに聞くのもあれなんですけど」という言いさし文、(103) の「金なら、いくらでも出す」という平叙文の発話がターンを終了させたので、話者交替の要求が言いさし文と平叙文によって形成される。しかし、疑問文の回答要求は相変わらず発動している。

#### 4.2.4 行為要求

疑問文発話の8種類の要求の中で、行為要求についてはさらに下位分類できる。行為は、物理的にある動作・行動を行うことを指している。宮崎・安達・野田・高梨 (2002) は、「行為要求の機能をもつ文」を次のように述べている。

- ①本来的に行為要求の機能をもっているもの
- ②本来は別の機能をもっていたが、行為要求の機能に移行し、その機能が定着したと考えられるもの
- ③状況に依存して行為要求の含意を派生するもの

宮崎ほか (2002 : 44)

以上の①と②は行為要求の形式として固定化しているものがあり、疑問形式としては、(～うか、～ないか、～たら、～たらどう、～てくれないか、～てもらえないか) が挙げられている。そして、叙述文の形式「～でもいい」が「～でもいいか」という疑問形式になれる。

- (62) '爽太「ちょっと体調悪いから、店休んでもいいかな (ㄨ)」  
オリビエ「うん」

『失恋ショコラティエ』第11話

- (104) 晴「さっきの飛行機、どう折るの (ノ) 折り方、教えてくれない (ノ)」

『ミス・パイロット』第1話

- (105) 小鳥「じゃあ、寮で一緒に食べませんか (ノ) 今日は晴が「ロイと一緒に太巻き作るって言ってたし」

『ミス・パイロット』第6話

行為要求の疑問文には、(62) のように、相手に許可を求めるもの、(104) のように、相手に依頼を表すもの、(105) のように、誘いを表すものがある。依頼と誘いなどの場合、否定疑問文がよく使われる。一般的に、典型的で直接的な疑問文形式よりも、間接的

な発話形式を用いる方が丁寧さの度合いが高くなる。つまり、聞き手はその質問に回答するか否かについて自身の選択の幅が広がり、また発話の力を曖昧にしておくことによって、聞き手の負担も軽減されるからである。否定疑問形式によって、聞き手に不同意的な応答をする余地を残すことで、聞き手への負担が少なくなり、聞き手からの同意的な態度をより容易に引き出すことができる。

また、「食べません」「くれない」では、動詞の否定形式「食べません」「くれない」の本来の意味が弱くなり、逆に、「食べましょう」「ください」の意味に変わる。この場合の「動詞+ないか」は否定疑問の形式を取っているが、否定疑問の意味を表さないのである。依頼と誘いなどの場合ではこのような言い方が慣習的に固着化していると言えるであろう。命令文は行為要求という機能を有しているが、相手との言語上のコミュニケーションは疑問文と比較すると、活発ではない。それは、命令文は言語上のやり取りを求めているからである。

#### 4.3 本章のまとめ

話し手が疑問文で発話することを通して、聞き手にどのような要求を達成したいかという発話意図を基に、疑問文発話における要求性の有無と要求の種類を考察した。要求性が無化されるものとして、話し手一人しかいない場面での独り言、発話場面に話し手以外に誰かがいるにもかかわらず、話し手がその人を聞き手として捉えていない場合の発話と聞き手に何らかの情報を伝えるための応答という3つを挙げた。要求性を有している疑問文発話を言語的要求と非言語的要求に大分して、さらに下位分類を行った。言語的要求には、「回答要求」「反応要求」「命題確認要求」と「発話権取得の要求」を挙げ、非言語的要求には、「行為要求」「共感形成要求」「知識確認要求」と「解釈処理要求」を挙げた。

## 第5章 疑問文発話による話者交替の要求

日常会話では、われわれは疑問文を用いて、聞き手に自分の知らない情報を求めたり、何らかの依頼を表したりしている。情報要求は疑問文発話によって生じる言語的要求で、依頼などによって生じる行動要求は非言語的要求である。そして、情報と依頼は、いずれも疑問文による発話の内容を指している。発話内容とは違うレベルから考えてみると、話し手が疑問文を用いて発話することは、一種の言語行動である。その言語行動自体によって生じる聞き手への言語的要求は、話者交替の要求である。話し手が疑問文を用いて聞き手に回答を求めるという言語行動は、従来の談話分析では発話権の委譲として捉えられ、聞き手が話し手から委譲される発話権を受けとることになる場合、話者交替が起こる。しかし、従来の先行研究では、発話文の形式を話者交替の形成に関連づけて詳細に論じるものがほとんど見当たらない。そこで、本研究は、話者交替の形成に関わる理論知識と先行研究を踏まえながら、話者交替における聞き手の捉え方を提示する。そして、本研究の考察対象を限定し、話者交替の要求を有している疑問文発話の言語形式の分析を通じて、それらにおける話者交替の要求性の強弱を考察する<sup>31</sup>。

### 5.1 話者交替の形成

これまでの話者交替に関する研究では、主に話者交替のタイミング、話者交替の際のあいづちの使用、および聞き手はどのように発話の終了を予測し、TRP (transition-relevance place) を認識して発話を開始するかについて議論されてきた (畠 (1982)、メイナード (1993)、ポリー・ザトラウスキー (1993)、榎本 (2007))。話者交替が起こる場合の発話文の言語形式、あるいは疑問文を話者交替と関連づけて論じるものはあまり見当たらない。そこで、本研究はTurnに「ターン<sup>32</sup>」、Turn-takingに「話者交替」<sup>33</sup> という訳語を使い、話し手が疑問文発話でターンを終了した際に起こった話者交替の要求について考察する。疑問文発話による話者交替を分析する前に、一般的に、どのような場合で話者交替が起こるかについて確認しておく。本節では、先行研究を踏まえながら、発話の種類と話者交替の関係を整理する。

#### 5.1.1 発話の種類とターンの形成

話者交替とは、ターンの移り変わりである。そこで、ターンとは何かについて、発話の種類から説明しなければならない。杉戸 (1987) は発話の種類を内容的側面から、「あい

<sup>31</sup>本章は馬 (2016) の内容を少し修正したものである。

<sup>32</sup> Turn の訳語としては、「会話の順番」(山崎・好井 (1984))、「ターン」(木暮 (2001)、中井 (2003))、「発話順番」(メイナード (1993)、李 (1995)) などが挙げられる。

<sup>33</sup> Turn-taking は、「会話の順番取り」(山崎・好井 (1984))、「話者交替」(メイナード (1993)) などが挙げられる。

づち的な発話」と「実質的な発話」に分けている。「あいづち的な発話」を「実質的な内容を積極的に表現する言語形式（たんなるくり返し以外の、名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的なはたらきかけもしないような発話」と定義し、応答詞を中心にする発話、先行する発話をそのままくりかえす、オーム返しや単純な聞きかえしの発話と感動詞だけの発話が挙げられている。それに対して、「実質的な発話」を「なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断・説明・質問・回答・要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話」と定義している。

ターンは実質的な発話からなるものであり、より厳密なターンの定義と構成について、中井（2003）を挙げられる。中井（2003）は、ターンを「会話の中で、一人の参加者が話を開始してから終了するまでの連続した単位であり、文・節・句・語彙等の統語的単位、イントネーション等の韻律的単位、非言語行動の単位で構成されているものである」と定義し、「ターンは本筋の話に関係する実質的な発話から構成されており、あいづち的な発話やうなずきはターンに含めない。したがって、一人の参加者のターンの間に、別の参加者のあいづち的な発話が数回打たれても、そのターンは終了したことになる」と指摘している。また、小室（1995）、木暮（2002a）でも、あいづち的な発話をターンとして捉えていない。以上から、「あいづち的な発話」はターンを形成することができず、話者交替を生起させることもできないということが分かった。そのため、「そうですか。」という文が疑問形式であっても、あいづち的な発話であるため、ターンにはならない。本研究はこのような疑問形式で表されるあいづち的な発話を考察対象から除外する。そして、本研究でいわゆるターンは、中井（2003）の定義に従う。

### 5.1.2 ターンの終了と発話権の委譲

話し手が実質的な発話で形成されるターンを終了する際に、話者交替が起こる可能性がある。Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）は話者を交替することが可能で適切な場所を「TRP」（transition-relevance place）と名付け、TRPの間の空白と重複を避けるために、参加者は自分のターンの開始と終了を示さなければならないと述べている。本研究は、話し手が疑問文発話でターンを終える際に起こる話者交替を主たる考察対象にするため、ターンの終了のみに注目する。

話し手がどのような場合にターンを終了するかについて、李（1999：225）では、「話し続けることをやめる」ということとして、（1）「話す機会を他の会話参加者に譲るため、話し続けることをやめる（他の会話参加者に情報や同調を求めること）」、（2）「話がもう終わったので、話し続けることをやめる（情報提供行動を終えること）」、（3）「話がまだ終わっていない時、他の会話参加者の発話による遮りで、話し続けることをやむを得ずやめる」という三種類の状況が挙げられている。中井（2003：29）は、「ターンが終了するのは、ターン保有者が自らの意志で話すのをやめてターンを終了させたり、他の参加者にターンを譲ったりする場合と、他の参加者の実質的発話の開始や、外的事情（例：突然の来客、地震など）でターンを遮られたりした場合である。」と指摘している。中井の指摘のうち、本研究では、話し手が発話権を聞き手に移譲するために、疑問文で自

らターンを終了して話者交替を要求する場合のみに限定する。そして、話者交替の要求を話し手は発話権を移譲し、聞き手にその発話権の取得を求めることと定義する。

現在の話し手は次の話者を選び、選ばれた参加者に発話権を委譲しようとし、選ばれた次の話者が続いて話すことによって、ターンは移行し、話者交替が起こる。発話権の委譲の表示に関しては、李（1995）は、「ねえ」「でしょう（↑）<sup>34</sup>」で発話順番を他の会話参加者に譲ることを表すとし、中井（2003）は、情報要求、同意要求などで次のターン保有者を選択してターンを譲ることを示すために用いる表示であると指摘している。以上の先行研究では、発話権の委譲が情報要求と確認要求などで表されることに言及している。情報要求と確認要求の場合、よく使われる言語形式の1つとしては、疑問文が挙げられる。このように、疑問文は発話権の委譲および話者交替と関わっている。

## 5.2 話者交替における聞き手の捉え方

現在の話し手が発話権を委譲する場合、次の話者として選択された聞き手をどのように特定するかは、聞き手の捉え方の問題である。本研究で議論している話者交替の要求の有無は聞き手の捉え方に関わっているため、以下では先行研究を踏まえた上で、本研究での聞き手の捉え方を規定する。

### 5.2.1 先行研究における聞き手の捉え方

われわれは、独り言以外の場合に発話する時、殆ど誰かに向って発話する。その誰かというのは、1人の聞き手か複数の聞き手のことを指している。1人の聞き手ならば、話し手と聞き手は相互に発話して会話のやり取りを続けていくと考えられる。聞き手が複数いる場合、話し手は自らの発話を終えて発話権を複数の聞き手全員かその中の1人に譲る可能性があり、あるいは、話し手は自らの発話を終える時点に、発話権の移譲を行わず、発話権の受け取りを複数の聞き手全員に任せる可能性もある。

社会言語学では、聞き手のあり方に関して、オーディエンス・デザイン(Audience Design)という考え方が提案されている。Bell（1984）は、「persons and roles in the speech situation」という概念を提案して、話し手(speaker)を1人称(first person)、話しかける相手(addressee)を2人称(second person)、それ以外を3人称(third person)に対応させている。

そして、Bell（1984）は、聞き手として認められる話し手の判断要素を①Known（その人は話し手に知られているかどうか<sup>35</sup>）、②Ratified（その人は聞き手として認められているかどうか）、③Addressed（その人は話し手に話しかけられているかどうか）という3つの条件を提示し、それによって、聞き手をAddressee（直接に対話をしている人）、Auditor（傍聴している人）、Overhearer（偶然に聞いている人）、およびEavesdropper（意図的に盗み聞きをしている人）という4種類に区分している。

<sup>34</sup> 李（1995）では、（↑）で文末の上昇調を表示しているが、本研究では、（↑）という記号で文末イントネーションが上昇であることを示す。

<sup>35</sup> カッコ内は筆者による翻訳である。

加藤（2011）はBell（1984）の話し手が1人称、話しかける相手が2人称、それ以外は3人称というような人称を単純に対応させることを問題点として挙げ、話者の視点から聞き手の想定の有無によって、聞き手の捉え方を議論している。加藤によると、聞き手の想定があり、且つ複数の場合、階層の分化が生じうる。話し手から直接発話に向けられた相手は「特定される聞き手」であり、また発話が直接向けられていないが、発話内容を知ることが認められた聞き手は二次的聞き手である。そして、発話内容を聞くことが強く求められていない発話場面にいる人は、三次的聞き手と定義される。また、加藤（2011）は、「聞き手に求める注意度は離散的なものではなく、連続的な尺度で考えるべきであり、注意度の要求が弱い聞き手は、多くの場合、話者交替の権限も認められないか、非常に小さい範囲でしか認めない」と指摘している。

呉（2012）は、Bell（1984）などによる聞き手の分類を参考に、場面形成上の聞き手待遇における「聞き手」の捉え方を検討した。呉（2012）は、「話者交替することが許されているかどうか」を基準として、聞き手を顕在的聞き手と潜在的聞き手に分けている。

「Ratifiedの判断基準に適合しているかどうか」によって、潜在的聞き手をさらに発話を受けとることが求められる人と、発話を受けとることが求められない人に分けられる。そのうち、「発話を受けとることが求められない人」は「話し手の発話を聞くことに意図・目的があるかどうか」によって、「偶然聞く人」と「盗み聞く人」に分けられる。呉（2012:215）は、「話しかけられている」ということは、先にも述べたように、話者交替（Turn-Taking）によって話し手になれる存在であることを意味する」と述べている。しかし、「話しかける」というのは、言語的手段であり、日常会話では、多人数の中の1人は話し手に話しかけられていないが、話し手の視線、あるいは、指差しによって、次の話者になれることがあり、話者交替が起こる可能性もある。

話し手が次の話者を選択する際に使用する手段について、高梨（2002）が挙げられる。高梨（2002）は、受け手を選択する際の言語的手段として、呼びかけなどの明示的手段や、人称代名詞、丁寧体、非丁寧体、受け手選択を含意できる語句を用いる非明示的手段、非言語手段としては、視線、身体姿勢、指差しなどを挙げている。

### 5.2.2 本研究での聞き手の捉え方

本研究は、発話場面における話し手の言語的手段や非言語的手段を、話し手が次の話者を選択する際に欠かせない要素として捉える。特に、話し手は話者交替を行うために、複数の聞き手から1人を次の話者として選択する際に、何らかの手段によって次の話者を決める。具体的にいうと、聞き手が複数存在する場合では、話者交替を行う際に、複数の聞き手の中には次の話者になるべき聞き手とそうでない聞き手がいる。例えば、先生が20人の学生を対象に授業を行っている場面を設定してみよう。授業中、先生は「山下君、今回の件に関しては、どう思いますか（？）」と言う場合、話し手の先生は、「山下君」という呼びかけ表現を用いて山下を次の話者として特定している。このように、呼びかけ表現という言語的手段の使用によって、複数の聞き手から次の話者が決められる。通常、そ

の場合、山下は次の話者になるべき聞き手であるが、山下君に呼びかけているのに、他の学生が発言する場合もあり得る。つまり、新話者は前話者が発話権の委譲を想定している人物とは限らない。

非言語的手段と言えば、複数の聞き手がいる中で、話し手に見られた人が次の話者として特定される場合を挙げる。例えば、授業中、先生は「皆さんは今回の件について、どう思いますか (7)」と言って、学生たちが返事していないうちに、一番前に座っている学生に視線を向ける。それは、「君、答えてください」という要求をその学生に伝えていることが推論できる。このように、先生は視線の向け先という非言語的手段によって、次の話者を決めている。話し手の視線の向け先が次の話者になるかについて議論している榎本・伝(2011)がある。榎本・伝(2011)は、日本語多人数会話における視線行動を分析し、視線と話者交替の関係を明らかにし、「視線を向けられていた聞き手が、次発話を回避したり、期待された反応や連鎖上適切な発話を行わなかった場合、話題に関する知識や同意／不同意といったスタンスの共有の点から話し手と同じカテゴリーに属している場合、視線の向け先以外の聞き手が次話者になるが、話し手に視線を向けられていた聞き手が次話者として自己選択しやすいという一般的傾向がある」と指摘している。

しかし、聞き手が複数存在している場合、次の話者が特定されるが、次の話者が発話を始める前に、ほかの聞き手が先に発話権を受け取って発話する場合が見られる。

(106) 【交流キャンプはクラスメートとの交流を深めることが目的なので、生徒たちの携帯電話を集める必要があることに対して、生徒たちが話している場面】

→ <sup>36</sup>1桜「五日間もケータイなしかな (5) 耐えられるかな (5)」

2晴「無理、無理。半日が限界。」

3今野「だよねえ」

『リミット』第1話

(106) では、話し手の桜は自分の席の後に座っている今野に向いて、「五日間もケータイなしかな。耐えられるかな (5)」と発話している。榎本・伝(2011)で述べられているように、話し手の視線に向けられることで、今野は話し手の桜に特定される次の話者になる。しかし、今野の隣に座っている晴は、今野より先に発話権を受け取り、「無理、無理。半日が限界。」と発話している。(106)の発話場面から見れば、発話権を先に取得した晴はBell(1984)でいわゆるAuditor(傍聴している人)、加藤(2011)でいわゆる二次的聞き手(直接発話に向けられていないが、発話内容を知覚することは可能で、許可された聞き手)に相当すると認められる。話し手の視線の向け先以外の聞き手である晴は、次の話者として選ばれる今野より先に発話権を受け取って発話するような場合は、榎本・伝(2011)では論じていなかった。

それに対して、聞き手複数存在の場合、且つ特定される聞き手もない場合、話し手は自らの発話を終えて発話権を移譲しているが、次の話者は特定されていないため、話者交

<sup>36</sup> 本研究では、分析において注目する行は左端に矢印「→」をつけて表示する。

替の要求自体は分散している。つまり、その発話場面にいる誰でも発話権を取るか、誰も発話権を取らない可能性があるので、話者交替の要求が弱くなる。

(107) 【飲み会で彼女がいるかどうかを聞かれた田之倉が、彼女がいると答えたことに対して】

1瞳「ねえ、ねえ、ねえ、田之倉は今彼女いるの（↑）」

2田之倉「はい、いますよ。」

3大城「はい瞳ちゃん、残念」

4瞳「別に狙ってて聞いたわけじゃないですから」

5大城「嘘だ。田之倉が入ってきた時、「かっこういい」って騒いでたじゃん（↓）」

6課長「田之倉君はモテるでしょう（↓）」

7田之倉「いや、そんなことはないですよ。」

→8青石「あれ（↑）田之倉君別れたって言ってなかった（↑）」

9瞳「先輩何ですって（↑）」

10青石「電話で彼女に冷たく言い放ってたよね。「もう無理だ。終わったんだよ」って」

『きょうは会社休みます。』第1話

(107) では、青石はこの前テラスで聞いた田之倉の別れ話を思い出しながら、独り言のように「あれ？田之倉君別れたって言ってなかった（↑）」と発話している。実際は、独り言ではなく、飲み会のみんなに聞いてもらうことを目的としている。その場面では、青石は同僚のみんなを聞き手として捉え、次の話者も特定していないため、話者交替の要求が極めて弱いと言える。そして、複数の聞き手の中の1人である瞳は、その発話権を受け取り、次の話者になった。これは、Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)でいわゆる「現在の話し手以外の会話者が自主的に話し手になる場合」である。このような次の話者が特定されていない場合、聞き手全員が発話権を取ることが可能である。その中で、発話権を積極的に受け取る人は、次の話者になる。

本研究では、先行研究と異なり、発話場面における人数は2人か多人数かによって、聞き手の捉え方を以下の表15のように分類する。

表 15. 本研究での聞き手の捉え方

|            |           |                      |                                                |
|------------|-----------|----------------------|------------------------------------------------|
| 発話場面における人数 | 2         | A.聞き手目当ての発話          | ①聞き手が次の話者になる。                                  |
|            |           | B.疑似独話               | ②次の話者として選択されていない聞き手が自主的に発話権を受け取り、次の話者になる場合もある。 |
|            | 多人数（2人以上） | C.話し手が自ら次の話者を選択する場合  | ③選ばれた聞き手が発話権を受け取り、次の話者になる。                     |
|            |           |                      | ④選ばれた聞き手が発話する前に、他の聞き手は先に発話権を受け取り、次の話者になる。      |
|            |           | D.話し手が自ら次の話者を選択しない場合 | ⑤多人数の中の誰かが発話権を受け取り、次の話者になる場合。                  |
|            |           |                      | ⑥誰も発話権を受けとらず、次の話者になる人がいない。                     |

聞き手が存在していない場面で話し手が行った発話を独話と捉える。独話の場合、当然話者交替の要求がなく、本研究の対象から除外する。聞き手目当ての発話とは、明らかに聞き手に対しての発話である。例えば、

(108) 【田之倉が写真を撮っている青石の携帯電話を取って、二人の写真を撮ろうとしている場面】

1田之倉「ちょっといいですか（ノ） 行きますよ。はい、チーズ」

2青石「. . .」

→3田之倉「ちょっとブレたかな（ノ）」

4青石「. . .」

5田之倉「もう一回撮りましょう。はい、チーズ」

『きょうは会社休みます。』第1話

(108) の場面では、田之倉と青石の2人しかいない。1と5の発話は「です・ます」という敬語形式であるため、明らかに聞き手目当ての発話である。聞き手目当て性があるかどうかということは、話し手の発話意図によって決められる。話し手の発話意図は、話し手本人しか知らないが、われわれは、文脈要素を用いて推測することができる。本研究では、話し手は聞き手に向けて発話するという意図がある場合、聞き手目当て性があると判断する。3の発話は、独話形式として捉えられる「かな」と常体の使用によって、聞き手に対しての発話ではないと判断できる。本研究では、このような聞き手が存在している場合、聞き手目当ての発話ではなく、独り言のように発せられたものを疑似独話と呼ぶ。

発話場面で話し手と聞き手の2人しかいない場合、聞き手目当ての発話なら、話し手は聞き手を次の話者として選択している。そのため、聞き手は次の話者になる。それに対して、話し手が聞き手目当ての発話ではなく、独り言を言っている場合、聞き手を次の話者

として選択していない。しかし、聞き手は相手の発話を無視することは良くないと思っているため、発話権を受け取り、次の話者になる場合もある。発話場面で多人数（3人以上）いる場合、その人たち全員を聞き手として捉える。そして、話し手は自ら次の話者を選択するかどうかによって、「話し手が自ら次の話者を選択する場合」と「話し手が自ら次の話者を選択しない場合」に分けられる。「話し手が自ら次の話者を選択する場合」はさらに、①選ばれた聞き手が発話権を受け取り、次の話者になる場合と、②選ばれた聞き手が発話する前に、他の聞き手が先に発話権を受け取り、次の話者になる、という2つの場合に分けられる。「話し手が自ら次の話者を選択しない場合」は、①多人数の中の誰かが発話権を受け取り、次の話者になる場合と、②誰でも発話権を受けとらず、次の話者になる人がいない場合に分けられる。

一般的に、現在の話し手が次の話者を特定する場合、特定された聞き手が発話権を取得することに成功したかどうかに関わらず、話し手の発話には話者交替の要求があり、且つ話者交替の要求性が強い。それに対して、現在の話し手が次の話者を特定しない場合、疑問文で発話しても、話者交替の要求性が弱いと考えられる。聞き手の捉え方のほかに、疑問文の文末形式と文末イントネーションの違いによって、話者交替の要求性の強さが変わる。この点については、5.4節で用例を挙げながら、分析を行う。

### 5.3 疑問文発話による話者交替の要求の有無

話し手が聞き手に情報を求める場合には、疑問文がよく使われる。例えば、「すみませんが、郵便局はどちらですか（↑）」のように、相手の回答が求められている場合には、疑問文による発話が終わった時点で話者交替の要求が出てくる。しかし、すべての疑問文による発話に話者交替の要求があるというわけではない。以下では、話者交替の要求を有する疑問文発話と話者交替の要求を有していない疑問文発話を用例で分析し、疑問文発話が話者交替の要求を有する場合の条件を提示する。

話者交替が行われる前提は、話し手と、少なくとも1人の聞き手がいることである。話し手が疑問文を聞き手目当ての発話に用い、ターンを疑問文で終える場合、疑問文による話者交替の要求が出る可能性がある。例えば、(109)の1の発話は、「ちょっと飲む（↑）」という疑問文でターンを終了している。それは、明らかに聞き手に回答を求めるため、話者交替の要求が出てくる。

(109)

→1 母「白ワイン開けたら、ちょっと飲む（↑）」

2 青石「うん、一杯だけもらおうかな（↘）」

『きょうは会社休みます。』第2話

また、発話場面に聞き手が存在しても、疑問文による発話に話者交替の要求があるというわけではない。

(108) ' 【田之倉が写真を撮っている青石の携帯電話を取って、二人の写真を撮ろうとしている場面】

1 田之倉「ちょっといいですか (↑) 行きますよ。はい、チーズ」

2 青石「. . . 」

→3 田之倉「ちょっとブレたかな (↘) 」

4 青石「. . . 」

5 田之倉「もう一回撮りましょう。はい、チーズ」

『きょうは会社休みます。』第1話

(108) ' の場面では、田之倉と青石の2人しかいない。1と5の発話はいずれも「です・ます」という敬語形式であるため、明らかに聞き手目当ての発話である。3の発話では、文末に従来独話形式として捉えられる「かな」が使用されている。そして、常体の使用と文脈からわかるように、話し手の田之倉が聞き手の青石に「撮った写真がブレたかどうか」について聞いているわけではなく、携帯電話の画面を見ながら単に自分の疑問を表している。このような疑似独話では、話し手に聞き手に対して回答を求める意図がないため、聞き手存在の場面であっても、疑問文による発話には、話者交替の要求がないと見なされる。

次に、話し手が疑問文を発した後、話を続ける場合を見てみよう。

(110) 【隠れ家的な料亭で常務、半沢と部長3人が食事をしている場面】

→1 常務「半沢君は、今の当行をどう思っているかね (↑) 私は正直憂いている。12年前の合併は表向きは対等な合併だったけれども、実際にふたを開けてみれば、主要なポストのほとんどは、旧東京第一銀行出身者が占めて、われわれ旧産業中央の人間は、皆辛辣な思いをさせられた。」

→2 半沢「常務がいらっしゃるじゃありませんか (↑) 」

→3 常務「たかが常務だよ。頭取の椅子に中野渡さんが座っている限り、われわれが目の見ることはないだろう。①半沢君、私とともに上を目指さないか (↑) ②我々の手でもう一度旧産業時代の威信を取り戻そうじゃないか (↘) やはり酒はこの鳶姫にかぎるね。金沢の地酒だよ。③君、飲んだことあるかね (↑) 昔金沢支店にいた時に飲んで以来、私はずっとこれ一筋でね」

4 部長「そういえば、確か君の出身も金沢でしたよね (↑) 」

5 半沢 (沈黙)

6 常務「ホー、それは奇遇だねえ。やはり私と君は縁があるということかな (↘) 」

『半沢直樹』第6話

(110) の1と3の発話は、「半沢君」「君」という呼びかけの使用があるため、明らかに聞き手目当ての発話だと判断できる。話し手は下線部の疑問文を発した後も、話をそのまま続けている。話し手が話を続けることは、ターンを終了していないということである。

る。それによって、TRP が抑制され、疑問文による発話に話者交替の要求があっても、話者交替が起こらないのである。

また、(111)を見てみよう。(111)の1の発話では、「夢だったの?」という疑問文の後に、「パイロット」が付いている。

(111) 【面接が終わった後に、面接官がほかに応募している仕事のことを聞いている場面】

→1 面接官「夢だったの (↑) パイロット」

2 晴「いえ、全然。それでまた今度は怒られてしまって。「遊びじゃないんだ」って」  
『ミス・パイロット』第6話

ここでは、「パイロット」というのは、「夢だったの (↑)」という文の補充だと見ることができる。そして、文の形式を復元してみれば、「パイロットは夢だったの?」という疑問文になる。このように、疑問文を発した後の補充として用いられる発話は、話し手の話が続けていることを表さないと考えている。そのため、全体的には、ターンが疑問文で終了され、話者交替の要求が出てくることになる。

(112)

1 篠崎「お前、そんな俺にもお世辞の一つも言いに来ない。嫌なことは嫌だって。ずけずけ言う。俺が考えたフライトプラン気に入らなけりゃ従わない。傷つくんだよ。」

→2 国木田「気にしてたんすか (↘)」

3 篠崎「でも、そういうやつのほうが信用できる。」

『ミス・パイロット』第6話

(112)の2の発話文は、文末に終助詞「か」を用いて、非上昇調のイントネーションをとっている。「気にしてたんすか」という文が上昇調のイントネーションをとる場合、話し手の国木田が聞き手の篠崎に質問を出して回答を求める疑問文になる。しかし、2の発話のように、非上昇調のイントネーションをとることで、その文は「相手は自分のことを気にしていた」ということに対する認識をまだ完全には受容していないという不完全受容<sup>37</sup>であることを表す。話し手は聞き手に回答を求めることがなく、単なる自らの認識状態を表すため、不完全受容の疑問文による発話には、話者交替の要求がない。

以上、話し手が疑問文によって実質的な発話を終わらせる際、話者交替の要求があるか否かを検討した。本研究は、疑問文による話者交替の要求があると判断する条件として、「疑問文による実質的な発話である」「ターンを終了する際に用いられる」および「話し手は聞き手が発話権を取得することを求める」という3つを提案する。以下5節では、この3つの条件に満たしている疑問文発話において、疑問詞の有無、文末形式および文末イ

<sup>37</sup>加藤(2015b)は、このような聞き手に回答するように要求する機能はなく、談話記憶に受容しただけで、世界知識に組み込んでいない段階であることを不完全受容と呼ぶ。本研究では、この「不完全受容」の呼び方に従う。

ントネーションの相違によって、話者交替の要求性の強さが異なることを考察する。

#### 5.4 疑問文発話における話者交替の要求性の強弱

本節では、話者交替の要求性の強弱が疑問文という言語形式でどのように表されるかについて検討する。発話文の統語形式による話者交替の要求性の強弱について、加藤（2014: 515）は、「話者交替点について強弱の尺度を想定する場合、疑問文や叙述文など文として完結している形式は強い TRP になるのに対して、言いさし文は弱い TRP になる。強い TRP では、聞き手に対して話者交替を強く要求することになるが、言いさし文では弱い TRP であることから話者交替は可能でありながら、話者交替を強く要求しない。」と述べている。このように、発話文の形式上の差異は TRP の強さに影響を与える。

TRP とは、話者交替が起こる可能性がある箇所であるため、TRP が強いのか弱いのかという言い方は多少わかりにくい。本研究は、話者交替が起こる可能性の高い箇所では話者交替の要求性が強いに対して、可能性の低い箇所では話者交替の要求性が弱いと考えている。話者交替の要求性が強いということを強い TRP、話者交替の要求性が弱いということを弱い TRP で表記する。この表記は計量ではなく、概念的な説明である。疑問文は完結している形式であるため、強い TRP になると思われるが、疑問文には様々な表現形式があり、文末イントネーションでは、通常の上昇調のほかに、非上昇調も用いられるため、すべての疑問文が強い TRP になるわけではないと考えている。例えば、

(113) 【遅くまでやっていた飲み会の後、帰ろうとしている瞳】

→1 瞳 a. 「タクシー、つかまるかな (↘) 」

b. 「タクシー、つかまる (↑) 」

2 田之倉 「つかまえますよ。」

『きょうは会社休みます。』第1話

(113) の 1 a は現在の話し手の瞳が聞き手の田之倉に向けて発話するものである。1 a では、「かな」は疑問文の文末に用いられ、文末のイントネーションは非上昇調を取っている。独話的用法から対話的用法が派生される「かな」は弱い問いかけという機能を持つ。弱い問いかけであるため、聞き手への回答要求が弱くなり、TRP の強さも弱くなる。それに対して、1b の「タクシー、つかまる (↑) 」という文では、文末が上昇調のイントネーションを取るため、問いかけ性の強い典型的な質問文である。両者を比較してみると、「かな」による疑問文は、典型的な質問文より、TRP の強さが弱くなる。つまり、1a と 1b は同じく完結している形式を持つ疑問文であるが、文末形式およびイントネーションの違いによって、異なる機能が働き、TRP の強さも異なる。

本研究では、疑問文による話者交替を要求する場合、TRP の強弱は、疑問詞の有無、文末形式および文末イントネーションという 3 つの要素に関わっていると考えている。森山（1989: 184）は「上昇調のイントネーションの基本的な情報伝達の意味は、聞き手の反応をうかがうということである」と述べている。それに従い、上昇調の文末イントネー

ションをとる場合の TRP の強さは、非上昇調の文末イントネーションをとる場合の TRP の強さより強いと認められる。以下は、TRP の強弱を強い、弱いという 2 種類に分けて考察する。

#### 5.4.1 強い TRP になる疑問文発話

(114) 【会社の六階のイケメンに会った瞳】

→1 瞳「先輩、先輩、会ったことはありません (↑) 」

2 青石「ごめん、ないと思うけど」

『きょうは会社休みます。』第 1 話

(114) の 1 では、疑問の終助詞「か」が省略されている。文末イントネーションは上昇調で取られることによって、その文は明らかに命題の真偽を確かめる真偽疑問文になる。そして、「先輩、先輩」という呼びかけ表現があるため、聞き手が特定されている。さらに、話し手は聞き手に回答を求めるため、1 の発話文は強い TRP になる。

(115) 【仕事が終わって、会社から出ている二人】

→1 大城「なあ、青石、この後、暇 (↑) 」

2 青石「ちょっと映画を見に行こうと思ってて」

『きょうは会社休みます。』第 1 話

(115) の 1 の発話の「この後、暇 (↑) 」という文は、不完全な文であるが、「この後は暇 (↑) 」のように復元すれば、完全な文になる。「暇 (ひま) 」の場合、イントネーションはアクセントを変更することなく文末に付加するだけである。森山 (1989 : 174) は、「一般論として、イントネーションは、アクセントを保存した上で、文末に付加するといえる」と述べている。話し手は文末の上昇調イントネーションによって、聞き手である青石に「この後は暇であるかどうか」という命題の真偽に対する回答を求めている。そのため、「この後、暇 (↑) 」という真偽疑問文は強い TRP になる。

(116) 【友達の家にお泊まりする青石が明日犬を散歩に連れて行けないことに対して】

→1 父 a.「じゃあ、明日の散歩は代わりにやとくから、日曜の夕方、やってくれるか (↑) 」

b.「じゃあ、明日の散歩は代わりにやとくから、日曜の夕方、やってくれる (↑) 」

2 青石「うん、ありがとう」

『きょうは会社休みます。』第 3 話

(116) の 1a の「やってくれるか (↑) 」というのは、形式から見れば真偽疑問文である。終助詞の「か」が「やってくれる」という常体の形式に接続し、文末イントネーションが上昇調を取ることによって、聞き手に「やってくれるかどうか」を聞いているのである。聞き手に回答の要求を求めるため、強い TRP になる。質問を出す場合、男性、特に

中高年が常体形式に「か」を接続して使うことが多い。それに対して、「か」が付加されず、上昇調のイントネーションをとる 1b の「やってくれる (↑)」という文は、明らかに聞き手に答えを求める疑問文であるため、強い TRP にもなる。

(117) 【朝尾が飲食店で注文を聞かれる場面】

- 1 店員 a. 「はい、何にしましょう (↘)」  
b. 「はい、何にしましょうか (↑) / (↘)」  
2 朝尾「じゃ、彼女と同じものを」

『きょうは会社休みます。』第1話

(117) の 1a の「何にしましょう (↘)」という文は、「何」という疑問詞を含め、非上昇調の文末イントネーションを取る疑問詞疑問文である。終助詞「か」が省略されることで、文末イントネーションは非上昇調しか取れない。1b の「何にしましょうか」という文の場合、終助詞「か」の付加によって、文末イントネーションは上昇調か非上昇調を取れる。終助詞「か」の付加や省略は、文末イントネーションの変化に繋がっている。しかし、いずれも疑問詞疑問文であり、聞き手にその疑問詞に当てはまる情報を求めるため、強い TRP になる。

(118) 【飲食店で、朝尾が青石の向こうに座り、話しかけている場面】

- 1 朝尾「会社の前まで来といて、出社しないなんて、よほどの事情があるんじゃないの (↑)」  
2 青石「勝手に相席しないでください。迷惑です。」  
3 朝尾「くれぐれももてあそばれないように気を付けて」  
→4 青石「どういう意味ですか (↑)」  
5 朝尾「本気になって、痛い目に遭わないようにねっていう心優しい忠告」

『きょうは会社休みます。』第3話

(118) の 1 では、話し手の朝尾は「んじゃないの」という文末形式を用いて、上昇調のイントネーションを取り、聞き手である青石に「よほどの事情がある」という自分の推測を確かめている。したがって、「よほどの事情があるんじゃないの (↑)」という文は確認要求の疑問文である。確認要求の疑問文を発した後に、話者交替の要求が強く出てくる。そして、4 の発話では、「どういう意味ですか (↑)」という文は、疑問詞疑問文である。疑問詞疑問文は、聞き手に命題の値を求めるため、話者交替の要求が強い。1 と 4 における疑問文は、いずれも強い TRP になる。

(119) 【青石の誕生日のお祝いとしてケーキを買おうとしている母】

- 1 母「じゃ、ケーキだけ買っとく (↑)」  
2 青石「いいよ、いらない」  
→3 母「誰かに祝ってもらえるの (↑)」

4 青石「ううん、新入社員の歓迎会」

5 母「じゃ、帰ってからケーキ食べなさいよ」

→6 青石「それ、お母さんが食べただけでしょ (ノ) 」

7 母（父に向いて発話する）「ケーキなら、お父さんも食べるわよねえ」

『きょうは会社休みます。』第1話

(119) では、3 と 6 の発話に注目する。3 の発話文の文末形式の「の」は、「のだ」の質問文に用いられる際の形式である。加藤 (2006:69) によると、「のだ」の疑問文は「p は q ということなんですか」という確認のための質問になることが多い。「ケーキはいらない」という p にあたる先行事象があるため、「誰かに祝ってもらえるの (ノ) 」という「のだ」文は使える。3 の発話文は確認を求める質問文であるため、強い TRP になる。そして、6 の発話文の文末形式は「でしょ」であり、上昇調のイントネーションを取ることで、確認要求の疑問文になる。確認要求の疑問文は聞き手に命題内容の確認を求めるため、強い TRP になる。

(120) 【商品の運搬について話している加々見と田之倉】

1 加々見「大事な商品を運搬するんだから、効率よりも安全性を重視すべきだ」

2 田之倉「じゃ、加々見さんは安全重視で、僕は効率で」

3 加々見「違う。そういうことじゃなくてさ。お前にいっぺんに運ばれると、俺があんまり仕事してない感じに見られるんじゃない (ノ) 」

4 田之倉「これが大城さんが言ってたラビリンス」

→5 加々見 a. 「また馬鹿にしてんのか (ノ) 」

b. 「また馬鹿にしてんのか (ノ) 」

c. 「また馬鹿にしてんの (ノ) 」

6 田之倉「してませんよ。」

『きょうは会社休みます。』第6話

(120) の 5a は、話し手の加々見は強い非難の気持ちを込めて発したものである。形式上、5 の発話文の 3 つの形式はいずれも成立する。文脈に合わせて考えれば、「また私のことを馬鹿にしているかどうか」について、聞き手を問いつめるニュアンスが出てくるため、詰問になる。詰問の場合は、聞き手を非難する気持ちが含まれ、話者交替の要求が強く、強い TRP になる。

(121) 【田之倉が懇親会の参加を断ることに対して】

→1 瞳 a. 「先輩、田之倉、気にしてるんですかね (ノ) 」

b. 「先輩、田之倉、気にしてるんですかね (ノ) 」

c. 「先輩、田之倉、気にしてるんですか (ノ) 」

2 青石「え (ノ) 」

3 瞳「この前朝尾さんに2日連続同じ服着てたのからかわれてたんですよ。」

4 青石「何それ」

5 瞳「そっか。先輩休んでたから、いなかったのか。」

『きょうは会社休みます。』第2話

(121) の 1a では、文末に「かね」が用いられる。南(1985)は、「かね」を「表出段階」の「か」と、「働きかけ段階」の「ね」の組み合わせとして捉え、「か」は「話し手の疑い」を表し、「ね」は「相手の反応への要求」を表すと述べている。南(1985)の論説に参考し、1aにおける「かね」の機能を分析してみる。

話し手の瞳は、「田之倉が懇親会に参加しないのは、朝尾のことを気にしているのか」ということを疑問に思い、その疑問を聞き手である青石に確認している。1の発話で用いられる「かね」における「か」は「話し手は自らの推測の確かさに対する疑問」を表し、「ね」はその推測が合っているかどうかを聞き手に示して確かめることを表すと考えられる。聞き手に確認を求めることで、話者交替の要求が出てくる。上昇調のイントネーションをとる場合、1bも成立するが、日常会話では、「かね」は非上昇調のイントネーションと共起することが多い。「先輩」という呼びかけ表現の使用と、疑問文自体は聞き手への確認要求を表すため、強いTRPになる1cの通常の質問文と同じように、1aと1bのほうも強いTRPになると考えている。

#### 5.4.2 弱いTRPになる疑問文発話

(122) 【不正の件を調査している半沢に対して】

→1 常務 a. 「君が京橋支店で何かの不正を調べているという噂を聞いたんだが、事実かな (↘)」

b. 「君が京橋支店で何かの不正を調べているという噂を聞いたんだが、事実かな (↘)」

c. 「君が京橋支店で何かの不正を調べているという噂を聞いたんだが、事実か (↗)」

2 半沢「はい、事実です。」

『半沢直樹』第6話

(123) 【部長が吉井を呼び出している場面】

→1 部長 a. 「吉井君、ちょっといいかな (↘)」

b. 「吉井君、ちょっといいかな (↗)」

c. 「吉井君、ちょっといい (↗)」

2 吉井「はい」

『エイジハラスメント』第1話

(122) の 1a では、文末に「かな」を用いて、上昇調のイントネーションを取っている。「かな」による疑問文は対話に用いられ、聞き手目当て性を有している場合、弱い問いかけの疑問文として認められる。1b の「事実かな (↘)」のほうは、非上昇調のイントネー

ションをとるが、1a の「事実かな (ㇿ)」と同様に弱い問いかけの疑問文である。文末イントネーションの上昇調と非上昇調に関わらず、いずれも「かな」の使用によって、弱い TRP になる。それに対して、1c の「事実か (ㇿ)」というのは、通常の質問文であり、強い TRP になる。

(123) の 1a の発話では、「かな」が用いられ、文末イントネーションが非上昇調を取っている。「吉井君」という呼びかけ表現があるため、1a の文は聞き手目当ての発話になる。「かな」は対話に用いられ、聞き手目当て性を有している場合、弱い問いかけという機能が発動する。1c の通常の質問文と比べると、「かな」という本来独話の形式が用いられる 1a と 1b が聞き手への回答要求がより弱くなり、弱い TRP になる。

(124) 【病院でお見舞いに来た娘の留美に、美佐枝がちなみをインターンとして編集部で働かせることを頼んでいる場面】

→1 美佐枝 a. 「留美のところで、ちなみちゃんお願いできないかしら (ㇿ) 」

b. 「留美のところで、ちなみちゃんお願いできないかしら (ㇿ) 」

c. 「留美のところで、ちなみちゃんお願いできない (ㇿ) 」

2 留美「えっ？」

『ファースト・クラス』第 1 話

(124) の 1a の発話では、本来の独話形式「かしら」が用いられる。「かしら」という終助詞が文末に現れる場合、1b のような上昇調の文末イントネーションと 1a のような非上昇調の文末イントネーション両方とも共起できる。話し手の美佐枝は聞き手である留美に向いて、1a を発した。それは明らかに聞き手目当ての発話として用いられている。独話形式が対話に用いられ、聞き手目当て性を有している場合、「かしら」は弱い問いかけとして働いている。1c という通常の質問文は強い TRP になるが、「かしら」による疑問文は弱い TRP になる。「かしら」は「かな」と同じように、本来独話の形成であるが、使用者の社会的属性から見れば、「かな」とは異なっている。「かな」の使用には、年齢差、男女差が見られないが、「かしら」の使用者は中高年の女性が多い一方、女性のレジスターとして衰退しているため、中高年女性も今はあまり使わなくなっている傾向が見られる。

## 5.5 本章のまとめ

本研究の議論の中心となった第 4 節で挙げられた用例では、いずれも現在の話し手が相手の名前、二人称代名詞「君」などの呼びかけを使ったり、相手に向かって発話したりすることで、次の話者を選択している。発話権の委譲をしている際に使われた疑問文発話には様々な言語形式がある。本研究では、完結している疑問文は全部強い TRP になるという観点の補足と修正として、疑問文の文形式および文末イントネーションの多様性を考慮しながら、TRP の強弱を考察した。TRP の強さは、言語的要求の度合いと連動しており、疑問詞、文末形式と文末イントネーションに決められるため、その 3 つの要素を合わせて

考える必要がある。考察した結果を次の表 16 にまとめる。

表 16. 疑問文発話における話者交替の要求性の強弱と言語形式との関係

| TRP の強弱 | 言語形式の表現                                                 | 用例                   |
|---------|---------------------------------------------------------|----------------------|
| 強い TRP  | 終助詞「か」の有無に関わらず、上昇調のイントネーションを取る通常の質問文（問いかけ文）             | (114) (115)<br>(116) |
|         | 疑問詞が用いられ、疑問詞に当てはまる情報が要求される疑問文                           | (117)<br>(118)       |
|         | 「のだ」文の疑問形式「のか」、確認要求の「だろう」が用いられる疑問文                      | (119)                |
|         | 「のか」が用いられる詰問を表す疑問文                                      | (120)                |
|         | 文末イントネーションの上昇・非上昇に関わらず、話し手自らの疑念・判断を相手に確認することを表す「かね」の疑問文 | (121)                |
| 弱い TRP  | 文末イントネーションの上昇・非上昇に関わらず、「かな」が用いられる疑問文                    | (122) (123)          |
|         | 非上昇の文末イントネーションしか取れない「かしら」が用いられる疑問文                      | (124)                |

## 第Ⅱ部 疑問文の使用動機と談話効果

## 第6章 「かな」をはじめとする独話形式の使用

### 6.1 独話形式の問いかけ的使用

記述文法において、「かな」「かしら」「だろうか」が話し手の命題内容に対する不明な心的態度を表出する疑い形式として扱われている。疑い形式が独話に用いられるのは典型的であるが、問いかけ的使用される場合についても議論されている。

益岡・田窪（1992）は、「誰が来るのかな」のような、自分が疑問を持っていることを相手に知らせて、相手が答えを提供してくれることを期待する文のことを「間接的な質問の文」としている。間接的な質問の文は、未知の部分の情報を相手に求める質問型の疑問文とは異なり、必ずしも相手の方が自分より知識が多いと想定する必要はなく、単に「あなたはどうか」を聞いている場合でも使える。

仁田（1994）は、「カナ」を中心とする疑いを表す形式は、発話を聞きつける人間が存在する所では、情報伝達性が明確な場合や回答が差し控えられる場合を除いて、運用論（pragmatics）的に問いかけ性を帯びると指摘し、疑いの形式による問いかけを＜思いもかけぬ問いかけ＞と＜疑いを装った問いかけ＞<sup>38</sup>に分けている。

森田（1999）は、「かな」が終助詞「か」（自問を表す）＋終助詞「な」（詠嘆を表す）からなり、一部の辞書では既に一語の終助詞として捉えられていると指摘している。「かな」は相手に対する問いかけを表すことができ、「かなあ」について、「相手に対する問いかけの力は弱く、話し手の詠嘆が強くこめられる」としている。

日本語記述文法研究会（2003）では、「かな」の独話的な性質から派生される対話的な用法には、質問として用いられるものと応答として用いられるものがあると指摘している。質問として用いられる「かな」は、仁田（1994）でも指摘しているように、聞き手に応答を強制しないという特徴を持っており、聞き手が答えを知っているかどうか話し手に分からない状況で用いられている。応答として用いられる「かな」は、聞き手に何らか

<sup>38</sup>仁田（1994）によると、＜思いもかけぬ問いかけ＞とは、話し手は自らの疑念を口に出しただけであるが、話し手の発話を聞きつけた聴取者がその疑念を解消する情報を有して、話し手の疑念に答える場合、疑いの形式が結果的に問いかけ性を帯びることになっている。＜思いもかけぬ問いかけ＞は、問いかけと異なり、聴取者を聞き手として相手どったとしても、聞き手に自らの疑念に対する回答が可能であると想定していなくても、発話することができる。＜疑いを装った問いかけ＞とは、「君」という二人称代名詞が使われること、疑いの内容が聞き手に直接に関するものであることなどによって、話し手は発話を聞きつける存在を明確に聞き手として扱っており、その聞き手に向かって自らの疑念を伝えている。話し手は、「疑念を伝えられた聞き手は、単なる聞き手に止まらず、問いかけられ手に転ずることを認識した上で、疑いの文を形成する形式である「かな」を使用している。＜疑いを装った問いかけ＞には、話し手は聞き手が回答可能であるという想定がある。問いかけとの差が極めて小さくなるが、聞き手への情報呈示性を有していることと、回答要求性を軽減することで、問いかけとは異なっている。

の情報を伝える機能を持っており、補充疑問文に対する応答文として、はっきり言い切れない情報を伝える。

以上の先行研究では、本来独話形式の問かけの用法が既に指摘されており、「聞き手に回答を求める力が弱い」「話し手が聞き手の回答可能性を想定しなくても良い」という点に共通している。本研究は、「なぜ本来独話形式を問かけ的に用いるのか」と「その使用が聞き手へどのような作用があるか」という2つの問題についてさらなる検討をする余地があると思い、用例を挙げながら、独話形式の問かけ的使用を分析した上で、その2つの問題を解明する。

独話形式は(125)(92)のように、話し手の独り言として用いるのが典型的な用法である。「だろうか」という形式が疑問詞疑問文の文末に用いる場合、「か」が省略される。

(125)【吉成が一人で遅くまで残業している場面】

吉成「もうちょっとタイトル大きい方がいいかな (ゝ)」

『ファースト・クラス』第2話

(92)・【一人でテレビを見ながら、独り言をしている真木】

真木「水川あさみか (ゝ) 最近よくテレビ出てるよな。確か私とそんな年変わんないんだよな。いいな。私、何やってんだろう (ゝ)」

『かもしれない女優たち』

問かけ的に用いる(127)(128)(91)は、いずれも聞き手が存在している場合に話し手が聞き手に向かって発話するものであり、聞き手の回答を求めている。

(127)【映画の撮影前にスタイリストに向かって聞いている場面】

白石「顔色、大丈夫かな (ゝ)」

スタイリスト「大丈夫だと思います。」

『かもしれない女優たち』

(128)【共同執筆の小説が大人気になったのが遠野作家の復活だと言っている小田編集に対して】

遠野「私だけかしら (ゝ)」

小田「いえ、川原由樹も復活です。」

『ゴーストライター』第10話

(91)・【元ゴーストライターの川原に対して】

神崎「早速書き下ろし、一冊書いてもらえないだろうか (ゝ)」

『ゴーストライター』第8話

本研究で収集した用例を見ると、「かな」「かしら」「だろうか」という独話形式が問かけ的に用いられる場合、「かな」のほうが「かしら」と「だろうか」より多用されている。「かな」の使用には位相的な制約が見られないが、「かしら」の使用者はほぼ女性に限られている。しかし、(90)のように、「かしら」が男性による発話に用いられる用例があ

る。

(90) 大門「じゃあ、蛭間はクビ (ノ)」

晶叔父「それはどうかしら (ゝ)」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第5話

(90) では、男性の発話者である晶叔父がオネエではないが、女性らしい言い方をたまにしている人である。(91) のように、「だろうか」<sup>39</sup>はほぼ男性によって用いられ、「かな」「かしら」と比べると、使用頻度がかなり低い。

独話形式の問いかけの使用は、聞き手目当ての発話に用いられることと、聞き手の反応・回答を要求するという点で典型的な疑いの疑問文から区別されている。典型的な問いかけは、形式によって回答要求の力が生じ、答える義務を相手に押し付けることになる。独話形式の問いかけの使用は、疑問を持っている自分を相手に見せることに止まらず、相手への押し付けを避けながら、相手から反応を引き出そうとしている。そのため、独話形式による問いかけは典型的な問いかけとも異なっている。本研究では、問いかけ的に用いる「かな」などの独話形式が有する機能を「弱い問いかけ」として捉える。

## 6.2 弱い問いかけの語用論的特徴

### 6.2.1 必須ではない回答可能の想定

Searle (1969) は Question (質問・問いかけ) の preparatory rules (事前規則) を提示しているが、問いかけの場合、話し手の欲している答えが聞き手のもとにあるという条件がそこに含まれている。言い換えれば、話し手が問いかけの疑問文を発する場合、聞き手が回答可能であることを想定しなければならない。

(129) 【落ち込んでいるウェイトレスのようこを励ましている常連客の清水に対して】

ようこ「口説こうとしています (ノ)」

清水「してないよ。」

『かもしれない女優たち』

(130) 「下の文を和訳していただけますか？」

(129) では、話し手のようこは、口説こうとしているかどうかの回答が聞き手のもとにあると想定して問いかけているのである。(130) では、聞き手にはある外国語を日本語に訳せる能力があるため、話し手は聞き手に依頼をしているのである。

(131) 【A は B が太郎に関する情報を持つかどうかを知らない場合】

---

<sup>39</sup>本研究では、「だろうか」の敬体形式「でしょうか」は、「だろうか」と区別する。

A「太郎は今日来るのかな (\\)」

B「うーん、どうかな (\\)」

(131) では、話し手は相手が情報を持つかどうかを知らない場合、相手が回答可能を想定しなくても何うことができる。仁田(1994)では、＜思いかけぬ＞に対して、聞き手が答えるなら、話し手の発話が結果的に問いかけ性を有することになると述べている。しかし、聞き手の回答によって、話し手の発話が問いかけ性を有するかどうかを判断するのは不適切である。

本研究は、話し手の発話意図によって、話し手の発話における問いかけ性の有無を判断する。話し手は、聞き手が回答可能を想定しなかったり、聞き手が回答を提供できるかどうかを重要視せず、とりあえず聞き手の考えを聞いてみようという発話意図で発話する場合、(131) の A の発話が問いかけ性を有することになる。即ち、弱い問いかけは、単なる問いかけと異なり、回答可能の想定を必要としていないことがわかる。

## 6.2.2 回答不可能な場合の使用

弱い問いかけの疑問文は、聞き手が回答不可能であることが明らかな場合でも成立する。

(132) 【吉成と西原が六畳の部屋に住んでいることについて話している場面】

吉成「いつかもっと広い所に住める日が来るかな (\\)」

西原「うん、来るといいよな。」

『ファースト・クラス』第2話

(132) は、話し手が聞き手に未来のことを聞いている。今より広いところに住めるかどうかは未来のことなので、明らかに二人ともわからないことである。このように聞き手が回答不可能を知っている場合でも、弱い問いかけの疑問文が使える。話し手にとって、聞き手が反応するだけで良い。それに対して、聞き手が回答不可能であることが明らかな場合、問いかけの疑問文は使えない。

## 6.2.3 問いかける力を弱めるストラテジー

(133) 白雪 a.「電話とメール両方で確認してね。ちょっと大変だけどできるかな (\\)」

b.「電話とメール両方で確認してね。ちょっと大変だけどできる (〃)」

吉成「はい、頑張ります。」

『ファースト・クラス』第1話

(134) 多衣 a.「奥のカウンター、よろしいかしら (\\)」

b.「奥のカウンター、よろしい (〃)」

通子「へえ、どうぞ。」

(133) では、白雪が仕事の内容について吉成に聞いている。(134) では、通子のお店を訪ねた多衣が座る席のことについて、女将の通子に聞いている。この2つの用例では、命題内容の情報が聞き手の能力・権限に関わっており、聞き手にとって回答可能である。話し手は、聞き手が回答可能であることを想定し、弱い問いかけの疑問文を用いることは、回答要求の力を弱めることができる。本来独話形式の使用によって、問いかけが柔らかく聞こえるようになる。

### 6.3 弱い問いかけの使用動機<sup>40</sup>

加藤(2002)は、言語使用者が特定の表現を用いる動機について、「正の動機」と「負の動機」に二分して述べている。

「正の動機」とは、＜新しい形式（語形や用法）が必要とされているという判断によって、旧来の形式を用いず、新しい形式を用いる意思＞のことであり、負の動機とは＜旧来の形式（語形や用法）では不適切、あるいは、不十分だという判断によって、旧来の形式を用いることを回避するために、新しい形式を用いるという意思＞のことである。

加藤(2002: 43)

話し手は問いかけの疑問文を発することによって、発話権を聞き手に委譲することができる。そして、聞き手にとって、回答する義務がある問いかけの疑問文は、要求性の強いものである。そのため、問いかけの疑問文を用いる場合、聞き手の言語行動の自由度を侵害する可能性が生じる。代わりに、弱い問いかけの疑問文は、聞き手が話し手の疑念を回答しなくてもよいという点から、聞き手への押しつけが抑制的になるため、要求性も弱くなる。一般的に、話し手は発話場面において、聞き手との親疎関係を判定してから、適切な言語形式を選択する。問いかけの疑問文を使わず、弱い問いかけの疑問文を選ぶのも、話し手が発話場面において、聞き手との親疎関係を考慮して、柔軟に調整した結果である。このように、問いかけの疑問文の使用を避けて、弱い問いかけの疑問文を多用することは、「負の動機」に当てはまると考えられる。

聞き手が回答不可能の場合には問いかけの疑問文が使えないため、弱い問いかけを使うのが一般的である。しかし、上例の(133)(134)では、問いかけが使えるのに、問いかけの疑問文を使わず、話し手は弱い問いかけを用いている。弱い問いかけは、回答要求の力を弱めることができるが、なぜ回答要求の力をわざわざ弱めるのかについて、ポライトネスの観点から分析する。

聞き手への行為要求、回答要求などは、いずれも聞き手行為の自由度に負担をかけるものであり、FTA になる可能性がある。通常の問いかけの疑問文の場合、話し手の質問に

<sup>40</sup> 本節は、馬(2014a)をもとに、加筆修正を加えたものである。

対して、聞き手には回答する義務がある。それは、聞き手にとって押しつけがましいと感じる可能性がある。そこで、聞き手への負担を減少するため、自らの発話を工夫して、より聞き手にとって受け入れやすい形式にしたいという話し手の発話意図が生じると考えられる。

Leech (1983) で言う Tact Maxim とは、「他者に対する負担を最小限に、他者に対する利益は最大限にする (Minimize the expression of beliefs which imply cost to other; maximize the expression of beliefs which imply benefit to other)」という格率である。独話形式の使用によって、話し手が聞き手に答えを弱く要求することで、聞き手に対する負担は小さくなり、聞き手の回答の自由度も高くなる。そのため、弱い問いかけの疑問文は、相手に押し付ける感じを与えがちな問いかけの疑問文より好ましいと感じられ、これが 1 つの動機を形成していると考えている。

## 6.4 応答としての「かな」文の語用論的解釈

特定の形式が常に持っている本来の意味は意味論的なものであり、推意は語用論の意味である。

(135) 【訓練生たちが寮に戻ったら、泰治の彼女であるすずの出現にびっくりした場面】

小鳥「なっ、何で、何で、何でここにいの (ノ)」

すず「泰治が「来い」ってしつこいからさ」

泰治「言ったかなあ (ゝ) 俺」

『ミス・パイロット』第 6 話

(135) の「言ったかなあ (ゝ)」は、文脈要素を考慮せず、「かなあ」が用いられる疑問表明の疑問文である。言語形式から導くのは、「わからないけど、多分言っていない」という一般的会話推意である。しかし、「泰治が突然寮に現れたすずを見てびっくりして、すずがアメリカに来ることを全然知らなかった」という状況文脈から、「泰治がすずに「来い」と言っていない」ということがわかる。文脈要素を考慮して、泰治は「俺言っていないよ」のような言語的否定をしていないが、「言ったかなあ (ゝ) 俺」という発話から、「「来い」と言ったと思わない」という弱い否定に傾いている特殊化会話推意が得られる。ここでは、話し手の泰治が「俺が「来い」と言っていない」ということをはっきり話していない、「俺が「来い」と言ったかどうかを疑問に思っている」というような言い方をするのが Grice (1975) の協調の原則の質の格率に違反している。

会話に何か原則があるのかについて、Grice (1975) は協調の原則を提案した。

### 【A】量の格率

- (1) 必要な量の情報を発話に盛り込め。
- (2) 必要以上の情報を発話に盛り込むな。

### 【B】質の格率

- (1) 間違っていると思うことを言うな。
- (2) 十分な証拠のないことを言うな。

【C】関連性の格率

- (1) 関連のあることを話せ。

【D】方法の格率

- (1) はっきりしない表現は避けよ。
- (2) 解釈が分かれるような言い方をするな。
- (3) 簡潔に話せ。
- (4) 順序よく話せ。

加藤訳 (2004 : 52-53)

Brown&Levinson (1987) は、Grice (1975) の理論を補うために、ポライトネス理論を提示した。会話において Grice (1975) の協調の原則に違反するのは、聞き手に対する配慮を表現するために、ポライトネス・ストラテジーを用いたからであると考えられる。

(135) では、話し手の泰治は直接相手を否定しないことによって、相手の面子をできる限り侵害しないという話し手の相手への配慮が見られる。そのため、「～かなあ」文の使用は、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして捉えられる。

(100) ・【紗絵子が薫子のデートのために、服を選んであげている場面】

紗絵子「じゃあ、こういうの着てったら、どうです (ノ) 大人の色気が漂う感じで、ねえ、ほら、見て見て、似合う。」

薫子「そうかな (ノ)」

『失恋ショコラティエ』第 11 話

文形式から、「そうかな (ノ)」は、「話し手はその服が自分に似合うかどうか疑問に思っている」という一般的会話推意が生じる。しかし、普段のスタイルと逆のタイプであることと、紗絵子を選んでくれた服があまり気に入らないような表情からわかるように、「似合うと思わない」という否定に傾いている特殊化会話推意が引き出される。薫子は、紗絵子の「その服は自分に似合う」という意見を否定すると、紗絵子のフェイスを侵害する可能性があり、紗絵子に同意することもしたくないため、「そうかな (ノ)」を用いて、「似合うかどうか」に関して決められない、あるいはまだ分からないという気持ちを相手に伝えている。「似合わないよ」などのような相手を否定する言い方を避けるのは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして考えられる。紗絵子の「似合う」に対して、「そうかな」には、期待される情報量を明らかに満たしていないため、Grice (1975) の質の格律にも違反している。

## 6.5 疑問文末形式の「かね」

本節では、先行研究を踏まえ、「かね」の捉え方を検討しつつ、「かな」との相違点およ

び類似点も述べる。

### 6.5.1 「かね」の捉え方への再検討

本研究は、「かね」をひとまとまりではなく、「か」と「ね」の組み合わせとして捉える。「かね」の意味機能を分析する際に、「か」の用法と「ね」の用法を分けて考える。

国立国語研究所（1951）は、文末用法としての「ね」について、「軽い詠嘆の気持ちを含む判断」「軽い主張、念を押す気持ち」「同意を求める。返答を促す」「質問・詰問」の4つの用法を記述している。森山（1989）、神尾（1990）、益岡（1991）では、「ね」を聞き手との関係から考察している。それらは、聞き手情報優位あるいは話し手と聞き手の情報を共有しているという観点から、「ね」の確認・同意要求などの機能を述べている。日本語記述文法研究会（2003:259-260）は、終助詞「ね」の用法を「話し手の認識として聞き手に示す用法」「聞き手に確認を求める用法」「聞き手を意識していることを示す用法」に分けている。

南（1985）は、「かね」を「表出段階」の「か」と、「働きかけ段階」の「ね」の組み合わせとして捉えている。その中で、「か」は「話し手の疑い」を表し、「ね」は「相手の反応への要求」を表すと述べている。南（1985）では、「かね」の「か」を「疑念表明」として捉えられているが、その「か」が、聞き手への問いかけという機能を有しているものとして、(136) (137) が挙げられる。

(136) 【大学病院の会議で、院長が今後の計画について自分の考えを述べた後、部長の見解を聞いている場面】

院長「西園寺外科部長、あなたのご見解はどうですかね（\）」

西園寺「御意」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第1話

(137) 【副院長と内科、外科の医者たちが院長室に来る場面】

蛭間院長「一体、これは何事でしょうかね（\）」

副院長「あなたのくびをもらいに來たの。」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第5話

(136) と (137) では、いずれも疑問詞疑問文に「かね」が付加され、聞き手に回答要求を求めている。

(138) 【議員の政治的腐敗が発覚した。】

議員「私、生き残れますかね（\）」

村長「さあ、わからん…」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第2話

(139) 【退職を押し付けられた院長が副院長などに対して】

院長「一晩だけお時間をちょうだい出来ますかね（\）」

(136)～(139)では、「か」が問いかけの機能を果たしているが、「ね」を付加することによって、「～かね」文が和らげられた問いかけの機能を持つことになる。「あなたのご見解はどうですかね (ㇿ)」と、「あなたのご見解はどうですか (ㇿ)」を比較してみると、「かね」文は聞き手への問いかけを和らげているように感じられる。このように「ね」が「発話の力を和らげる」という機能を持つと考えている。

(140)【部長の飲み会の誘いを断った女性社員に対して】

浅野「へえ、どうして毎回そう断りますかねえ (ㇿ)」

女性社員「定時後に飲んだり食べたりは仕事に入っていませんから。」

『エイジハラスメント』第5話

(140)の「かねえ」という形式は「かね」よりも柔らかく、回答要求を強くしない特徴がある。

また、南(1985)の論述によると、相手の反応への要求を表す「ね」があるため、「かね」は対話的に用いられるということがわかる。しかし、(141)のように、「かね」は独り言として用いられ、相手の反応を要求しない場合もある。

(141)【レミ絵は一人で吉成のことを考えている場面】

「月に代わってお仕置きですかね (ㇿ)」

『ファースト・クラス』第3話

(141)は、レミ絵の心の中での発話である。そのため、「かね」による発話文は、話し手の「月に代わってお仕置きするか」という疑いを表す。話し手のレミ絵は若い女性であり、独り言であっても、一般性を持つ「敬体+かね」を使っている。

(142)【教官の国木田がパイロット訓練生の晴を責めたことについて】

国木田「言い過ぎたかなあ (ㇿ) あの場合で言うようなことじゃなかったかも。」

千里「どうですかね (ㇿ)」

『ミス・パイロット』第9話

(142)では、「どうですかね (ㇿ)」というのは、相手に何か聞かれてもわからない場合の応答である。「さあ、わかりません」という意味に近く、話し手の疑問を表明するのみのものであり、「か」は、話し手の疑念表明を表すが、「ね」は相手への反応要求をしていない。

(143)【部長と部下の浅野が飲んでる薬のことを話している場面】

部長「お前のは (ㇿ)」

浅野「脈拍を正常にするのと、あとカルシウムですね。骨が弱くなっちゃったんですかね（ㇷ）」

『エイジハラスメント』第5話

(144) 【殺人事件現場で】

深山「窓は何を使って割ったと思いますか（ㇸ）」

副社長「ハンマーとか、レンチとかですかね（ㇷ）」

『99.9—刑事専門弁護士—』第7話

(143) (144) は、相手の発話に応答としているが、話し手は命題内容に対して、確実な情報を持たず、断定的に答えられないことを表している。このような場合、「ね」は、日本語記述文法研究会（2003）で述べている「聞き手を意識していることを表す用法」に当てはまる。

(145) 藤野「やっぱり無理ですかねえ（ㇷ）」

『99.9—刑事専門弁護士—』第4話

(146) 【同じ部屋にいる患者の村長に対して、自分のことを語っている議員】

金本議員「一時は総理候補ナンバーワンって言われましてね。調子こいちゃったんですかねえ（ㇸ）気が付いたら、毎週これと箱根ですわ…」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第2話

(145) (146) における「かねえ」という形式は、話し手が命題に対して、明確な判断を下しにくい状況を示す。

以上見てきたように、「かね」には要求性を有しているものと要求性を有していないものがある。「かね」「かねえ」の種類と機能を表17のように提示する。

表 17. 「かね」「かねえ」の種類と機能

| 四種類  | 「か」            | 「ね」             | 要求性 | 用例               |
|------|----------------|-----------------|-----|------------------|
| かね1  | 問いかけを表す        | 問いかけを和らげる       | あり  | (136) ～<br>(139) |
| かねえ1 | 問いかけを表す        | 問いかけをさらに和らげる    | あり  | (140)            |
| かね2  | 疑念表明           | 聞き手を意識していることを表す | なし  | (143)<br>(144)   |
| かねえ2 | 断言しにくい<br>疑念表明 | 聞き手を意識していることを表す | なし  | (145)<br>(146)   |

## 6.5.2 「かな」と「かね」の比較

加藤（2006）が「終助詞は社会的要因（地域、性別、年齢）による形態や用法の差が大きい」と指摘しているように、「常体+かな」および「敬体+かね」という言い方が一般的であるが、「敬体+かな」および「常体+かね」という言い方は主に男性の年配者が用いる。それは、「かな」「かね」の使用者の社会的属性の違いである。

ところで、加藤（2012）では、無標と有標の概念を、形態論だけでなく、意味や機能からも捉え、使用頻度が高く一般性を持つものは無標であることに対して、逆は有標であると指摘している。「かね」と「かな」の使用を考えると、一般性をもつ「常体+かな」および「敬体+かね」は無標で、社会的属性に制限される「敬体+かな」および「常体+かね」は有標である。そして、三宅（2011）では、常体において「かね」、敬体において「かな」を用いる可能性があるが、極めて強い位相的な制約があり、少し威張った感じの年配の男性においてのみ使われるとも指摘している。

本研究の用例資料では、「敬体+かな」の用例が見られなかったが、小説でこの用法の用例が見つかった。

(147) 「人に見られたくない相手、見られたらまずい相手と会ってた、ということですかかな」

『白夜行』 pp.16

(148) (149) (150) のように、年配の男性による「常体+かね」という形式の使用が、真偽疑問文と疑問詞疑問文にもある。

(148) 【仕事が忙しいのに、病院にお見舞いに來た神崎に対して】

花屋敷「こんなところにいて、いいのかね (ㇺ)」

神崎編集長「先生こそ、ここは先生がいらっしゃる場所じゃありません。早くお体治しましょう。」

『ゴーストライター』 第1話

(149) 【画家の六扇が描いた絵を指して通子に聞いている】

六扇「わかるかね (ㇺ)」

通子「何かの文字でしょうか (ㇺ)」

(150) 【失ったお客さんの社長を取り戻そうとして、通子が会社を訪ねた。】

通子「野沢社長、浜松から参りました。花ずみの女将の立石通子と申します。」

社長「その女将が、何の用かね (ㇺ)」

通子「今の花ずみは先代の頃と何もかも違います。どうかまたお出掛け頂けませんか (ㇺ)」

『隠れ菊』 第3話

まず、「かな」文と「かね」文の類似点を確認しておく。「かね」文は、「①聞き手が回

答不可能な場合に使える」「②聞き手の回答可能を想定する必要がある」「③聞き手が回答可能な場合に問いかける力を弱める」という3点が「かな」文と一致している。聞き手が回答可能を想定して問いかける場合、問いかける力を弱める「かね」は、前述した。

- (151) a. #今度上映される「タイタニック 2」って映画、おもしろいか？／ですか？  
b. 今度上映される「タイタニック 2」って映画、おもしろいかな？／ですかね？

三宅 (2011) は、(151) のような聞き手もまだその映画を観ていないことが明らかな状況で、通常の質問文 (151a) が不自然さを示すのに対し、「かな」「かね」による発話 (151b) は聞き手への直接的な回答の要求を持たないため、まったく自然であると述べている。

(152) 【事件現場の割れた花瓶について】

戸川「落としただけで、そんなに粉々になりますかね (ㇺ)」

佐田「そうだよな (ㇿ)」

『99.9—刑事専門弁護士—』第7話

(152) では、話し手は、聞き手が情報を持つかどうかかわからず、回答可能であることを想定せずに、「かね」文で聞いている。

話し手が、「常体+かな」と「敬体+かね」のどちらを選択して使うのかということは、話し手と聞き手との社会的力関係と発話場面によって決められると考えられる。三宅 (2011) は常体においては「かな」、敬体においては「かね」というように相補的に分布しているが、表現効果が同じであると述べている。「かね」と「かな」は、前述した3点に一致している。しかし、やはり「かな」とは言語的な対人配慮の程度まで一致してはいない。また、互換すると語用論的に不適切な発話になる場合もある。本研究は、三宅 (2011) の論述と異なり、「かな」文と「かね」文の使用による表現効果の違いを考察する。

滝浦 (2013) は、敬語がネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの「敬意を示す」の一部分になると指摘している。敬体は聞き手待遇表現であり、改まった場面での使用と、親しくない相手に対しての使用が一般的である。「敬体+かね」の使用では、話し手が、発話場面と聞き手への配慮が見られる。敬体の場合、話し手と聞き手との遠隔化が表現されるが、「常体+かな」の使用は、「敬体+かね」より制限されている。「常体+かな」は、目上が目下に対して、あるいは親しい間柄での使用が一般的である。しかし、相手と近接化するために、「常体+かな」を使用することも考えられるが、相手のフェイスを脅かすリスクが伴うこともある。

(142) ' 【教官の国木田がパイロット訓練生の晴を責めたことについて】

国木田「言い過ぎたかなあ (ㇿ) あの場で言うようなことじゃなかったかも。」

千里「どうですかね (ㇺ)」

『ミス・パイロット』第9話

(142) は、教官の国木田が「常体+かなあ」を用いているが、元訓練生の千里が「敬体+かね」を用いている。話し手の千里は、目上の教官に対して、「どうかな」という「常体+かな」の使用が不適切であると判断し、「どうですかね」を用いたと考えられる。

(136) 〃【大学病院の会議で、院長が今後の計画について自分の考えを述べた後、部長の見解を聞いている場面】

院長「西園寺外科部長、あなたのご見解はどうですかね（\）」

西園寺「御意」

『ドクターX ～外科医・大門未知子～』第1話

(136) では、院長が目下の部長に対して、「敬体+かね」の形式を用いている。それは、話し手の院長が会議というフォーマルな場面に対する配慮によって「敬体+かね」を選択したと考えられる。

話し手が「常体+かな」の代わりに「敬体+かね」を用いるのは、聞き手待遇表現「敬体」を使用したいという発話意図があると考えられる。一般的に、「です」「ます」類は丁寧語として、敬語の部類に入るとされている。菊地（2003）は、待遇表現の1つである敬語の捉え方を「社会言語学的側面」と「文法的な側面」から説明している。菊地（2003）によると、社会言語学的側面から見れば、話し手は、「相手が目上か同等か目下か」「相手を立てるか否か」「相手との心理的な距離はどの程度か」「どのような性質の場面か」などといった社会的・心理的な諸要因を考慮した上で、敬語の使用を決める。そして、井出・植野（2012）は、「敬語は相手、場面に応じて使い分けられる。相手とは、話し相手や話題に上がる人のことで、その人たちが目上であるか疎の関係にある場合は、「ソト」の関係にある人として敬語を使用する。また場面とは、その場がフォーマルか否かのことで、フォーマルな場面であれば相手いかに関わらず敬語が使われる」という。したがって、(136) の「かね」の使用は、話し手が発話場面を配慮し、(142) の「かね」の使用は、話し手が相手との社会的力関係を配慮したのであると説明できる。

## 6.6 本章のまとめ

本章では、問いかかけ的に用いられる「かな」などの独話形式を弱い問いかかけとして捉え、「回答可能の想定が必須ではない」「回答不可能な場合でも使える」「問いかかけの力を弱める」という3つの語用論的特徴を挙げた。そして、問いかかけが使えるのに、問いかかけの疑問文を使わず、「かな」などの本来の独話形式を選好する傾向が見られたことを指摘した。それは「負の動機」に当てはまり、相手に押し付ける感じを与えがちな問いかかけの疑問文より好ましいということが1つの動機になると述べた。さらに、「かな」を用いる応答としての疑問文の特殊化会話推意を考察した。また、「かね」の捉え方を検討し、「かな」と「かね」の対人配慮での相違点を分析したところ、先行研究の記述とは異なり、「かな」と「かね」は表現効果に差がみられた。敬体に接続する「かね」の使用が場面

と聞き手への配慮を明示する形式であると結論付けた。

## 第 7 章 非難を表す疑問文

本章は、文脈と推意という語用論の理論を用いて、疑問文が非難を表すことを考察する。

### 7.1 先行研究

疑問文の形式で非難を表すことについて言及している先行研究として、日本語記述文法研究会（2003）、中崎（2005）、天野（2011）と加藤（2015b）が挙げられる。

#### 7.1.1 日本語記述文法研究会（2003）

日本語記述文法研究会（2003）は、非難を表す疑問文の形式は（153）（154）（155）のように、理由を尋ねる疑問語（「なぜ」「どうして」など）をとった補充疑問文が多いと述べている。そして、「非難」という機能を「相手の発言や行為が非常識であったり、よくないことだという考えを伝えるものである」と定義している。さらに、「非難」という機能の形成について、「話し手がそうするべきだと考えていることをしていない相手に対して、その意図を尋ねたり、質問する必要があるほど当然のことをあえて質問したりすることで、すべきことと聞き手の現状とのずれを聞き手に再認識させることによって派生される」と指摘している。日本語記述文法研究会（2003）によると、（156）のような「何を」で示す補充疑問文と、（157）という「を」が脱落される文もしばしば非難のニュアンスを帯びる。補充疑問文の他に、（158）のように真偽疑問文によって非難の意味が表されることもある。（158）では、話し手は明らかに事実とは違うことを質問することによって、聞き手にその事実を再認識させることを強く表現している。

（153）どうして言ったとおりにやらないの！

（154）どこに立ってるんだよ。邪魔だからどいてよ。

（155）いつまで学生気分が抜けないんだ。しっかりしろよ。

（156）何をバカなことを言っているんだ！

（157）何、こんなところでぼんやりしてるの！

（158）これがテレビに見えるか？よく見ろよ。

（日本語記述文法研究会 2003：50）

#### 7.1.2 中崎（2005）

中崎（2005）は、従来の研究では扱いきれない終助詞「よ」の使用を指摘し、「よ」の機能には少なくとも「①言述、命じ、尋ねといったいわゆる発話の力を話し手が聞き手に強調する」「②当該の発話が発話に対する話し手の心的態度（遺憾・不快等）を有していることを述べる」「③当該の発話が字義通りの意味とは異なる内容（言外の意味）を有し

ていることを述べる」という3つがあることを主張している。そのうち、機能②を有している「よ」を文に付加させることによって、話し手は事態に対する心的態度の存在を顕在化させていると指摘している。そして、森山（1992）で言われる疑問型情報受容文に「よ」が後接している（159）について、話し手が「（でてきた料理が）うどんである」といった情報を受け入れたことを示すだけでなく、当該事態に対して話し手が「不快である」といった心的態度を表していると中崎（2005）が述べている。

（159）遊介：へい！お待ち！「海賊風ぶっこみみうどん」！

山沖：遊介よー。うどんかよー。暑いぞー。

遊介：真夏にアツいうどん食ってタップリ汗かいてあとは海に飛び込む、スカッとしますよ。

『ネイチャーパイロット』1巻 天沼俊 集英社

中崎（2005）は、聞き手への情報要求が見られず、形式上疑問文の形をとっている（160）の「よ」も機能②に属して、（160）は「聞き手が話し手を殴った」という答えに対しての「遺憾」といった心的態度を有していることを示していると述べている。

（160）（突然訳もなく殴られる A）

A：何するんだよー。

（中崎 2005：82）

本研究は、それを「遺憾」というより、自分を殴った人に対しての「非難」といったほうが適切ではないかと考えている。

### 7.1.3 天野（2011）

天野（2011）によると、逸脱的な＜何ヲ＞文は形式的には疑問詞疑問文であるが、典型的な疑問詞疑問文と異なり、＜問いかけ＞の意味が極めて希薄であり、＜とがめだて（非難）＞が主たる意味の文である。そして、この「何を」は「何で」「なぜ」に近い意味を表すように感じられ、文末イントネーションが下降調のほうが多い。表 18 で示しているように、「なぜ・いつ・だれ・どこ」などのような疑問詞を用いた疑問文も、暗意として非難の意味が表れている。

表 18. 天野（2011：182）による典型的疑問詞疑問文と逸脱的なく何ヲ>文<sup>41</sup>

| 典型的疑問詞疑問文                  | 逸脱的なく何ヲ>文                  |
|----------------------------|----------------------------|
| 何を讀んでるの?/!                 | 何を讀んでるの!                   |
| 何をそんなに悲しんでるの?/!            | 何を本を讀んでるの!                 |
| どこをほっつき歩いてたんだ?/!           | 何をぶってるの!                   |
| 誰をぶってるの?/!                 | 何をそんなにはしゃいでいるの!            |
| いつまでやるの?/!                 | 何をおいぼれてるの!                 |
| 何で文句を言ってるの?/!              | 何を文句を言ってるの!                |
| 補充説明を要求することと共に、とがめだての意味を表す | 補充説明の要求はなく、とがめだての意味を主として表す |
| 構造：[疑問詞 動詞句]               | 構造：[疑問詞 [ (Ø/〜ヲ) 動詞句] ]    |

天野（2011）で述べられた逸脱的なく何ガ>文の定義および2タイプは以下の表 19 のようにまとめられる。

表 19. 逸脱的なく何ガ>文の定義および2タイプ

| <発話意図補充要求>タイプ                                                                                                                        | <発話意図補充要求+とがめだて>タイプ                                                                                                          |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 定義: 文を形成する要素の補充を求めているのではなく、発話を構成する文そのものを1つの要素とし、「そのように発話すること」の意味を求めるタイプである。                                                          | 定義: 疑問の形を用いて相手の発話の背景・理由・意図は何なのか、私には理解できないということを表明し、そのように言うべき理由はないことを相手に気づかせ、そのような発話をするべきではないという、発話行為に対するとがめだての意味を含意するタイプである。 |
| 用例:<br>「 <u>何</u> が出るんだ?」…通常の<何ガ>文<br>太郎は、大西にある日尋ねた。<br>「出るって <u>何</u> が?」…逸脱の<何ガ>文<br>「梅乃家さ」<br>(曾野綾子『太郎物語』p.868 天野 2011: 202 より再掲) | 用例:<br>「そうだな。それが独立するってことだものね」<br>「 <u>何</u> が独立よ。お金を親から持って行っているながら、独立も何もないでしょ」<br>(曾野綾子『太郎物語』p.720 天野 2011: 203 より再掲)        |

以上の表 18&表 19 からわかるように、一般に疑問詞疑問文は①<疑問>だけを表す場合のほか、②<疑問>を表しても、文脈によって<とがめだて>の意味をも含意する場合

<sup>41</sup>天野（2011）では、上昇イントネーションが多く現れる場合、文末に「?」が付加され、下降イントネーションが多く現れる場合、文末に「!」が付加されている。

がある。逸脱的な＜何ガ＞文は＜とがめだて＞の意味が無いものもあるが、逸脱的な＜何ヲ＞文は＜とがめだて＞の意味を主とする。

#### 7.1.4 加藤（2015b）

加藤（2015b）は、疑問文の種別を整理し、それぞれの発話的な力と発話内的な力を指摘している。そのうち、「なんで～しているのか」という疑問詞を伴う疑問文の形式が、「～することは不適切だ」という解釈を表示し、聞き手に回答を求めないことで不適切性を非難する形式として固着しつつあると述べている。そして、疑問文における非難や批判の意味が、当該の事態を理解できず、受容できないことを示す【受容拒絶】であるところから得られると主張している。

（161）どこほつつき歩いてるんだ？

（162）何、寝てるんだよ？

（163）なんで寝てるんだよ？

（加藤 2015b:49）

加藤（2015b）によると、（161）は、場所を問うのではなく、回答要求が放棄されている。（162）は、形式的にさらに受容拒絶の意味に強く傾くため、理由の回答要求として解釈されにくい。（163）は、まだ疑問の機能を残しており、相対的に批判・非難の機能がそれほど強くはない。

#### 7.1.5 まとめと問題提起

日本語記述文法研究会（2003）は非難を表す疑問文の形式特徴や非難という機能の定義および形成を述べている。中崎（2005）は、非難を表す疑問文を主たる対象として考察しているのではなく、終助詞「よ」の機能を議論している。そのうち、疑問型情報受容文に接続する「よ」が、話し手が「不快である」といった心的態度を表すと指摘している。天野（2011）は、＜何ヲ＞と＜何ガ＞という構造を持っている疑問文が＜とがめだて（非難）＞の意味を有していることについて考察している。加藤（2015b）は、発話行為論の観点から、疑問文発話における非難という発話内的な力の生成について論じている。

疑問文については、非難という意味を有している一方、情報の受け入れ（中崎 2005）、発話意図補充要求（天野 2011）と疑問機能の残存（加藤 2015b）も有していることが指摘されている。しかし、反語の意味、行為要求などを有していることについて、先行研究では言及していない。そのため、非難を表す疑問文の全体像を描くため、さらなる検討が必要である。そして、なぜ疑問文で非難を表すのかについても、先行研究ではいずれも議論がなされていない。以上の2点をめぐって、本章では、文脈と推意という語用論の理論を用いて、疑問文という形式で非難を表しているものを取り上げて考察する。

## 7.2 非難の定義と形式上の特徴

本研究では、「非難」を「話し手が事態へ不満の気持ちを表すもの、あるいは相手の行為などを批判するものである」と定義する。非難の対象になるのは、発話場面に存在している聞き手か話題になる人物・事柄のことである。先行研究は、主に非難を表す疑問詞疑問文を対象にしているが、以下では、真偽疑問文と疑問詞疑問文のそれぞれの形式上の特徴を整理しておく。

非難の意味を読み取れる真偽疑問文は、文末に「か」「よ」という終助詞の使用が見られる。(164)～(167)の用例では、「か」「よ」が名詞、動詞および「形容詞＋の」に接続している。

(164) 【家にいた時晶叔父から四葉姉妹の話を聞いて、病院でも他の先生たちからまた四葉姉妹の話を聞いた大門が独り言している場面】

大門「何だ。こっちでも四葉姉妹の話かよ (ㇿ)」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第4話

(165) 倫子「その子のこと、気になってるでしょう (ㇿ)」

国木田「は (ㇿ) いや、変ながきでさ、パイロットの面接で、「何でもやります」とか言って、馬鹿かよ (ㇿ)」

『ミス・パイロット』第1話

(166) 店長「加奈子、お前、何作れるの (ㇿ)」

加奈子「目玉焼き」

店長「それ、料理って言えるかよ (ㇿ)」

『99.9—刑事専門弁護士—』第9話

(167) 【大門が内科部長の了承を得ず、内科部長の患者にオペをしている場面】

大門「第一助手、腸間膜牽引して」

加地「はいよ。勝手にやっちゃって、いいのかよ (ㇿ) まあ、いつものことだけど」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第3話

非難の意味を有している疑問詞疑問文には、(168)のような「を」が脱落されている「何を〔(〇/～ヲ) 動詞句〕」と(169)のような「何が〔名詞句〕よ」の形式がある。

(168) 薫子「何バカなことってんの (ㇿ)」

『失恋ショコラティエ』第1話

(169) 【大門が四葉姉妹の幸運マッサージをしていたが、麻雀で負けたことに対して】

大門「えっ (ㇿ) また (ㇿ) もう、何が幸運のマッサージよ (ㇿ) 全然当たらないじゃん。インチキ姉妹め！」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第4話

そして、(170)は、疑問詞疑問文の文末に「の」を接続し、文末イントネーションが非上昇調を伴っている。(171)は疑問詞疑問文の文末に「だよ」の形式を有している。非難を表す疑問文は、(171)のように、独り言の場合にも使える。

(170)【晴はこっそり千里の背後に現れ、父からもらったバッジをじっと見ていた千里に話しかけた場面】

晴「それって、パイロットのバッジだよな (ㇿ)」

千里「何やってんの (ㇿ) あんた」

晴「ごめん、音がしたからさ。」

『ミス・パイロット』第5話

(171)【画家が死んでいた様子を見た幸平が車に戻って、独りを言している場面】

幸平「何で死んでんだよ (ㇿ)」

『僕のヤバイ妻』第4話

また、(172)～(175)のような文の使用も見られる。

(172)【大門が今明日のオペのことを考えているはずだと思った晶叔父は、知恵の輪をいじっている大門を見た後】

晶叔父「何よ (ㇿ) オペのこと考えてるのかと思ったら、知恵の輪 (ㇿ)」

大門「難しいんだよ、これ」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第6話

(173)【自分が好きな選手ではないことを発見した場面】

店長「プロレスラーの方、来てるよ。」

立花「何だよ (ㇿ) ノアかよ (ㇿ)」

『99.9—刑事専門弁護士—』第9話

(174) 竹内「もう訳が分かんない。何なのよ (ㇿ)」

(175) ようこ「そうだ。沙英ちゃんさ、今度の木曜日のシフト代わってくれない (ㇿ) ちょっと札絵がはいっちゃって」

沙英「ごめんなさい。私その日予定入ってるんですよ。」

ようこ「何だ (ㇿ) お前」

『かもしれない女優たち』

(172)～(175)では、「何よ (ㇿ)」「何だよ (ㇿ)」などの文は、話し手が予想したことと目の前の事実が一致しておらず、その事実が話し手の許容範囲以外に存在する場合に、話し手の失望を表す意味を持っている。失望を表す場合、相手を批判する程度がより弱くなる。このような場合は、相手に対する不満を表す「非難」であると言える。

### 7.3 非難の疑問文の語用論的解釈

疑問文による発話の意味をどのように解釈するのかというのは、語用論が扱う問題で

ある。実際の会話では、発話の意味は文の意味と同一である場合があり、異なる場合もある。文の意味というのは、文形式に由来し、文脈から独立した不変の意味であり、意味論の研究対象である。それに対して、発話の意味は、話し手が伝えようとする意味で、命題内容が文脈との相互作用から生じたものであり、語用論の研究対象である。文の意味はイコール発話の意味とは限らなく、多くの場合、文の意味は発話の意味と異なっているため、発話の意味を引き出すのに推意が必要である。本研究では、疑問文発話における「非難」という意味を解釈するために、加藤（2004）（2009a）の「文脈」および「記憶領域」に関する考えを用いる。

文脈とは何かについて、加藤（2004）では、ある特定の発話の解釈に関わる想定 of 集合全体が文脈となり、情報や知識も、命題も、広い意味ではみな「想定」の一種であると指摘している。加藤（2009a）は、文脈を演繹的なものとして捉え、一次文脈と二次文脈に分けている。加藤によると、一次文脈には、形式文脈、状況文脈と知識文脈がある。二次文脈とは、形式文脈と知識文脈、また、状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して、あるいは、知識文脈の内部で、推論を行うことで新たに得られる想定である。「記憶領域」と「文脈」の関係について、加藤（2009a）では以下の表 20 のように提示されている。

表 20. 加藤（2009a）による「記憶領域」と「文脈」の関係

|      | 保持時間            | 文脈種                             | 容量          | 処理後             | 共有     |
|------|-----------------|---------------------------------|-------------|-----------------|--------|
| 処理記憶 | 有期<br>おおむね数秒を限界 | 文脈化以前の状態<br>（言语音から解釈<br>処理終了まで） | 限界あり<br>容量小 | 処理後の情報は保持しなくてよい | せず     |
| 談話記憶 | 有期<br>おおむね数時間   | 形式文脈・状況文脈 <sup>42</sup>         | 限界あり<br>容量大 |                 | する     |
| 知識記憶 | 永続的             | 世界知識・言語知識 <sup>43</sup>         | 限界なし        | 常に更新状態          | 部分的にする |

<sup>42</sup>加藤（2009a）から引用する。形式文脈は同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなるものである。状況文脈はセッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況を認識することで意味化したものである。

<sup>43</sup>加藤（2009a）から引用する。知識文脈（世界知識）はセッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識にあたるものである。

### 7.3.1 非難の意味形成

(176) 【アメリカでの訓練がまだ終わっていないのに、行方不明の千里を捜すために日本に帰ると言った晴に対して】

晴「日本に帰ります。」

国木田「何言ってるんだ (\\) 最終試験、残ってんだろ (〃) お前、パイロット諦めんのか (〃) 」

晴「じゃあ、千里に万が一のことがあったら、どうするんですか (〃) そんなこと心配しながら、試験なんて受けられないし、受けたって絶対不合格です！」

『ミス・パイロット』第7話

(176) の「日本に帰ります」というのを形式文脈として会話参加者が共有している。そのため、「何言ってるんだ (\\) 」という文の話し手(＝国木田)にとって、「相手が「日本に帰ります」と言っていること」を話し手の談話記憶にあることがわかる。その場合、相手の言っていることが明確になり、話し手が疑問詞「何」に当てはまる情報(＝「日本に帰ります」)を求めている必要がない。

「非難」という意味がどのように生じるかについて、以下のように考えている。(176)における話し手(＝国木田)にとって、「晴がアメリカでは最終試験に参加すべきだ」という知識記憶にある既存の知識が、「晴が今すぐ日本に戻る」という談話記憶にある情報と合致していない。そして、話し手は、「晴が今すぐ日本に戻る」という談話記憶の情報が不適切だと判断した上で、相手の不適切な発話を批判することになった。

このような、先行する形式文脈から話し手の談話記憶に入る情報が、話し手の知識記憶にある既存の知識と相違している場合、話し手は談話記憶の情報が不適切だと判断し、相手を批判・非難するわけである。

(177) 【弟の妻である加奈子は弟の達郎を殺したことを発見した陽子が、加奈子に対して】

陽子「小田直美と一緒に達郎を殺して、どこにやったのよ (\\) 」

『ナオミとカナコ』第10話

話し手は、状況文脈から「犯人が自分の弟を殺してどこかに埋めた」という情報を獲得した。「人を殺すのは社会規範に反する行為である」という世界知識と、「自分の弟が殺されたことが話し手にとって不利益なことである」ということから、話し手が犯人を非難することになったと考えられる。以上見てきたように、非難の形成は、以下の2点に関わっている。

①相手(あるいは第三者)の行為が話し手の利益とは関係がない。しかし、話し手は相手(あるいは第三者)の行為を不適切だと判断している。

②相手（あるいは第三者）の行為が話し手にとって不利益である。

### 7.3.2 非難の強弱

非難の疑問文の文末に終助詞「よ」の出現が多数見られる。終助詞「よ」の意味機能に関する先行研究には、陳（1987）、益岡（1991）、白川（1992）、蓮沼（1996）と大曾（2005）などが挙げられる。蓮沼（1996：386）は、「上昇調の『よ↑』は、聞き手側に認識の欠落がある（あるいは見込まれる）状況で、聞き手における認識能力の発動、および認識形成を指示する」「下降調の『よ↓』は、聞き手、話し手あるいは両者に予め認識の欠落や誤認がある状況で、既有知識や常識的な判断力を動員し、損なわれた認識の回復を指示する」と述べている。白川（1992）は、終助詞「よ」が付加された文の発話が聞き手に向けられていることを明示していると指摘している。大曾（2005：5）は、白川（1992）を踏まえた上で、「よ」の機能について、「話し手が自らの情報、判断、主張、意志等を聞き手に明示的に伝えることである」と規定している。それらの先行研究は話し手と聞き手との間に情報などのギャップがあること、あるいは聞き手目当ての発話であることを明示する「よ」の機能を考察している。

日高（1995）は「よ」の非難の用法を提示している。日高（1995）によると、下降調のヨ文は、「非難したり、なじったりする命令文」「相手に押しつけようとする気持ちを表す場合」「話し手の感情が強く現れる場合」などに用いられる。

（164）'【家にいた時晶叔父から四葉姉妹の話を聞いて、病院でも他の先生たちからまた四葉姉妹の話を聞いた大門が独り言を言っている場面】

大門 a. 「何だ。こっちでも四葉姉妹の話かよ（\）」

b. 「何だ。こっちでも四葉姉妹の話か（\）」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第4話

（164a）は非難の意味を読み取りやすいが、（164b）は不完全受容のみであり、非難の意味を読み取りにくい。「何だ」という形式文脈の存在があり、話し手の目の前の状況に対する不満がやや感じられるが、「こっちでも四葉姉妹の話か（\）」が非難の意味に導くのは難しい。このように、「よ」の付加と省略によって、発話文における非難の強弱の程度が異なっている。

（166）'店長「加奈子、お前、何作れるの（\）」

加奈子「目玉焼き」

店長 a. 「それ、料理って言えるかよ（\）」

b. 「それ、料理って言えるか（\）」

『99.9—刑事専門弁護士—』第9話

（166）では、a と b の違いは「よ」の付加の有無にある。「よ」が文末に付加される a

は文末イントネーションが非上昇調で表される。bは反語を表すために、上昇調しか取れない。bは「それ、料理って言えない」という否定の解釈のみを表し、「よ」を有しているaには相手を批判する不満の気持ちが含まれている。本研究では、このような「よ」は、話し手の不満な気持ちを強く表現するものとして捉える。

### 7.3.3 非難の疑問文の類型

非難の疑問文には、非難の機能のほかに、別の機能を有することがある。以下では、用例を挙げながら、非難の疑問文の下位分類を提示する。

#### 7.3.3.1 回答要求と非難の共存

話し手は、命題内容の情報を持たず、その情報が必要としているのならば、聞き手への回答要求を放棄しない。その場合、疑問文発話が疑問詞に由来する回答要求という機能を有していると同時に、文末の「よ」の付加による非難の機能も果たしている。

(177) ' 【弟の妻である加奈子は弟の達郎を殺したことを発見した陽子が、加奈子に対して】

陽子「小田直美と一緒に達郎を殺して、どこにやったのよ (ㇿ) 」

『ナオミとカナコ』第10話

(178) 【直腸に2つの腫瘍が残っているままにオペを終わらせた大門先生に対して】

加地先生「おい、デーモン。どうなってんのよ (ㇿ) ったく、もう」

『ドクターX～外科医・大門未知子～』第3話

(179) 【弁護士の深山と立花が犯人の接見で刑務所に行った】

深山「早速ですが、ご出身はどこですか (ㇿ) 」

犯人「えっ (ㇿ) 」

立花「何で出身地を聞くのよ (ㇿ) 」

深山「赤木さんのことを知るために」

『99.9—刑事専門弁護士—』第1話

(177) では、話し手の陽子は弟が殺されたことに対して、犯人の加奈子に詰問している。話し手は、弟の屍体がどこに埋められたかという情報を持たないため、犯人にその情報を求めている。(178) では、「2つの腫瘍を切るべきである」というのは話し手の知識記憶の既有知識であり、状況文脈の「大門先生が腫瘍を残す」という情報が不適切だと判断し、大門を批判している。しかし、これから手術がどうなるかについて、その情報を持たないので、執刀医の大門に回答を求めているのである。(179) は、話し手の立花が「犯人に事件のことを聞くべきであるが、弁護に犯人の出身地を聞く必要はない」という知識記憶の既有情報を持ち、「深山が犯人に出身地を聞くこと」という談話記憶の情報を不適

切だと判断し、相手を批判している。同時に、話し手が「何で犯人の出身地を聞くのか」という理由の提示を相手に求めている。

要するに、非難の疑問文には、回答要求の機能が存在しているのは、情報を持たないという話し手の知識状態と話し手がその情報を必要としていることに関わっている。

### 7.3.3.2 不完全受容と非難の共存

不完全受容の疑問文は、真偽疑問文の形式と非上昇調の文末イントネーションをとっている。前にも議論したが、終助詞「よ」の付加が発話文における非難の機能を強めている。

(173)・【自分が好きな選手ではないことを発見した場面】

店長「プロレスラーの方、来てるよ。」

立花 a.「何だよ (↘) ノアかよ (↘) 」

b.「何だよ (↘) ノアか (↘) 」

『99.9—刑事専門弁護士—』第9話

(173) は、「何だよ」という形式文脈があり、「何だよ」自体から、話し手が自分の好きではない選手を見た瞬間にがっかりしている気持ちに対して不満な気持ちを込めて発話していると考えられる。話し手の立花の発話が連続的であり、前面にある形式文脈を考慮した上で、「ノアかよ」の「よ」が省略される場合、「ノアか (↘)」には非難の機能がやや弱まっている。

(180) 【佐田の馬のモデルを壊した明石がモデルの修復を落合に頼んだ。落合が修復後のモデルをオフィスに持ってきた。】

佐田 a.「自分で直さなったのかよ (↘) お前」

b.「自分で直さなったのか (↘) お前」

明石「それが最善の策でございました。」

『99.9—刑事専門弁護士—』第7話

(180) では、「よ」が省略される (b) は、話し手が「馬のモデルを直したのが明石ではなく、落合がだった」という状況文脈から新しい情報を得たことを明示している不完全受容である。「よ」の付加によって、壊れた馬のモデルの修復を他人に頼んだ明石への非難があらかじめ読み取れる。それは、「話し手の不満な気持ちを強く表現する」という「よ」の機能が発動しているからである。

### 7.3.3.3 行為要求と非難の共存

(181) 【加奈子と直美が加奈子の旦那を殺した。加奈子が一人でこっそりと二人に不利なことをした。直美はそれを知っていた。加奈子が直美一人で逃げるようにと勧めている。】

加奈子「警察が動き出すのも時間の問題、一人なら、逃げ切れる。」

直美「どこまで自分勝手なの (ノ)」

『ナオミとカナコ』第10話

(181) では、「どこまで自分勝手なの (ノ)」という文は、形式上から見れば、疑問詞疑問文である。「よ」の付加がないため、形式からそれを非難の疑問文と判断できない。文脈要素を考慮して、話し手の直美が、相手にその回答を求めているのではなく、加奈子が勝手な行動に対する非難の意が推意によって得られる。そして、「もう勝手なことをしないでください」という行為要求の意も得られる。このように、(181) の「どこまで自分勝手なの (ノ)」という発話には、形式に由来する回答要求という発話の力が抑制され、非難と行為要求という発話内的な力が優先して作用している。

(182) 【自殺しようとしている叔父を止めている場面】

吉川「叔父さん！何してるのよ (ノ)」

『クロサギ』第1話

(182) では、目の前に自殺しようとしている叔父を見たため、話し手は「何」に当てはまる情報を求める必要がない。話し手は失ったお金で自殺するのが不適切だと判断し、相手を批判している。疑問詞疑問文の文末に「よ」の付加によって、非難を強く表すことができる。「よ」の付加という形式上の特徴から、話し手の発話における非難の意味が読み取れる。同時に、話し手の発話には、聞き手に自殺を止めてもらうという行為要求も存在している。この場合、聞き手への非難と行為要求が優先して働いており、回答要求が極めて弱いと言える。

### 7.3.3.4 反語と非難の共存

反語の疑問文には、真偽疑問文と疑問詞疑問文両方ある。「ものか」「もんか」などの文末形式が反語として固着されているが、ここでは、反語の解釈が文脈に依存しているものを検討する。

(167) ・ 【内科部長の同意を得ず、内科部長の患者にオペをしている場面】

大門「第一助手、腸間膜牽引して」

加地「はいよ。勝手にやっちゃって、いいのかよ (ノ) まあ、いつものことだけど」

『ドクターX ～外科医・大門未知子～』第3話

(167) では、話し手の加地は大門が部長の同意を得ず、部長の患者にオペをすることを批判している。「いいのかよ (ㇿ)」という発話は、「良くないよ」という否定の意味を伝えている。そして、話し手は他人の患者にオペをすることが不適切だという判断に基づいて、相手を批判している。

(183) 【入社して以来、売れない作家の編集をしてきた自分が、今彼氏に二またをかけられたので、不幸だと言っている竹内に対して】

清水「どこが不幸なのよ (ㇿ) 竹内君だって、今回の映画化の件で社長賞もらえるんだよ。」

竹内「え (ㇿ)」

『かもしれない女優たち』

(184) 【通子が着物姿でパブに入っていることに対して】

由美「そんな恥ずかしい格好で入ってこないでよ」

通子「どこが恥ずかしいのよ (ㇿ) お母さんの制服よ。あなたこそどうせ…」

『隠れ菊』第4話

(183) では、話し手が相手に不幸なことを求めるのではなく、「相手が社長賞をもらえたので、不幸ではない」という否定の意味を伝えている。(184) では、話し手が聞き手に「どこ」に当てはまる情報を求めるのではなく、「着物が制服だから、恥ずかしくない」という否定の意味を伝えている。

(83) ' 【いつも口げんかしている編集担当の貝塚と校閲担当の河野に対して】

部長「お二人は本当に気が合いますね。」

河野・貝塚「どこがですか (ㇿ)」

部長「はい」

『地味にスゴイ 校閲ガール・河野悦子』第3話

以上の3つの用例はいずれも疑問文の文末に「よ」が付加され、非難という機能がその形式に由来している。それらと異なり、(83) の「どこがですか (ㇿ)」という文は、形式上一般的な回答を求める疑問詞疑問文である。しかし、河野と貝塚は普段から良く口げんかをしているため、お互いの知識記憶には、気が合わないという既有情報が存在しているはずである。談話記憶から、「気が合う」という情報が不適切だと判断し、部長の発話を批判している。ここの「どこがですか (ㇿ)」という疑問文は、実際は、「気が合わない」という否定の意味を伝えている。

### 7.3.4 慣習化された定型表現

一般的に、話し手が「何言ってんだ (ㇿ)」という発話をする前に、相手が既に何かを

言っていたことが前提として存在している。日常会話では、相手の発話行為を批判する場合、「何言ってるんだ(よ)」「何言ってるの(よ)(よ)」<sup>44</sup>が頻繁に見られる。加藤(2015a:267)では、「言語形式が文脈によって様々な意味に解釈されることは、私たちが日常的に経験していることであるが、ある形式が特定の推意を引き出す頻度が高くなると、①言語形式の簡略化・省略の動機になり、②推意が補強された結果、固着し、定型表現になって、その推意の解釈を取り消しにくくなるという変化が生じる」と述べている。

「何よ(よ)」、「何言ってるんだ(よ)」などの形式が「相手の不適切な発話を批判する」という推意を引き出す頻度が高くなると、その推意の解釈を取り消しにくくなるため、相手の発話を批判する慣習化された定型表現として捉えられる。

## 7.4 なぜ疑問文で非難が表れるか

「非難」を表す疑問詞疑問文の使用動機には、「①話し手が「非難」を表しながら、「疑問詞」に対応した情報を求める。②話し手が疑問詞疑問文を使用することによって、聞き手に慣習的前提を否定する余地を与えることができる。③疑問詞疑問文を使用することによって、話し手と聞き手とのコミュニケーションがより活発になる」という3つが挙げられる。前節でも説明したが、回答要求と非難という機能ともに存在している疑問詞疑問文がある。そのため、話し手は疑問詞疑問文を用いることによって、欠けている情報を補うために聞き手に回答を求めたり、聞き手の不適切な発言・行動などに対して非難を表したりする。

話し手が疑問詞疑問文の使用によって聞き手に慣習的前提を否定する余地を与える場合の使用動機について用例を挙げて説明する。

「こんな遅くまで、どこに行ってたの(ノ)」という疑問詞疑問文から、「相手がどこかに行ってきた」という論理関係に基づく論理的前提と、「こんな遅くまで、外に出かけるべきではない」という一般常識に基づく慣習的前提<sup>45</sup>が得られる。慣習的前提が世界知識に含まれている。「友達が急病になり、病院に行かねばならないので、出かけた」という返答によって、慣習的前提を否定することができる。話し手は「どこ」に当てはまる情報を持たないため、疑問詞疑問文の回答要求という機能が残存している。その場合は、聞き手が合理的な理由を回答することによって、慣習的前提を否定し、非難の意味解釈を取り消すことが可能になる。

平叙文は、一義的に情報を相手に伝達するものである。疑問文の場合、話し手と聞き手とのコミュニケーションがより活発になるという発話効果がある。

<sup>44</sup> 「何言ってるんだ(よ)」「何言ってるの(よ)(よ)」という言い方には話し手の属性が見られる。「何言ってるんだ(よ)」という言い方が男性により良く使われるが、「何言ってるの(よ)(よ)」という言い方が男女問わず、より一般的である。

<sup>45</sup> 加藤(2004)の用語を援用する。

(185) 【小田課長に対して】

吉井「豚は小田課長です。」

大沢課長「言い過ぎよ。誰に向かって言ってるの (ノ) ?」

吉井「豚」

『エイジハラスメント』第5話

(186) 平井編集長「おい、神崎、どうのことだ (ノ) 花屋敷先生の文庫の件、俺、聞いてねえぞ」

神崎「言った覚えはないからな」

平井編集長「文庫の編集長は誰だと思ってんだ (ノ)」

神崎「お前だ。」

『ゴーストライター』第1話

(185) (186) では、下線部の疑問文は、いずれも相手の行為を批判している非難の疑問文である。非難の発話文が疑問形式であるため、聞き手にとって、発話を解釈する負担が大きくなる。(185) (186) のように、批判された人が自らの発言・行為が不適切ではないと思い、非難という意味の解釈を拒否し、話し手の非難の発話文を通常の回答要求の疑問文として捉え、それに答えることがある。疑問文で非難を表すことが、話し手と聞き手とのコミュニケーションがより活発になるという発話効果に至ることができる。7.3 節では非難の疑問文には他の種類の機能も共存していることを検討した。疑問文を用いて、疑問形式が有している機能を発動させながら、非難も表現できる。このように、一つの文形式で、いくつかの種類の機能を表現できるようになる。

## 7.5 本章のまとめ

本章では、非難の意味機能を有している疑問文を取り上げ、「非難」を定義し、非難の対象を提示した。そして、非難の形成を論じた。さらに、非難を表す疑問文が「非難」以外に、「回答要求」、「不完全受容」、「行為要求」と「反語」の機能を持つことが明らかになった。最後に、疑問文で非難を表す話し手の動機を検討した。

## 第8章 ポライトネスの観点から見る疑問文

我々は会話する時、より円滑なコミュニケーションを行うために、話し手と聞き手との社会的人間関係を判断し、発話文の形式を選択して発話する。ポライトネスとは、相手のフェイスに対する配慮を示す手段である。ポライトネスの観点から見れば、話し手は言語形式を選択する際に、様々なストラテジーを使用している。本研究では、疑問文の使用はポライトネスと緊密に関連しているという言語使用現象に着目し、疑問文による発話においてポライトネス・ストラテジーがどのように言語化されているかを明らかにする。

### 8.1 ポライトネス理論とメタ的なポライトネス

Brown&Levinson (1987) (以下B&L) は、グライスの理論を継承して、会話の協調の原則の補足として、ポライトネス理論を提出した。B&L (1987) のポライトネス理論は、ポライトネスに関する理論の中で最も代表的な理論であり、それに基づいて数多くの研究がなされている。そのため、本研究の理論構築としてB&L (1987) を取り上げる。B&L (1987) は、社会を構成し、能力がある成人のすべてが、ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスを持つと考え、この2種類のフェイスを脅かさないように配慮して会話のやり取りを維持するための手段として、ポライトネス・ストラテジーを挙げている。

negative face (ネガティブ・フェイス) : the want of every 'competent adult member' that his actions be unimpeded by others. (すべての能力ある成人構成員が持っている、自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求)

positive face (ポジティブ・フェイス) : the want of every member that his wants be desirable to at least some others. (すべての構成員が持っている、自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求<sup>46</sup>)

B&L (1987:62)

言語に現れるポライトネス・ストラテジーをポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに分け、それぞれを、「H (の興味、欲求、ニーズ、持ち物) に気づき、注意を向けよ」などの 15 種類と「慣習に基づき間接的であれ」、「質問せよ、ヘッジを用いよ」などの 10 種類を提示している。B&L (1987) のポライトネスはすべて発話内容の性質と言語形式による聞き手に対する配慮を表現するものである。

従来のポライトネス理論によれば、疑問文はネガティブ・ポライトネスを強くコントロールする言語形式であるため、疑問文をよく使用するストラテジーがとられる。話し手が話者交替の要求性の強弱を考慮することで、疑問文の形式を選択して使用することもス

---

<sup>46</sup>邦訳は田中 (2011:80) によるものである。

トラテジーとして捉えられることについて、従来の B&L (1987) のポライトネスと区別でき、メタ的なポライトネスという観点で考察する価値がある。一般的に、疑問文による発話（独話的な疑問文を除外する）は、聞き手に対して回答を要求する力が生じる。これは、話し手が発話権を委譲し、聞き手が発話権を受け取ることによって、話者交替が起こる。仮に聞き手が発話権を受け取りたくない、回答したくない場合、聞き手への回答要求自体は聞き手の自由を侵害することになってしまう。話者交替は音声と認知の分野で多くの研究が行われてきた（前田他（2002）、大須賀他（2006）など）。発話の構文形式と話者交替との関わりについて、加藤（2014）が言及している。また、話者交替によって生じるポライトネス上の問題に関する研究はほとんど見当たらない。発話内容と言語形式によるポライトネス上の問題とは異なり、話者交替によって生じるポライトネス上の問題は、話し手が聞き手に発話権を委譲する際に、聞き手が発話権取得に対する自由度に関わっている。本研究では、B&L (1987) のポライトネスとは区別して、メタ的なポライトネスとして捉える。B&L (1987) をそのまま引用して使うことはできないが、その論説を参考にして、話者交替に対する聞き手の 2 種類のフェイスおよび聞き手の 2 種類のフェイスへの配慮に基づく話者交替によるメタ的なポライトネス・ストラテジーを以下のように定義する。

メタ的なポジティブ・フェイス：聞き手が積極的に会話に参加したい、話し手から発話権を取得したい

メタ的なネガティブ・フェイス：聞き手が会話に参加することを遠慮させてほしい、話し手から発話権の取得を拒否したい

メタ的なポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとは、現在の話し手が積極的に発話権を聞き手に委譲し、話者交替を通じて聞き手を会話へ参加させようとする手段である。

メタ的なネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとは、現在の話し手が聞き手の自由を侵害しないように、発話権の委譲を抑える手段である。

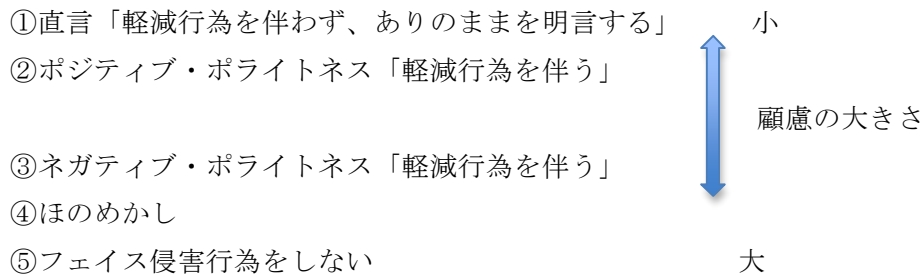
## 8.2 ポライトネス・ストラテジー

疑問文を実際に運用するときに、話し手の聞き手に対する配慮がどのように表現されているかをポライトネスの観点から考察する。

B&L (1987 : 68-71) は、ポライトネス・ストラテジーの階梯を以下のように設定している<sup>47</sup>。本章では、②と③について、疑問文発話における聞き手への配慮について考察する。

---

<sup>47</sup>滝浦（2005 : 154）の訳語を引用する。



滝浦（2005：154）

### 8.2.1 間接発話行為としての疑問文

Searle（1969）は、ある発話行為を別の発話行為によって間接的に遂行することを間接発話行為<sup>48</sup>と呼ぶ。間接発話行為は、その間接性のレベルによって、「慣習的間接発話行為」と「非慣習的間接発話行為」に分かれる。

- (187) a. 窓を開けろ。  
 b. 窓を開けてください。  
 c. 窓を開けてもらえますか (？)

相手に行為を要求する場合、命令形の a、依頼表現の b、疑問形の c が使われる。「窓を開けてもらえますか (？)」という文は、字義的には能力を尋ねる疑問文であるが、それは単なる相手の能力を聞くのではなく、相手に依頼を表現していると思われる。このようなデフォルトの意味が非字義的なものが、慣習的間接発話行為と呼ばれている。疑問形は間接的に要求を表現しているが、命令形と依頼表現は、直接に行為要求の発話行為になる。

それに対して、話し手が「ここ、暑いね」と言っている場合、聞き手は「エアコンをつけてください」「窓を開けてください」などの行為要求として解釈する可能性もあるし、字義通りに話し手が単に「暑い」という事実を陳述しているとも解釈する可能性もある。このような発話がなされた特定の文脈によって、非字義的な意味が生じる発話は非慣習的間接発話行為と呼ばれている。

間接発話行為としての疑問文の使用は、B&L（1987）の「慣習的な間接性に訴える<sup>49</sup>」というネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに当てはまる。以下は、用例を挙げながら、慣習的間接発話行為としての疑問文と非慣習的間接発話行為の疑問文を説明する。

- (188) 【ジムで出会った女性に対して】

<sup>48</sup> Indirect speech act の訳語には、池上・河上（1987）の間接的発話行為、小泉（2001）の間接的言語行為と加藤（2004）の間接発話行為というのがあり、本研究では、「間接発話行為」という訳語を用いる。

<sup>49</sup> 「慣習的な間接性に訴える」というストラテジーの用語は滝浦（2013）の訳語を援用する。

黒崎「あの、一緒にお茶でもどうですか (㇏)」

美咲「悪いけど」

『クロサギ』第2話

(188) では、「一緒にお茶でもどうですか (㇏)」という疑問文は、字義的には一緒にお茶を飲むことに相手の意見を聞くことを表しているが、実際は、間接的に相手に一緒にお茶を飲もうという勧誘を表している。

(189) 【立っている健に対して】

エリ「健、座れば (㇏)」

健「ああ。」

『プロポーズ大作戦』第2話

(190) 【出版社で働く、バーの常連客の清水がウェイトレスのようこが描いた漫画を見た後】

清水「ねえ、これで本出したら (㇏)」

ようこ「いや。出せませんよ。」

『かもしれない女優たち』

(189) (190) では、「座れば (㇏)」 「これで本出したら (㇏)」 という不完全な疑問文は、それぞれ「座れはどう (㇏)」 「これで本出したらどう (㇏)」 という完全な疑問文に復元できる。話し手は、「～ば」「～たら」の条件節を用いて相手にアドバイスを提案している。「座って」「本を出して」などのような命令形式は、相手に直接的に行動を要求することになる。条件節で表される (189) (190) は、相手に提案することによって、行為要求を間接的に表現している。そして、直接的な要求より、間接的な要求は、押し付けがましくないという特徴がある。(189) と (190) は、いずれも慣習的間接発話行為である。

(191) 小田「川原さん、お前んちに泊まっちゃ駄目かな (㇏)」

塚田「はっ (㇏)」

『ゴーストライター』第6話

(191) では、「川原さん、お前んちに泊まっちゃ駄目かな (㇏)」を字義通りに解釈すると、話し手の小田が、「川原さんが聞き手の家に泊まるのが駄目であるかどうか」を聞いていることになる。非字義的には、今のマンションに住むことができなくなる川原のことに悩んでいる小田が、聞き手に「もし駄目でなければ、泊めてもらいたい」という依頼を伝達している。依頼要求をする場合、相手の行動の自由を脅かす可能性がある。(191) では、相手に依頼を申し出る際、話し手が、「駄目であるかどうか」を聞くことによって、願望・依頼を間接的に表現している。

そして、「川原さん、お前んちに泊めてもらえる (㇏)」あるいは「川原さん、お前んちに泊めてもらってもいい(㇏)」などの依頼を表す定型表現は慣習的間接発話行為である。

「川原さん、お前んちに泊まっちゃ駄目かな (ㇿ)」は、依頼を表す表現としての慣習度がそれほど高くないため、非慣習的間接発話行為である。

### 8.2.2 悲観視・楽観視の表現

B&L (1987) のネガティブ・ポライトネス・ストラテジーには、「悲観視する」というストラテジーがあり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーには、「楽観視する」というストラテジーがある<sup>50</sup>。

(191) '小田「川原さん、お前んちに泊まっちゃ駄目かな (ㇿ)」

塚田「はっ (ㇿ)」

『ゴーストライター』第6話

「川原さん、お前んちに泊まっちゃ駄目かな (ㇿ)」では、話し手が駄目ではないことを期待しているが、「駄目である」を聞くことを通じて、相手に拒否の余地を与えているのである。それは、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの「悲観視する」に当てはまる。

(192) 【泰治が慌てて小鳥の部屋に入って、「晴にほれられているかも」ということを小鳥に教えようとしている】

小鳥「急にどうしたの (ㇿ)」

泰治「お前さ、口、堅いよな (ㇿ)」

小鳥「どうかな (ㇿ)」

泰治「堅いって」

『ミス・パイロット』第6話

(192) では、字義的には、話し手の泰治が聞き手の小鳥に口が堅いかどうかについて確認している。非字義的には、話し手は、聞き手に「今から教えることを誰にも言わない」と協力してくれることを期待している。話し手は、相手が協力してくれるだろうと無遠慮ながら期待しているのは、「楽観視する」というポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである。

### 8.2.3 疑問文の文末形式「かな」「かね」の使用

(191) '小田「川原さん、お前んちに泊まっちゃ駄目かな (ㇿ)」

塚田「はっ (ㇿ)」

『ゴーストライター』第6話

<sup>50</sup> 「悲観視する」「楽観視する」というストラテジーの用語は滝浦 (2013) の訳語を援用する。

(191) では、話し手は、「川原さん、お前んちに泊まっちゃ駄目 (〆)」という通常の問いかけ文ではなく、「かな」という弱い問いかけの形式を用いることで、相手に問いかける力を弱め、相手への押し付けを避けている。

(136) 院長「西園寺外科部長、あなたのご見解はどうですかね (ゝ)」  
西園寺「御意」

『ドクターX ～外科医・大門未知子～』第1話

(136) では、「あなたのご見解はどうですかね (ゝ)」と、「あなたのご見解はどうですか (〆)」を比較してみると、「かね」文は聞き手への問いかけを和らげるように感じられる。このような「ね」が発話の力、つまり、問いかけを和らげるという機能を持つと考えている。

上例における「かな」「かね」という文末形式の使用は、回答要求による押し付けがましさを避け、相手の負担を軽減しようとする「負荷 (Rx) を最小化する<sup>51)</sup>」というネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである。

#### 8.2.4 否定疑問文の使用

勧誘・依頼を表す否定疑問形式には、「動詞+なかったか」という「～タ」形および「動詞 +ていないか」という「～テイル」形を用いない。そして、「食べてみる」のように、「みる」が意志動詞のテ形と結びついている場合、「食べてみないか(〆)」あるいは「食べてみませんか (〆)」という否定疑問形式によって、行為の要求が成り立つ。また、「～てくれない (〆)」「～てもらえない (〆)」などのように、授受動詞の否定疑問形式もよく用いられる。

田野村 (1991) によれば、勧誘や依頼を行うときは、肯定疑問文よりも否定疑問文を用いるほうが丁寧な言い方になる。そして、菊地 (1997) では、「意向を尋ねる形をとって頼む場合、否定疑問形のほうが肯定疑問形よりも丁寧な感じがある」ということが指摘されている。また、日本語記述文法研究会 (2003) は、「疑問文による依頼には、否定疑問文によるものと肯定疑問文によるものがある。一般に、否定疑問文の方が肯定疑問文よりも丁寧な依頼になる」と述べている。

勧誘・依頼の場合において、なぜ否定疑問形式のほうがより丁寧なのか、なぜ話し手は肯定疑問形式より、否定疑問形式を好んで用いるのかについて、従来の研究では、相手に不同意的な応答をする余地を与え、相手の心理的負担を軽減するということで否定疑問形式のほうがより丁寧であると言われる (Kageyama and Tamori, 1975-76; 菊地, 1997)。つまり、話し手は相手のネガティブ・フェイスを顧慮しているために、否定疑問形式を用いるのである。しかし、本研究<sup>52)</sup>は、「相手のポジティブ・フェイスを顧慮するために、否定疑問形式を用いるのである」ということを主張する。

<sup>51)</sup> 「負荷 (Rx) を最小化する」というストラテジーの用語は滝浦 (2013) の訳語を援用する。

<sup>52)</sup> 馬 (2014b) の一部の内容を引用して加筆修正したものである。

まず、勧誘の場合について説明する。「コーヒーでも飲みに行きませんか (〆)」という否定疑問文は、「コーヒーを飲みに行くかどうか」という行為の遂行を単に聞くだけの肯定疑問文（「コーヒーでも飲みに行きますか (〆)」）と違い、「相手に来てほしい」という意味が含まれている。それは相手に対して、「すべての構成員が持っている、自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしい」という欲求を満たすものである。そのため、相手のポジティブ・フェイスが尊重されている。

また、依頼の場合を見てみよう。肯定疑問文は無標で、形式上は中立的である。「自転車、直してもらえますか (〆)」という文では、話し手は相手が直してくれるかどうかが分かっておらず、相手の回答も予測できない。つまり、話し手の想定には、「相手が直してくれる」あるいは、「相手が直してくれない」という偏りが存在していない。加藤 (2009b) は、「否定疑問は肯定の返答を期待したり予想したりして発するのが普通である」と指摘している。それによって、否定疑問文は有標で、話し手は「この人が直してくれるだろう」と見込み、「自転車、直してもらえませんか (〆)」という否定疑問で聞くのであると考えられる。直してくれると話し手が期待することで、相手に対して、強い行為要求が生じる。そのため、相手の自由度を奪うことになり、相手のネガティブ・フェイスが脅かされる。逆に考えれば、否定疑問のほうは、話し手は「この人が直してくれるだろう」と信用しているのである。このような「信頼」というのは、相手を認めることであるため、相手のポジティブ・フェイスが守られる。

### 8.2.5 共感形成要求の疑問文

(79) '課長「ほら、僕自分が、一生「アロハ」なんて言わない人間だと思ってたじゃない (〆) だから最初信じられなくて周り見ちゃったんだよね。」

『きょうは会社休みます。』第1話

(80) '晴「ほら、私朝早いのが苦手じゃない (〆)」

千里「それで辞めたの (〆)」

『ミス・パイロット』第2話

加藤 (2009b) によれば、「ではないか」は、確認要求の形式であるが、(79) (80)、話し手が命題内容に対して聞き手に確認を求めるわけではなく、聞き手との距離感を縮めるために、自らに関する命題内容を聞き手も知っているような前提を設定して、「ではないか」を用いて、命題内容について聞き手の共感を喚起している。そして、滝浦 (2013) は、「新情報提示の地ならし表現としての「じゃないですか」は共感をあらかじめ取り付けておいて自分の話をしやすくするストラテジックな表現であり、共感に訴える点で典型的なポジティブ・ポライトネスの表現である」と述べている。したがって、このような「～じゃないですか」は「共通基盤を仮定する・喚起する・主張する<sup>53</sup>」に当てはまり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして捉えられる。

<sup>53</sup> 「共通基盤を仮定する・喚起する・主張する」というストラテジーの用語は滝浦 (2013) の訳語を援用する。

### 8.2.6 聞き手への関心の表明

(193) 【インターンで編集部に入った吉成が同僚に自己紹介をしている場面】

小夏「編集は初めて (ノ)」

吉成「はい。この前まで TOKAI っていう衣料材料店で働いてました」

レミ絵「だから、自分でリメイクとかしてるんですか (ノ)」

吉成「わかります (ノ)」

(194) 白雪「クロエの新作 (ノ)」

レミ絵「ちょっとママの借りてきちゃって」

(195)

同僚「千奈美ちゃんはもともとファッションの仕事とかしたかったんだよな (ノ)」

吉成「まあね。もう好きなことにこだわってられる年でもないし、現実見ないとね」

『ファースト・クラス』第1話

(193) (194) では、話し手が相手の服装とカバンについて聞いている。(195) では、同僚の人が昔したかった仕事を吉成に聞いている。このように、聞き手の所有物・欲求に関して聞くことを通じて、聞き手に対する関心を表現しているポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして捉えられる。

### 8.2.7 話者交替におけるストラテジー

疑問文には様々な表現形式があり、文末イントネーションは通常の上昇調のほかに、非上昇調でも用いられるため、強い TRP になるものと弱い TRP になるものに分けられる。

(196) 【晴が試験のことで落ち込んでいる千里に話しかけていた場面】

晴 a. 「お腹すいた。今日の晩ご飯、何だろうね (ノ)」

b. 「お腹すいた。今日の晩ご飯、何だろう (ノ)」

千里「うん。」

『ミス・パイロット』第6話

(196) の a では、「だろうね」の使用によって、話し手が聞き手に自らの疑問を共有し、聞き手の考えを間接的に求めている。そして、回答要求と共に、話者交替の要求も出てくる。話し手は聞き手に試験のことを忘れさせるために、積極的に発話権を聞き手に委譲し、聞き手を晩ご飯に関する会話に参加させようとしている。それは、メタ的なポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである。それに対して、b は、話し手が自らの疑問を表明するだけになり、聞き手に発話権を積極的に委譲しようとする姿勢が見られない。

このように、疑問文の文末形式の違いにより、疑問文発話の伝達の効果に差異が生じる。

話し手は疑問文の文末形式を選択することによって、聞き手への配慮を表現できる。

### 8.3 本章のまとめ

本章では、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論と本研究で取り扱うメタ的ポライトネスを用いて、間接発話行為としての疑問文、悲観視・楽観視の表現としての疑問文、「かな」「かね」の文末形式を用いる疑問文、否定疑問文、共感形成要求の疑問文、聞き手への関心を表現する疑問文と話者交替に用いる疑問文を挙げながら、疑問文という言葉形式がポライトネス・ストラテジーとしての使用を考察した。

## 第9章 おわりに

本章は本研究の全体のまとめを行った後、残された今後の課題について述べる。

### 9.1 全体のまとめ

本研究は、「日本語疑問文の統語語用論的研究」というテーマのもとに、疑問文の実際の運用に着目し、会話に使われる疑問文の形式といった統語的特徴、発話として用いる疑問文が有している語用論的機能をめぐって論を展開してきた。本研究の主体を「日本語疑問文の記述と機能分析」と「疑問文の使用動機と談話効果」という2部に分けた。疑問文の実際の使用という課題をめぐり考察は、統語レベル、音声レベルと語用論レベルから行い、それによって明らかにしたことを総括して本研究の結論としたい。

第1部は、第2章から第5章までであり、日本語疑問文の記述と機能分析を行った上で、疑問文の形式の整理、形式による機能の分類ができた。

第2章では、記述文法、音声論、語用論における疑問文の先行研究を整理した。以上の先行研究を踏まえ、本研究における疑問文の定義および認定基準を提案した。続いて、形式上の特徴から、疑問文として取り扱う範囲を完全な疑問文と不完全な疑問文に限定した。テレビドラマ・テレビ番組のセリフを文字化したものを用例として収集し、完全な疑問文と不完全な疑問文に分けて各種類の疑問文の用例数の統計をとった。本研究での疑問文の用例収集および疑問文の使用状況を提示することによって、話し言葉に用いられる疑問文には、様々な形式があり、不完全な疑問文と完全な疑問文でありながら、文末形式を持たないものが多いことがわかった。

第3章では、まず、疑問詞、文末形式および文末イントネーションという疑問文形式上の要素を整理した。そして、「話し手には何らかの情報が欠けている」と「聞き手に問いかけることを通してその情報を獲得しようとしている」という疑問文の本質を満たすかどうかによって、疑問形式と機能の対応関係を「疑問形式で疑問を表す疑問文」と「疑問形式で疑問を表さない疑問文」に分けた。前者には、「疑い」「問いかけ」「問い返し」「命題確認要求」という4つの下位分類があり、後者には、「不完全受容」「知識確認要求」「反語」「共感形成要求」「非難」という5つの下位分類があることを提示した。最後に、疑問文の運用上の要素として、「話し手の知識状態・発話意図」「聞き手の知識状態」「社会的位置関係・発話場面」および「文末形式の使用におけるジェンダー上の差異」という4つを取り上げて議論した。

第4章では、話し手が疑問文で発話することで、聞き手にどのような要求を達成したかという発話意図に基づき、疑問文発話における要求性の有無と要求の種類を考察した。要求性が無化されるものとして、「話し手一人しかいない場面での独り言」「発話場面に話し手以外に誰かがいるにもかかわらず、話し手がその人を聞き手として捉えていない場合の発話」「聞き手に何らかの情報を伝えるための応答」という3つを考察した。要求性

を有している疑問文発話を言語的要求と非言語的要求に大分して、さらに下位分類を行った。言語的要求については、「回答要求」「反応要求」「命題確認要求」「発話権取得の要求」を考察し、非言語的要求については、「行為要求」「共感形成要求」「知識確認要求」「解釈処理要求」を考察した。

第5章では、言語的要求の1つである話者交替の要求を取り上げ、完結している疑問文は全部強いTRPになるという観点の補足と修正として、疑問文の文形式および文末イントネーションの多様性を考慮しながら、TRPの強弱を考察した。話者交替の要求がある疑問文発話は、「疑問文による実質的な発話である」「ターンを終了する際に用いられる」および「話し手は聞き手が発話権を取得することを求める」という3つの条件を満たす必要がある。また、TRPの強さは言語的要求の度合いと連動し、且つ疑問詞、文末形式と文末イントネーションによって決定するため、その3つの要素を考慮する必要がある。

第II部は、第6章から第8章までであり、疑問文の使用動機と談話効果への考察を通して、発話レベルでの疑問文が本来の機能から別の機能が派生されることや、コミュニケーションのストラテジーとして使われていることがわかった。

第6章では、問いかけ的に用いられる「かな」などの独話形式を弱い問いかけとして捉え、「回答可能の想定が必須ではない」「回答不可能な場合でも使える」「問いかけの力を弱める」という3つの語用論的特徴を挙げた。そして、問いかけが使えるのに、問いかけの疑問文を使わず、「かな」などの本来の独話形式を選好する傾向が見られた。それは「負の動機」に当たり、相手に押し付ける感じを与えがちな問いかけの疑問文より好ましいということが1つの動機になると述べた。さらに、「かな」を用いる応答としての疑問文の特殊化会話推意を考察した。また、「かね」の捉え方を検討し、「かな」と「かね」の対人配慮での相違点を分析したところ、先行研究の記述とは異なり、「かな」と「かね」は表現効果に差があった。敬体に接続する「かね」の使用が場面と聞き手への配慮を明示する形式であると結論付けた。

第7章では、非難の意味機能を有している疑問文を取り上げ、「非難」を「話し手が事態へ不満の気持ちを表すもの、あるいは相手の行為などを批判するものである」と定義し、非難の対象になるのは、発話場面に存在している聞き手か話題になる人物・事柄であることが判明した。先行する形式文脈から話し手の談話記憶に入る情報と、話し手の知識記憶にある既存の知識が相違している場合、話し手が談話記憶の情報が不適切だと判断し相手を批判することによって、非難の形成は、①相手（あるいは第三者）の行為が話し手の利益とは関係がないが、話し手は相手（あるいは第三者）の行為を不適切だと判断していると、②相手（あるいは第三者）の行為が話し手によって不利益であるという2点に関わっていると論じた。さらに、非難を表す疑問文が「非難」以外に、「回答要求」「不完全受容」「行為要求」「反語」の機能を持つことが明らかになった。最後に、疑問文で非難を表す話し手の動機を検討した。

第8章では、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論と本研究で扱うメタ的ポライトネスを用いて、間接発話行為としての疑問文、悲観視・楽観視の表現としての疑問文、「かな」「かね」の文末形式を用いる疑問文、否定疑問文、共感形成要求の疑問文、

聞き手への関心を表現する疑問文、話者交替に用いる疑問文を挙げながら、ポライトネス・ストラテジーとしての疑問文という言語形式の使用を考察した。

本研究の成果は、次の４点にまとめることができる。

1. 従来の研究は、疑問文が本来の機能である「問いかけ」「疑い」を中心に論じているが、本研究は、文脈を加えて、推意で得た「反語」「非難」などの疑問文の派生的機能を分析した。
2. 発話レベルでの聞き手に対する要求の諸相によって、疑問文発話の分類を行った。
3. 疑問文発話と話者交替の関係を論じる先行研究が見られず、本研究は、両者の関係を提示した。話者交替におけるメタ的なポライトネス・ストラテジーを提案した。
4. 話し言葉の用例資料を収集することを通して、疑問文の形式上の特徴と疑問文の使用状況が確認できた。

以上は本研究の独創的な研究成果であり、疑問文の語用論的研究における新たな研究課題として議論する価値があると思われる。本研究で収集した用例に自然会話の資料の収集を加えることは、将来的には現代日本語の話し言葉のデータベースの構築にも貢献すると考えられる。

## 9.2 今後の課題

以上、本研究の成果をまとめてきた。しかしながら、本研究で解決できなかった問題も多く残されているため、本節ではそれらの問題を今後の課題として提示しておく。

第一に、「そいつ、何様なんですか (ノ)」という文における「何様」という疑問詞が、マイナス的な意味を有していることが本論文で考察できなかった。本研究では、「何よ (ㇿ)」のような非難の意味を表す疑問文を取り扱ったが、「何様」が「何よ」と同じような働きをするかどうかについて、検討する必要がある。

第二に、「2人の結婚について話し合うんだったら、三人だけじゃ、駄目なんじゃないかしら (ㇿ)」という文のような、複数の文末形式が用いられる用例が多く見られる。本研究では、文末最後の形式を取り上げて、それらの形式と文末イントネーションの共起を検討したが、このような複数の文末形式が用いられる場合、機能的には、どのような変化が生じるかについて考察する必要がある。本論文では触れていないが、今後の課題としたい。

第三に、テレビドラマおよびテレビ番組で使われるセリフを分析の用例として文字化し、文末イントネーションを上昇・非上昇に分けて表記したが、上昇・非上昇の程度が緩いか激しいということを考察しなかった。話し手の発話意図を分析する際に、文末イントネーションが重要な要素であり、より厳密な議論になるため、データに対して音響的分析を加える必要がある。それらのイントネーションの違いで示される意図の相違について、日本語母語話者に対する意識調査を行いたい。

第四に、本論文は、用例資料をテレビドラマおよびテレビ番組にしたが、実際の運用

における疑問文の諸相を確認するため、これからは自然な会話データを収集する必要がある。

以上述べたように、今後の研究では、個別の課題に対する考察を深めることが必要である。そして、より厳密な議論になるため、用例資料の収集を改善し、疑問文の使用に関する意識を調査することを通して、疑問文の研究を解明することに貢献ができると考えられる。

## 参考文献

- 安達太郎（1999）『日本語研究叢書 11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 天野みどり（2011）『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
- 案野香子（2003）「＜反語＞のモノカ文の表現機能：動詞句を中心に」『静岡大学留学生センター紀要』2 pp.13-24
- 案野香子（2014）「現代日本語反語の専用形式：「たまるか」「ものか」「（人名詞）があるか」『言語文化学研究』9 pp.53-69
- 池谷知子（2012）「終助詞「っと」「っけ」の機能：「っと」「っけ」で表現される私的領域内情報と目に見えない聞き手」『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス』15 pp.11-25
- 石黒圭（2013）『日本語は「空気」が決める』光文社新書
- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』大修館書店
- 井出祥子・植野貴志子（2012）「場の理論で考える配慮言語行動」『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房 pp.29-50
- 井上優（2002）「是吗？に関する覚え書」定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房
- 井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書
- 今田滋子（1998）「日本語の疑問文末「か」のイントネーション再考：テレビ談話資料を中心に」『広島大学日本語教育学科紀要』8 pp.23-31
- 宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 B（課題番号 20320072）研究成果
- 榎本美香（2007）「日本語におけるターン構成単位の認知メカニズム」『社会言語科学』9（2） pp.17-29
- 榎本美香・伝康晴（2011）「話し手の視線の向け先は次話者になるか」『社会言語科学』14（1） pp. 97-109
- 大鹿薫久（1990）「疑問文の解釈」『語文』55 大阪大学国語国文学（編） pp.17-26
- 大須賀智子・堀内靖雄・西田昌史〔他〕・市川熹（2006）「音声対話での話者交替/継続の予測における韻律情報の有効性」『人工知能学会論文誌』AI 21 pp.1-8
- 荻野綾（2012）「肯定疑問文を用いた依頼表現と否定疑問文を用いた依頼表現の日英差異に対する一考察：ポライトネスの視点から」『The JASEC bulletin』21（1） pp.17-31
- 大曾美恵子（2005）「終助詞『よ』『ね』『よね』再考ー雑談コーパスに基づく考察ー」『言語教育の新展開：牧野成一教授古稀記念論集』鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ（編）（シリーズ言語学と言語教育, 4）ひつじ書房 pp.3-15
- 呉泰均（2012）「場面形成上の聞き手待遇における「聞き手」の捉え方」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』12 pp.209-220

- 尾上圭介（1998）「一語文の用法-“イマ・ココ”を離れない文の検討のために」『東京大学国語研究 室創設百周年記念 国語研究論集』汲古書院
- 加藤重広（2002）「言語使用者における動機のあり方について」『富山大学人文学部紀要』36 pp.43-49
- 加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社
- 加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社
- 加藤重広（2009a）「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128 pp.195-223
- 加藤重広（2009b）『その言い方が人を怒らせる—ことばの危機管理術』ちくま新書
- 加藤重広（2011）「世界知識と解釈的文脈の理論：ネオ・グライス語用論の再構築」『北海道大学文学研究科紀要』134 pp.69-96
- 加藤重広（2012）「言語学の知恵」『日本語学』11 明治書院 pp.4-15
- 加藤重広（2014）「日本語の語用特性と複文の単文化」『日本語複文構文の研究』益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦（編）ひつじ書房 pp.495-520
- 加藤重広（2015a）「構文推意の語用論的分析：可能構文を中心に」『北海道大学文学研究科紀要』146 号 pp.259-293
- 加藤重広（2015b）「発話的な効力と発話内的な効力—日本語の疑問形式を出発点に—」『日本語語用論フォーラム 1』加藤重広（編）ひつじ書房 pp.27-56
- カノックワン・ラオハブラナキット（1999）「疑問文文末形式「否定辞+カ」の意味と用法」『日本語と日本文学』28 筑波大学 pp.15-25
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』大修館書店
- 菊地康人（1997）『敬語』講談社
- 菊地康人（2003）『朝倉日本語講座 8 敬語』北原保雄（監修）朝倉書店
- 金水敏（2012a）「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』89（11）pp.76-89
- 金水敏（2012b）「日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無」『語文』99 大阪大学国語国文学会 pp.57-45
- 工藤聡子（2006）「疑問文の終助詞「か」の付加と省略について—語用論的観点から—」『第9回大会発表論文集』2 pp.235-238
- 熊井浩子（2014）「文末表現「かね」の用法について：Politeness の視点から」『静岡大学国際交流センター紀要』8 pp.1-27
- 熊野七絵（1999）「文末の「かね」の意味・機能--「疑いの表現」としての位置づけ」『広島大学留学生センター紀要』10 pp.31-41
- 熊野七絵・長岡順子・今田滋子（1999）「東京語の疑問文末詞「か」のイントネーション：『しんにほんごのきそⅠ』の会話文読み上げ資料の音響的分析を中心に」『広島大学日本語教育学科紀要』9 pp.9-16
- 現代日本語研究会（2011）『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』ひつじ書房
- 小泉保（2001）『入門語用論研究—理論と応用—』研究社
- 郡史郎（1997）「日本語のイントネーション」『日本語音声 2—アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂 pp.169-202

- 郡史郎 (2003) 「イントネーション」 上野善道 (編) 『朝倉日本語講座 3-音声・音韻』 朝倉書店 pp.109-131
- 郡史郎 (2015) 「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」 『言語文化研究』 41 大阪大学大学院言語文化研究科 pp.85-107
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』 東京堂出版
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞-用例と実例-』 国立国語研究所報告 3
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) -対話資料による研究』 秀英出版
- 木暮律子 (2001) 「日本語学習者の発話権取得に見られる特徴-情報提供発話を受け継ぐ場合-」 『第 12 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』 pp.81-86
- 木暮律子 (2002a) 「母語場面と接触場面の会話における話者交替-話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得-」 『言葉と文化』 3 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp.163-180
- 木暮律子 (2002b) 「話者交替における発話の重なり-母語場面と接触場面の会話について-」 『日本語科学』 11 国立国語研究所 pp.115-134
- 小室郁子 (1995) 「“Discussion”における turn-taking-実態の把握と指導の重要性-」 『日本語教育』 85 日本語教育学会 pp.53-65
- 小山哲春 (1997) 「文末詞と文末イントネーション」 『文法と音声』 音声文法研究会編 くろしお出版
- 斎美智子 (2001) 「「はたらきかけ」をあらわすシナイカ」 『人間文化論叢』 4 pp.167-176
- 佐藤雄亮 (2010) 「「のではないか」における〔質問〕と〔疑い〕の差異--BCCWJ の用例分析から」 『日本語文法』 10 (2) pp.93-108
- 白川博之 (1992) 「終助詞『よ』の機能」 『日本語教育』 77 日本語教育学会 pp.36-48
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』 くろしお出版
- 千昊載 (1993) 「現代日本語における行為賦課表現の研究—『丁寧さの原則』に基づいて—」 『東北大学文学部日本語学科論集』 3 pp.49-60
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」 『談話行動の諸相：座談資料の分析 (国立国語研究所報告 92)』 pp.68-106
- 鈴木睦 (1989) 「聞き手の私的領域と丁寧表現-日本語の丁寧さは如何にして成り立つか-」 『日本語学』 8 (2) 明治書院 pp.58-67
- 泉子・K・メイナード (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- 泉子・k・メイナード (2001) 「日本語文法と感情の接点-テレビドラマに会話分析を応用して-」 『日本語文法』 1 巻 1 号 日本語文法学会 pp.90-110
- 高梨克也 (2002) 「会話連鎖の組織化過程における聞き手デザインの機能」 『社会言語科学会第 10 回研究大会予稿集』 社会言語科学会 pp.191-196
- 高宮幸乃 (2003) 「現代日本語の間接疑問文とその周辺」 『三重大大学日本語学文学』 14 pp.116-104
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」 『三重大大学日本語学文学』 16 pp.104-92
- 滝浦真人 (2005) 『日本語の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』 大修館書店

- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
- 滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
- 田中典子（監訳）（2011）『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野寿憲・山下早代子（訳）研究社
- 田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152 pp.16-30
- 田野村忠温（1991）「疑問文における肯定と否定」『国語学』164 pp.1-14
- 張雅智（2008）「「～ないか」の用法」『言語科学論集』12 pp.19-35
- 張雅智（2009a）「現代日本語における疑問文の「傾き」-肯定・否定疑問文の機能を通して-」『文化』72（3・4）東北大学文学会 pp.232-215
- 張雅智（2009b）「「～ないか」の確認的な機能-確認要求「～ではないか」との比較を通して-」『文芸研究』168 pp.56-44
- 陳常好（1987）「終助詞-話し手と聞き手の認識ギャップをうめるための文節辞」『日本語学』6-10 明治書院 pp.93-109
- 辻大介（1999）「若者語と対人関係-大学生調査の結果から」『東京大学社会情報研究所紀要』57 pp.17-42
- 鄭夏俊（1997）「「か」疑問文における「か」の省略について」『早稲田日本語研究』5 pp.13-24
- 鄭相哲（1994）「所謂確認要求のジャンイカとダロウ-情報伝達・機能論的な観点から-」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科 pp.27-39
- 中井陽子（2003）「言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示」『早稲田大学日本語教育研究』3 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.23-39
- 中崎崇（2005）「終助詞「ヨ」の機能に関する一考察」『語用論研究』7 日本語用論学会 pp.75-92
- 中島悦子（1997）「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』pp.59-82 ひつじ書房
- 中山治（1989）『「ぼかし」の心理-人見知り親和型文化と日本人-』創元社
- 生井健一（2006）「間接疑問文は本当に疑問文？」『言語文化教育研究』1 pp.17-32 言語文化教育学会
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田義雄（1994）「＜疑い＞を表す形式の問いかけの使用-「カナ」を中心とした覚書-」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科 pp.6-14
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』仁田義雄・尾上圭介・影山太郎・鈴木泰・村木新次郎・杉本武（編）大修館書店
- 任利（2005）「文末の「かしら」と非文末の「かしら」-性差表示の出現位置をめぐる一考察」『筑波日本語研究』10 pp.36-55
- 野田春美（1995）「～ノカ？、～ノ？、～カ？、～-質問文の文末の形-」宮島達夫他（編）『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版 pp.210-219
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

- 橋本進吉 (1948) 『新文典別記』 富山房
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』 岩波書店
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為-『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法-」  
仁田義雄 (編) 『複文の研究』 (下) くろしお出版 pp.389-419
- 蓮沼昭子 (1996) 「終助詞『よ』の談話機能」 『言語探求の領域 小泉保博士古稀記念論文集』 大学書林 pp.383-395
- 畠弘巳 (1982) 「コミュニケーションのための日本語教育」 『月刊言語』 11 (13) pp.56-71
- 林淳子 (2016) 「言語的反応の観点による疑問文の分類」 『日本語学論集』 12 東京大学  
大学院人文社会系研究科国語研究室 pp.376-401 (6-31)
- 馬場俊臣 (1998) 「真偽疑問文形式の従属節をめぐって: 「この文が正しいかが分からない」」 『北海道教育大学紀要』 第一部 A 人文科学編 48 (2) pp.17-31
- 日高吉隆 (1995) 「終助詞「よ」の意味・用法とイントネーション」 『創価大学別科紀要』  
9 pp.28-42
- 平山紫帆 (2015) 「自然会話における終助詞「かな」の用法」 『日本語教育実践研究 = Journal  
of the study of Japanese language education practice』 2 立教日本語教育実践学会  
pp.68-79
- 文化庁 (1997) 『平成 9 年度 国語に関する世論調査』 文化庁文化庁国語課
- 洞澤伸・高木穂菜未 (2012) 「若者たちにおける「～じゃないですか」のコミュニケーション機能: 聞き手の印象と反応」 『岐阜大学地域科学部研究報告』 31 pp.25-41
- ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析-勧誘のストラテジー考察』  
くろしお出版
- 馬穎瑞 (2014a) 「疑いの疑問文の弱い問いかけ性について-語用論的観点から-」 『日本語  
用論学会第 16 回大会発表論文集』 9 pp.353-356
- 馬穎瑞 (2014 b) 「否定疑問形式「動詞+ないか」の使用動機に対する語用論的解釈」 『社  
会言語科学会第 33 回大会発表論文集』 pp.108-110
- 馬穎瑞 (2014c) 「疑問文の文末表現の使用に関する一考察」 『北海道大学大学院文学研  
究科研究論集』 14 pp.173-186
- 馬穎瑞 (2016) 「疑問文発話による話者交替の要求について」 『北海道大学大学院文学研  
究科研究論集』 16 pp.131-150
- 前田真季子・堀内靖雄・市川熹 (2002) 「話者交替における視線とうなずきの分析」  
『言語・音声理解と対話処理研究会』 35 pp.53-58
- 牧原功 (1994) 「間接的な質問文の意味と機能: ダロウカ、デショウカについて」 『筑波  
応用言語学研究』 1 pp.73-86
- 牧原功 (1995) 「疑問表現における「の」の機能の一側面-前提との関わりを中心に-」 『日  
本語と日本文学』 21 pp.22-30
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法-改訂版-』 くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』 くろしお出版
- 又平恵美子 (1996) 「終助詞の研究-「っけ」の機能-」 『筑波日本語研究』 1 pp.21-33

- 三角友子 (2000) 「文末の「ンジャナイ(カ)」の語用的機能」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』 6 pp.17-34
- 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター 文末詞（終助詞）使用実態調査の中間報告より」『日本語とジェンダー』vol.v 日本語ジェンダー学会 pp.23-46
- 南不二男 (1985) 「第2章 質問文の構造」『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』水谷静夫（編）朝倉書店 pp.39-74
- 三宅知宏 (1993) 「派生的意味について-日本語質問文の一側面-」『日本語教育』79 日本語教育学会 pp.64-75
- 三宅知宏 (1994) 「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科 pp.15-26
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89 日本語教育学会 pp.111-122
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェース』くろしお出版
- 宮崎和人 (2005) 『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房
- 宮地裕 (1979) 『新版 文論』明治書院
- 森川正博 (2009) 『疑問文と「ダ」-統語・音・意味と談話の関係を見据えて』ひつじ書房
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- 森山卓郎 (1989) 「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 1 日本語学要説』宮地裕（編）明治書院 pp.172-196
- 森山卓郎 (1992) 「疑問型情報受容文をめぐる」『語文』59 pp.35-44
- 森山卓郎 (2003) 『コミュニケーション力をみがく「日本語表現の戦略」』NHK ブックス 日本放送出版協会
- 森山太郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』仁田義雄・益岡隆志（編）くろしお出版 pp.57-120
- 安田芳子・小川早百合・品川なぎさ (1999) 「現代日本語における男女差の現れと日本語教育-意識・実態調査の分析-」『小出記念 日本語教育研究会論文集』7 pp.73-87
- 矢野安剛 (1989) 「語用論的に見た疑問文」『日本語学』8 明治書院
- 山崎敬一・好井裕明 (1984) 「会話の順番取りシステム-エスノメソドロギーへの招待-」『月刊言語』13 (7) pp.86-94
- 山寄章裕・横森大輔 (2006) 「否定疑問文の語用論的機能に関する考察」『日本語用論学会大会研究発表論文集 (2)』日本語用論学会 pp.135-142
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館
- 山中靖子 (2008) 「現代日本語の性差に関する研究-文末表現を中心に-」『東京女子大学言語文化研究』17 pp.87-100
- 山本裕子 (2004) 「発話を形成する要素についての一考察」『名古屋女子大学紀要』50
- 吉川達 (2002) 「「～じゃないですか」という表現について」山口大学人文学部国語国文学会（編）『山口国文』25 pp.13-22
- 吉田茂 (1994) 「疑問文の諸類型とその実現形式-ノデスカ/マスカ型疑問文の用法をめぐる

- って-」『島大國文』22 pp.1-13
- 米澤昌子 (2005)「終助詞の使用頻度と性差傾向-シナリオを資料として-」『同志社大学留学生別科紀要』5 pp.49-60
- 李麗燕 (1995)「日本語母語話者の会話管理に関する一考察-日本語教育の観点から」『日本語教育』87 日本語教育学会 pp.12-24
- 李麗燕 (1999)「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」：発話順番のやりとりとの関係を中心に」『世界の日本語教育』9 独立行政法人国際交流基金 pp. 221-239
- 渡邊信・赤澤美佳 (2008)「日本語疑問語疑問文の構文パターンと文末イントネーションとの意味的(不)一致」『言語と文明』6 麗澤大学大学院言語教育研究科 pp.49-60
- Bell, Allan.1984.“Language style as audience design”, *Language in Society*, 13-2, 145~204, Cambridge: Cambridge University Press
- Brown, P. & Levinson, S.1987. *Politeness : some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press
- Grice, Paul H. 1975.“Logic and Conversation.” in Peter Cole and Jerry Morgan (eds.)*Syntax and Semantics* , New York: Academic Press, 41-58. (清塚邦彦訳(1998)『論理と会話』勁草書房)
- Huddle Rodney and Geoffrey K.Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*, Cambridge University Press, Cambridge, United Kingdom.
- Kageyama,T.andI.Tamori.1975-76. “*Japanese Whimperatives*.” *Papers in Japanese Linguistics* 4,13-54.
- Kato, Shigehiro.2014. “Insubordination types in Japanese -What facilitates them?- ”.*Asian and African Languages and Linguistics*,Vol.8.pp.9-30
- Leech, Geoffrey N.1983. *Principles of Pragmatics*, London: Longman(池上嘉彦・河上誓作訳 (1987)『語用論』紀伊國屋書店)
- Sacks, Harvey, Schegloff Emanuel A. and Jefferson, Gail (1974) A simplest systematics for the organization of turn taking for conversation. *Language* 50:696-735.
- Searle, John R. 1969. *Speech Acts --An essay in the philosophy of language---*, Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊訳 (1986)『言語行為-言語哲学への試論』勁草書房)

## 用例出典

| 番号 | テレビドラマ                       | 放送期・放送局           |
|----|------------------------------|-------------------|
| 1  | クロサギ                         | 2006 年 4 月 TBS    |
| 2  | プロポーズ大作戦                     | 2007 年 4 月フジテレビ   |
| 3  | 半沢直樹                         | 2013 年 7 月 TBS    |
| 4  | リミット                         | 2013 年 7 月テレビ東京   |
| 5  | ミス・パイロット                     | 2013 年 10 月・フジテレビ |
| 6  | 失恋ショコラティエ                    | 2014 年 1 月フジテレビ   |
| 7  | ファースト・クラス                    | 2014 年 4 月フジテレビ   |
| 8  | 「弱くても勝てます」開成高校野球部のセオリー       | 2014 年 4 月日本テレビ   |
| 9  | アリスの棘                        | 2014 年 4 月 TBS    |
| 10 | きょうは会社休みます。                  | 2014 年 10 月日本テレビ  |
| 11 | ゴーストライター                     | 2015 年 1 月 フジテレビ  |
| 12 | かもしれない女優たち（スペシャルドラマ）         | 2015 年 6 月フジテレビ   |
| 13 | エイジハラスメント                    | 2015 年 7 月テレビ朝日   |
| 14 | 偽装の夫婦                        | 2015 年 10 月日本テレビ  |
| 15 | ナオミとカナコ                      | 2016 年 1 月フジテレビ   |
| 16 | 僕のヤバイ妻                       | 2016 年 4 月フジテレビ   |
| 17 | 99.9—刑事専門弁護士—                | 2016 年 4 月 TBS    |
| 18 | 隠れ菊                          | 2016 年 9 月 NHK    |
| 19 | 地味にスゴイ 校閲ガール・河野悦子            | 2016 年 10 月日本テレビ  |
| 20 | ドクターX ～外科医・大門未知子～            | 2016 年 10 月テレビ朝日  |
|    | テレビ番組                        |                   |
| 1  | おしゃれイズム                      | 20110501 日本テレビ    |
| 2  | 吉高由里子 in 瀬戸内 アート x 絶景 x 島めぐり | 20160921NHK 放送    |
|    | 小説                           |                   |
|    | 『白夜行』                        | 東野圭吾(2002) 集英社文庫  |

## あとがき

本論文は、多くの方々のご指導とご支援により、完成したものです。この場を借りて、感謝の気持ちを表したいと思います。

大学3年生の時、進路を考えていた私は、日本に留学したいと思っていました。大学院の情報を集めたところ、偶然加藤重広先生の研究室のホームページをみつけて拝見しました。先生が研究されている内容とホームページに書かれた「いじげん通信」の文章に引かれて、その時から、いつか加藤先生のもとで勉強できたらいいなあと思うようになりました。その後、夢が叶う日が来ました。先生の受け入れ内諾をいただいたのは2009年12月14日でした。その時は言葉で言い表せない感謝の気持ちがいっぱいでした。修士課程から博士後期課程までの長い間、ゼミ・学会発表、論文の相談・執筆に関して、加藤先生からご親切で熱心なご指導をいただきました。先生のもとで言語学研究に携わった経験は、私にとっての生涯の宝物となりました。日本に来たばかりの頃、先生は何冊もの言語学の本と、凍ってツルツルの札幌の冬道の歩き方も教えてくださいました。振り返ると、先生はいつも色々とお心遣いをしてくれました。今までのご指導、ご恩に対して、改めて厚く御礼を申し上げます。

日ごろからお世話になっている言語情報学講座の小野芳彦先生、池田証壽先生、佐藤知己先生、李連珠先生にご指導・ご助言をいただいたことを、心より感謝申し上げます。そして、博士学位論文の審査では、審査委員として多くのご助言を賜りました加藤重広先生、李連珠先生、藤田健先生に厚く御礼を申し上げます。また、毎回のゼミで貴重なコメントをくださった加藤ゼミの皆様、ネイテブチェックをしてくださった方々、留学のことで悩んでいた私を励ましてくださった大学時代の井尻史子先生、張紅濤先生に深く感謝しております。さらに、経済的な支援をくださった母国と北海道大学に深い感謝の意を表します。将来、何かしらの形で必ずご恩をお返ししたいと思っております。

最後に、いつも温かく支えてくれた家族に心より感謝いたします。

2017年2月 北海道大学言語情報学講座研究室にて

馬 穎瑞